昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一日一回發行）

聖書の眞理

第七十一號

終刊號

主筆　江原萬里

我弱き時強し○悔改と後悔○基督教の根幹○光榮の屈辱　江原萬里
イエス・キリスト審判主としての人の子（下）　高木八尺
鎌倉講演　マタイ傳の目的　藤本武平二
滿蒙熱戰爭熱の流行　三谷隆正
國際主義のために　三谷隆正
現日本は江原君を要する　河合榮治郎
告別式　山田幸三郎
江原萬里君告別式式辭　南原繁
人としての江原君　藤本武平二
江原萬里君を憶ふ　森本慶三
江原萬里君の使命　矢內原忠雄
江原兄に學ぶ　今泉源吉
靈友江原兄を弔ふ　江原萬里
江原萬里君の死を聞きて　江原萬里
祖國と信仰　齋藤宗次郎
日記の中より
臨終
柏木通信（第三十三信）
追憶
書翰
終刊號編輯の後に

昭和八年（1933）十月一日發行

我れ死すとも我が生涯をくだくだしく書きたてたる思ひ出草の如きものを印刷されざるこそ願はまほしけれ。

我は死せず、死するは醜き肉なる我れなり。これは火に附し、又地に委して元の原素に還へらしむべし。

我は死せり、人が死せりと云ふ時に死せず、その前既に死せるなり、キリストの十字架を見上げし其時古き我は死して新しき我は生きたり。新らしき我とは活けるキリストなり、彼我が内に生き給ふ。我が希望、我が喜、皆彼に在るなり、彼我が内に生き給ふその生命、卽ち我なり。故に若し生前の我を書くならばキリストを書けば足る。古き我は十字架に死せり、罪人なる我をくだ〳〵しく書きたりとて、之れ我を恥かしむるのみ。古き我死すは善き事なり、死者をして死者を葬らしめよ。新しき我は死せず、こゝに喜あり、

人の云ふ肉體の死は生命の一段階にして死にあらず、肉なる幕屋毀れなば、新なる衣の天より與へられん。さらば肉體の死に際し、古き我れをさも我の如く思ひ、且つそれに更めて今死せし如く思ひ其の功罪をくだくだしく書きたつるこそ、おこがましけれ、

古き我れに何の善きものあらん、人の讃むる美點すら神の前には汚點なり。

鎌倉講話會ノ後ニ

昭和八年五月廿一日安息日

絶筆

主イエス・キリストを信ずること、是人の至上善

私の一生の経験

八月五日午前三時半

昭和八年八月五日早暁

江原萬里

聖書之眞理
第七十一號
終刊號
昭和八年十月一日發行

我よわき時強し

我が身の弱さを痛切に感ずる時程、聖化される時はない。パウロは云つた。

我は我が蒙りたる默示の鴻大なるによりて高ぶること莫らんために肉體に一つの刺を與へらる。卽ち高ぶること莫らんため我を擊つサタンの使なり。われ之がため三度まで之を去らしめ給はんことを主に求めたるに、言ひたまふ、『わが恩惠なんぢに足れり。わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』。然ればキリストの能力の我を庇はんために、寧ろ大に喜びて我が微弱を誇らん。この故に我はキリストの爲に微弱、恥辱、艱難、迫害、苦難に遭ふことを喜ぶ。そは我よわき時強ければなり。（哥後一一・七以下）

我に能力なく、智慧なく、學問なく、健康なく、財なく、德なく、全く自分の無價値を感ずる時程、我が義でなくして神が傳へ給ふた義、我れ自ら己を潔めるのでなくして神の新生命の聖の存在を知る。

かくして身は病床に臥し病苦に呻吟しつゝも、人々に顧みられず憎まれても、衣食に窮し事業に失敗しても、それに堪える不思議な力が現はれて來ることを感ずる。死も亦厭はしくなくなる。只神の愛の下にその御旨を善とする。出來得るならば主イエスに似たる生涯を送り度しと願ふに至る。その從順、その謙遜、その無私、その愛、その勇氣、それを得れば人生の不幸を嘆かない。

視よ、わが選びたる我が僕、
わが心の悅ぶ我が愛しむ者、
我わが靈を彼に與へん。
彼は異邦人に正義を告げ示さん。
彼は爭はず、叫ばず、
その聲を大路にて聞く者なからん。
正義をして勝遂げしむるまでは、
傷へる葦を折ることなく、
煙れる亞麻（或は燈心）を消すことなからん。
異邦人も彼の名に望を置かん。（マタイ傳一二・一八以下）

意義ある生涯、本當の事業は之によつて完うせられる。

悔改と後悔

悔改は後悔と異なる。後悔は自分の過去にしたことが惡かつたと思ひ、其の結果について心を痛めることである。後悔は益々己か心を蝕み、悔ゆれば悔ゆる程陰欝となり、遂に死に至らしめる。ブラウニング夫人は、人生で一番不幸な言葉は That might have been かくあつたであらうにと云ふ言葉であると云つた。あの時あゝもして置いたならば、又あゝしなかつたならば、今はこうもなかつただろうに、こう云ふ言葉を發せしめる後悔程世に不幸なものはない。それに何の希望もない。先は眞暗である。

悔改は之と全く異なる。後悔が死に至らしめるのに反して、之は救、卽ち新生命に至らしめるものである。『それ神にしたがふ憂は悔ひなきの救を得る（ところの）悔改を生じ、世の憂は死を生ず』（コリント後書七・一〇）である。悔改は後悔なき救に至らしめ、後悔は前途悔改の餘地なき死に終らしめる。兩者全然別物である。

かく結果に於て全く異なる兩者は其の性質も別物である。後悔は自分に對して過去の失策を認めることであるが、悔改は『神にしたがふ憂』、卽ち神に對する罪の自覺に基く。人は何人も神を離れば屹度その生活に違和が生ずる。大きな空虛を生じ、其の行爲を善しとせず、生存は失敗であると思ふに至る。然し乍ら、之を其の本源に遡らず、神に對する罪に歸しないのは後悔の特色である。悔改は之に反し一切の自己の不幸を神に對する分離から來たものとする。而して神の愛を知り、その赦しを認め最善に導き給う恩惠に感じて、自分も善くなり得る希望をもち得、それで悔改め得る。

後悔は人間本來の性情から來る。然るに悔改は其の起原に於ても後悔と異なる。悔改は罪の自覺より始まり、神の赦を知つて將來に希望をもつことに由り完うせられる。故に我等は神を知らず、其の赦し、神の恩惠を感ぜずしては悔改は生じない。神は無條件に我等の罪を赦し給うことがわかつて、我等は悔改め得るのである。人々に悔改めよと云ふ前に、神の恩惠を說くべし。

基督教の根幹

江原萬里

私の解する基督教の根幹は、キリストを信ずる信仰に由る罪の赦免である。聖淨、純潔はそれより派生する自然の結果であつて、それは基督教の根幹ではない。我等の心が常に離れてはならない事は、聖潔を得んとすることになく、罪の赦免を確保する事に在る。

罪の赦免確保とは、我等が現在義人でなく、神に對して罪人であり乍ら、然かもキリストを信ずる故に神より罪なしと認められた事、それを常に心に深く感銘する事である。此の感銘あつて、現在、多くの罪を心ならずも犯しつゝ、然かも神に對して眞に平和がある。前途に恐怖すべき何物もない。それと同時に、キリストと深く交り、その愛を感ずる事篤くして、次第次第に彼の生命が我等の中に灑がれ、我等は純潔、無私、公平、愛の人たり得る。されば現在聖き人でなくとも、其實基督者である。而して基督者である限り、キリストの恩惠に由り、將來必らず聖者たり得る。

此の事が心から解つて、基督教と他の道德教、殊にユダヤ教との根本的差異がわかるのである。基督教はユダヤの律法教を完成する者であるが、その延長ではない。却つてその革命であつた。それ故にイエスは殺され、パウロ其の他の者は迫害されたのである。

罪の赦免が基督教の根幹である事が眞に理解出來て、而して之に據つて立つて、始めて人に自由がある。又完全に獨立がある。自己の良心の苛責より解放せられ、他人の道德的非難より超然たり得る。そして自分の靈魂の救に就いて何人の命をも奉ずる必要なく、此の世の如何なる制度の奴隷でもあり得なくなる。加之、キリストを信ずる信仰により、同じ信仰を有する者の間に完き一致あり、且つその自由と獨立との尊敬がある。眞に社會をその根本から改革する者は實に「聖潔」を根幹とする基督教でなくして、「罪の赦免」を根幹とする基督教である。

然るに若し、「聖潔」を基督教の根幹とせば、聖潔は事實上現世に於て之を完うする事を得ないため、勢、基督教は厭世的宗教となる。早く穢土を棄て、淨土に生れんと願ふて、神の創造し給ふた此の世界に對する感謝がなくなる、罪人のまゝ神は之を義とし給ふことに本據を据える基督教は、聖潔の達成を來世に期待しつゝ、然かも尙現世を無視しない。此の世に於ける義務と責任とを

完うせんことを願ふ。

又若し「聖潔」を基督教の根幹とせば、我等は常に自己の內省者となり、神を仰ぎ、その恩惠を感謝して歡喜讃美の聲を發する代りに、自己の不足を感じ、努力精進に勉め、專ら自己の意志に注意するに至る。その結果は神に絕對に服從せんとして、常にその服從せんとする意志の意識より脫する事を得ず、從つて神を己が凡ての凡とすることが出來ない。

然るに若し、「罪の赦免」を基督教の根幹とする時は自己現在の眞の生活の根據は、自己の聖潔に在るのでなく、又自分が絕對に神に服從せんとの意志にもなく、神の絕對的、何物にも拘束せられ給はざる自由の恩惠に基くものなる事を承認する。その結果は神は我等の自由意志をそのまゝ神のものとし給ひ、眞に全宇宙、神が凡ての凡となり、之に對立する何物もなく、神の國は現出するのである。

此の一事は甚だ重要である。之れカトリツク主義とプロテスタント主義の根本的別れ途である。然かも之を理解する者の甚だ少なく、「人は生れ乍らカトリツクである」事實を知つて悲しむ。

光榮の屈辱

ギリシヤの聖哲ソクラテスは眞に聖者の如く死し、ナザレのイエスは神の子の如く死し給ふた。誰かソクラテスの死の記事を讀んで、その崇嚴、宛も夕日西山に沒せんとして斜陽天を射て、空一面を黃金の海となし、然かもそれが刻々と薄らぎゆきて遂に夕やみに覆はれ、天地靜寂に歸するが如き感を懷かないものはあるまい。然るにイエスは赤裸の身を十字架上にさらし、眞晝の十二時地上偏く暗くなりゆき三時に及ぶころ、天地も劈くる悲叫を放ちて息絕え給ふた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意である。その悲慘、痛苦、山は劈け海はあせ、日は暗く、月は光を發たず、星は空より隕ち、天の萬象悉く震ひ動いた。

イエスの十字架に釘けられ給ひし時、往來の者ども之を見て首を振り、嘲りて云つた「もし神の子ならば己を

救へ、十字架より下りよ」と。祭司長らも亦學者、民の長老らと共に嘲弄して云つた。「人を救ひて己を救ふことと能はず、彼はイスラエルの王なり、いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん」と。まことに彼は全く神に依り賴んだのであつた。然かも神は彼をこの十字架の死より救ひ給はなかつた。イエスは嘗て云ひ給ふた「子を知るものは父の外になく、父を知るものは子また子の欲するまゝに顯すところの者の外なし」（マタイ一一・二七）と。即ち彼を知るものは彼及び彼が啓示を受けし者の外にないと。彼は神と一致し、彼以外に神を表はすものはない、屢々天より、これは我が愛しむ子なりとの聲を聞き給ひしその彼が遂にこの十字架より救はれ給はなかつたのである。この死こそは實に父なる神の聖意であつて、彼は全く之に服從し給ふたのである。

さらば何故の死か。それは人類の罪の刑罰たる死を自ら代りて負ひ給ひし死であつた。これが神の聖意でありイエスは之れに絕對に服從し給ひて、神が如何ばかり我等罪人を憐れみ給ふかを示し給ふたのである。カウパーは歌つて云ふ。

あゝ、嘗てイマヌエルの孤子となり給ひし叫び聲に
その天地は震ひぬ、
只獨り、こだまも響かず、天に向ひて叫び給ひぬ、
我が神よ、我は捨てられぬと。
聖き唇開きて天に向ひて叫び給ひぬ、いやはてに自
ら創造り給ひし者らの內に在りて。
そは、失はれし者らの一人にだにこの凄慘の聲の
無用となるために。

ソクラテスもイエスも共に神に絕對に信賴の死であつた。されどソクラテスは神の正義と愛とを信じて之れに全生命を托して死し、イエスは自ら兄弟と稱ふることを恥とし給はざりし人類の罪に對する神の赦しを信じて、己が生命を捧げ給ふたのである。それ故に何人もイエスの死による己が罪の赦し、神との聖交の回復を信ずれば彼も亦ソクラテスの如く死し得る。されど何人と雖もイエスの如く死することは出來ない。これは只神の獨子にのみ屬する光榮あるその屈辱である、何となれば我等は

この死によりて、宇宙の世嗣となり得るの資格を得たからである。この事を明かにせるものはヘブル書である。

されど今もなほ我らは萬の物の之れ（人類）に服ひたるを見ず。たゞ御使よりも少しく卑くせられしイエスの死の苦難を受くるによりて榮光と尊貴とを冠らせられ給へるを見る。これ神の恩恵によりて萬民のために死を味ひ給はんとてなり。それ多くの子を光榮に導くに、その救の君を苦難によりて全くし給ふは、萬の物の歸するところ、萬の物を造りたまふ所の者に相應しき事なり。

イエスの死の苦しみを受け給ひしことは神の子として大なる屈辱である。然かも聖書は云ふ、この荊の冠こそ榮光と尊貴の冠であると。何となれば彼は己れのために死せず、萬民の贖罪のために死を味ひ給しものであつてこの特權は神の恩惠であり、神の獨子にして始めて有し給ふ特權である。多くの人類を榮光の御國に導き入れ給ふためには、神の宇宙創造の目的であり、その手段として救の君を苦難により全くせしめ給ふは、萬物の歸する所、萬物を創造し給ふ所の者、即ち宇宙の終局目的、その第一原因たる神に於て、眞に神らしきことであると云ふのである。イエスの屈辱の死は實にかゝる光榮の死であり給ふた。

我らはイエス・キリストのこの十字架の死によりて最早罪の刑罰としての死、即ち永遠の死はなくなり、キリストの甦りにより永遠の生命に生くる希望を得たのである。キリスト我がために死して甦り給ひて、最早死の彼岸は滅亡でなく、そこに審判の恐怖はない。我らを待つものは光輝く讃美の里である。神は我等を救ひ給ふにこの十字架を必要とし給ふた。そして我らはこの十字架により救はれたのである。未來の國は　の十字架の基礎の上に立つ。さらば我ら救はれたるものは各々その任に堪ゆるだけキリストと共に此の光榮の屈辱を受くべきである。

イエス・キリスト（十）

江原萬里

一七　審判主としての人の子（下）

イエスはかゝる偉大な自覺を有ち給ふた。然るに彼はユダヤ人の王として生れ給ひ乍ら、王宮に呱々の聲を上げず、大工ヨセフの子としてベツレヘムの宿舍の馬小屋に生れ給うた。彼は終生民衆に伍し、その生活を共にし民衆の惱みを擔ひ、彼等を扶けつゝ、此の地上安住の家なく、世に時めく權力者、宗教家と異なつて「狐は穴あり、空の鳥は塒あり、然れど人の子は枕する所なし」（マタイ傳八・二〇）と云ひ給うた。彼は世の人に捨てられ憎まれてゐる取稅人、娼婦を憐み、彼等の友となり世の人から嘲笑を受け給うた。『人の子來りて飲食すれば「視よ食を貪り、酒を好む人、また取稅人、罪人の友なり」と云ふ』（マタイ傳一一・一九）。彼はユダヤ人が多年その出現を待ち望んだ世を救　眞のメシヤであり給うた。然かも世の人は彼を歡迎せず、彼は弟子たちに告げて『視よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長、學者らに付されん。』（マタイ傳二〇・一八）と云ひ、エルサレムにても亦『なんぢらの知るごとく、二日の後は過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし』（二六・二）と云ひ給うた。而して己が心を籠めて敎へ導きし十二弟子の一人のため、接吻を以て裏切られ、奴隷の身代金をもて敵に賣り飛ばされ給うたのである。

イエスは人の子としてかく己を見給うた。然かもかやうに人に嘲けられ、捨てられ、憎まれ、裏切られ、殺され、此の地上枕するところのない人の子イエスは、かく表面は最も弱く憐れむべき姿で此の地に在り乍ら、その奥底に驚くべき偉大なる神性の自覺をもち給うた。彼の弟子がモーセの律法に違反し、安息日にすまじき事をするとの非難に答へて

安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず、然れど人の子は安息日にも主たるな

り、（マルコ傳二・二四）

と云ひ、己を以て神がユダヤに與へ給ふたモーセの律法以上の者であると公言し給うたのである。

イエスは又人々が中風の者をつれて來て之を醫し給はんことを願ひ求めた時、その信仰あるのを見て中風の者に『子よ、汝の罪ゆるされたり』と云ひ、側に立つて之を聞いた學者たちが心中に『この人なんぞかく云ふか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べき』と論じた時、之を察知したイエスは、中風の者に『起きよ、床をとりて歩め』と命じ給へば、彼は立ちどころに起ち上り歩んで家に歸へつた。此の外見弱々しいイエスは、實に神の外有つことなき罪を赦す權能をもち給うたゆえに罪の結果である病を醫し給うたのである。

而して學者たち、イエスが病を醫すのは神の力によるのでなく、惡魔の力を借るのであると云つた時、イエスは之に答へて

誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦されん。然れど言をもて聖靈に逆ふ者はこの世にても、後の世にても赦されじ（マタイ傳一二・三二）

と云ひ給うた。その意味は多分我が表面を見て、我に神性のある事を認めず、言を以て我に逆ふともその罪は赦される。然るに一度我が中に罪を赦すの權能とその罪の結果なる病を醫す能力とを認め乍ら、榮光を神に歸せずイエスを罵つて之を惡鬼の首の手先とする者は末代までその罪は赦されないとの意であらう。彼の人格の表面は人間の子であつた。然かもその奥底に隱されたる神性、人間以上の尊嚴があつた。この言はその自覺の言と見る外あるまい。

かやうに人々に嘲けられ、憎まれ、地上に枕する處なき弱き人の子イエスは、今は秘められて人の目には隱されて居る。自分の内に在る神性を、全榮光をやがて將來此の地上に顯はす時、即ちキリスト再臨の時彼は全地の罪を審判き、義者を復活せしめ、新天新地を出現せしめ得る確信を有し、自分は明かに神の子であるとの自覺をもち給うた。彼は十字架の上に屈辱の死を受くべき事即

ち『人の子は祭司、學者らに付されん、彼ら之を死に定め、また嘲弄し、鞭ち、十字架につけん爲に異邦人に付さん』と云ひ乍ら同時に之に附け加へて『斯くて彼は三日目に甦るべし』（マタイ傳二〇・一九）と云ひ給うたのは、彼の屈辱の死の彼方に光榮の復活を確信し、且つ復活後再び此の地に來り、彼に敵する者卽ち神に對する罪人を審判し給うことを確信し給うたからである。その時現在の人類社會に終末が來り新天新地が出現する。

弟子たち窃に御許に來り、『われらに告げ給へ、これらの事（エルサレムの陷落）は何時あるか、又なんぢの來り給ふと世の終りとには何の兆あるか』と問うたのに答へて、彼はエルサレムの陷落に關連して、世の終末に再び來りて審判を行ひ、聖徒を集める事を語り給うた。

これらの日の患難ののち、直ちに日は暗く、月は光を發たず、星は空より隕ち、天の萬象ふるひ動かん

その時人の子の兆、天に顯はれん。その時地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる榮光とをもて天の雲に乘りて來るを見ん。又彼は使たちを大なるラッパの聲とともに遣はさん。使たちは天の此の極より彼の極まで四方より選民を集めん（マタイ傳二四・二九―三一）

かくして人の子の審判が開始される。

人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。斯くてその前に、もろもろの國人あつめられん。

彼は諸國人を牧羊者が羊と山羊とを別つ如く別ち、正しき者に『わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創より汝らのために備へられた國を嗣げ』と云ひ、他の者に『詛はれたる者よ、我を離れて惡魔とその使らとのために備へられたる永遠の火に入れ』と云ふ。

此等の記述は詩的表現であつて、一々を文字通りに解することは困難であるが、我等はこの詩的表現によつて遙かによく實體を感知することが出來る。世の終りにキリストは再び此の地上に來り、先には枕するところなかりし彼が、今は全地の王となり、不義を滅ぼし、義者を甦らしめ、萬物を一新し給うと云ふイエスは明かに之を

確信し給うたのである。

イエスは祭司たちに捕へられ、大祭司カヤパの面前に引き出され給うた。ユダヤの最高法院である全議會はイエスを死に定めやうとしたが、死に相當する罪の證據がない。多くの僞證者が出て種々の僞證を爲したが、彼は默念として一言も抗辯しなかつた。大祭司は『人々が汝に對して立つる證據に何も答へぬか』と問へども答へ給はず。己れを死に定めんとして論じ議する人々を前にして只嚴然たる態度を持し、之を默殺し給ふのみ、實に審判しつゝあるものが永遠の正義の上で審判かれてゐるのである。

大祭司はぢれた。それ故性急にイエスに命じた。

『われ汝に命ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか。』

法廷に引き入れられてより今まで彼らのなすがまゝに委せ、默念として之を見やり、只の一言も己を捕へたる不當、己を殺さうと議する不正について發し給はなかつたイエスは、大祭司が神に誓ひて我らに――ユダヤ人の最高議會に告げよと命じた汝はキリスト且つ神の子かとの問に對しては何の憚るところなく、何の秘するところなく、明々白々に自己の確信を表明し給うたのである。曰く

なんぢの言へる如し、

イエスはこれに附加して彼らに云ひ給うた。

かつ我なんぢらに告ぐ、今よりのち、人の子の全能者の右に座し、天の雲に乘りて來るを見ん

之を聞いた大祭司はおのが衣を裂いて云つた。

もう澤山、神を冒瀆する此の言、此の外に何の證人が要ろう。議員諸君、御聞きの通りです。どう思ひます。

議員たち之に答へて『かれは死に當れり』。之でイエスの死は確定した。そこに居合せた者共、イエスの顏に唾し拳をもて搏ち、或者は手掌でぴたぴたをなぐり、「お前がメシヤかい、キリスト君、今お前をなぐつたのは誰だ。知つてるなら云つて見ろよ。」

イエスは實に大祭司から「キリスト、神の子か」と聞

かれ、然りと答へ、且つ將來再び來つて汝らを審判くのは我であると宣言し給うた故に、死罪に確定され給うたのであつた。實に彼はエノク書にあるが如きメシヤであるとの宣言によつて殺され給うたのである。人々は皆枕するところなき浮浪人、食を貪り、酒を好む無賴漢、取稅人、娼婦の友と嘲つた「人の子」が、メシヤ、新天新地を實現する人の子と一諸に考へることを好まなかつた誰がそう思ひ得るであろうか。我等も亦果してナザレの大工の子、千九百年前にユデヤで磔殺されたイエスがそんな人、人にして人にあらず、神の子であり給ひ、再び此の地に來り、我等を審判き、罪ある者を永遠の地獄に義者に永遠の生命を與へ給ふと信ずる事が出來るか。ユダヤの議會はこれを好まなかつた。（現代人も勿論之を好まない）それ故イエスを殺したのである。然かも彼を殺さうとしてその證據を他に求めて得ず、その口實を求めるため彼等が好まない此の二つ、即ち地にて枕するところなき人の子と、地にて審判を行ふ王とを一つにしてお前はそれかと尋ねる外なかつた。　そしてイエスから『なんぢの云へる如し』との確信を得てイエスを殺したのである。實にイエスは此の確言の故に「神の選民」に殺され給うたのである。而して之さへ確言せば必らず殺さるゝことを豫期して之を宣言し給うたのである。

果然イエスは凡の人ではなかつた。彼はエノク書に在る如き人の子であり給うた。然かも亦彼はエノク書の人の子とも異なり、否、エノク書に在る如く超自然的人格なるが故に自ら求めて現在の見すぼらしい姿となりて顯はれ、更に自ら進んで國人に殺され、十字架上に死し給はんとて之を大祭司の前で宣言し給うたのである。こゝに彼の獨創的メシヤたる自覺があつた。之を解するには更らに第三のメシヤ觀即ちイザヤ書五十三章に示されたエホバの僕を知らねばならない。

〔イエス・キリストは未完成のまゝ、此の稿を以て最後となりました。編　者〕

マタイ傳の目的

江原萬里

マタイ傳はペテロが傳道の際語つたイエスの御生涯をその弟子なるマルコが筆錄したマルコ傳と、使徒マタイが親しく師に事へて聞いた敎を書き置いたロギヤの二書を基礎とし、之にマタイ傳の著者が自ら集めたイエスに關する記事を附加して完成した書である。其の基礎としたマルコ傳及びロギアは共に親しくイエスに師事した使徒ペテロ及びマタイから出て居るものであるから、其の記事は眞實であり、そこに書かれて居るナザレのイエスは歷史上本當の人物であつて、決して架空の想像、人間の理想の映畫、神話的人物でない事は既に述べた。

かやうにマタイ傳は各種の材料を蒐集して成つた書であるが、然し乍ら、之は只單に糊と鋏とを以て他の書物を切り繼ぎした一つの編纂書ではない。明白なる一つの眞理を語らんとし、ハツキリした或る一つの目的を以て書かれた一つの著述である。それ故此の目的が明瞭に理解せられなければ、マタイ傳は正當に之を解することは出來ないのである。然らば此の書はどう云ふ目的で書かれたかと云ふに、其の事を知るには此の書の書かれた當時の事情を明にせねばならない。

マタイ傳は何日頃書かれたかその正確な年代はわからないが、最近多くの學者の間に一致する意見は、此の書はエルサレムの陷落、卽ち紀元七十年後、それを相去る事餘り遠くない頃に書かれたものであろうとの事である

ユダヤ人が神聖無比なる神の都、永遠に滅びることなく、こゝからして全世界の民を支配する大君の都としたエルサレム――神の平安（エルサルム）――は紀元七千年の過越節の日に、後ロマ皇帝となつたチタスの率ゐるロマの軍勢に圍まれ、五ケ月の長きに亘る攻擊と防禦に、城壁は奪はれては奪ひ返へし、堡壘は築かれては之を打ち破つたが、糧食の缺乏は市民をして幼兒を殺してその肉を食はしめ惡疫は流行し、極度の困憊のためエルサレムは遂にロマの軍兵のため陷つた。神殿の庭は修羅の巷となり、聖所

は瀆され、血は石段を川のやうに流れ、市は火にて焚き拂はれた。タチタスによればエルサレムの圍まれた日は過越節の當日の事とて各地から參集したユダヤ人の數甚だ多く六十萬人とあり、ヨセーフスによれば百萬人とある。之は餘り信を置き得ないが、兎に角多數のユダヤ人が此の陷落により餓死し、戰死し、虐殺され、殘つた僅かのものは捕虜となつてカイザリヤに於けるサーカスで獅子に食はれて仕舞つたとの事である。

今や史上慘劇の極と云はれるエルサレムの陷落は過去の事となつた。然し乍ら、此の事はユダヤ人には大問題であつた。それはその國が滅ぼされ、首府が廢墟になつて仕舞つたと云ふだけの事ではない。神の都、永遠に神の平安ありと云はれ、こゝからして神の榮光が顯はれて全世界の民を支配すると信ぜられた此の都の荒廢、異邦人が宮の聖所を瀆し、神器を掠奪してロマで陳列され、神の約束の民の多くは殺戮されて最早見る影もなくなつた事は、彼等の宗教の眞理に對する大なる反證ではないか。此の慘事を前にして神は果して在りや、その約束は果して眞實なりや、之れは『眞のイスラエル人』の皆等しく懷く疑問である。

此の時に當り、エルサレムの陷落の際多數の死屍の中に入れられて死者を裝つて都を脫出したサガイの子ヨカナンを首として僅かに殘つたユダヤの指導者たちは、今後ユダヤ人の信仰を如何に建直ほすか、此の民族を全滅から免れしめ、之が父祖以來承け繼いだ大使命を如何にして果すことを得せしめるかについて深く考へるところがあつた。ロマ帝國に反抗して之から獨立する事は最早問題外である。今までの宮は廢れ、民は失せ、彼等がこゝに集まつて昔の通り犧牲を献げ、盛に儀式を擧行して國民精神を涵養する事も亦不可能となつた。爰に於てか彼等はユダヤ人の今後生きる道は只一つ、それは父祖傳來のモーセの律法とそれに關する傳統を嚴守して、全く道德的に生きる事、之である。かくして彼等は國粹保存主義者となり、道德主義者、律法主義者、然り、徹底的にパリサイ主義者となつた。彼等の精神にはノーブルなものが多々あつた。それ故次第に認められ、ユダヤ人の

間に勢力を得るに至つたのである。

然るに之に相對して一つの集團があつた。ユダヤの國粋主義者たちに取つては、エルサレムの陷落は至大の大打擊であり、彼等の信念に對する大なる動搖であつたが此等の一團の民には、それは何等の奇異でも昏迷でもなく、彼等の寧ろその生ずる事の遲かりしを不思議と思ふ程であつた。勿論彼等に取つても、エルサレムの陷落は大なる損失であつた。之がため妻子を失ひ、親を失ひ、友を失ひ、財産を失つた。然し乍ら、此の慘事は彼等の信念を少しも失はせず、却つて之を强めた。

彼等は實にイエスをユダヤ人多年その出現を待ち望んだメシヤ、キリストと信じたものであつた。而して同胞がイエスをキリストにあらずとして之を退け、之を十字架に釘けて殺したその刑罰としてエルサレムの陷落は當然であるとした。彼等の信ずるイエスは既にその生前に之を預言し給うたのである。

あゝエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて擊つ者よ、牝鷄のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき。視よ、汝らの家は廢てられて汝らに遺らん。我汝らに告ぐ、『讃むべきかな主の名によりて來る者』と汝等のいふ時の至るまでは今より我を見ざるべし。（マタイ傳二三・三七―三九）。

イエスの預言は正確に適中した。彼等は今更にイエスをキリストにあらずと云つて之を十字架に釘けた罪の刑罰の如何に嚴肅であるかを知つた。それと共に一層の熱心を以て彼等の上に主の約束し給うたキリストの再臨と彼が持ち來らし給う神の國の出現とを待ち望んだ。

然るに年は一年一年と經過するも舊物依然、世は罪惡の巷にして悲慘は絶えず來るべきもの來らず、期待せる御國は出現せず、彼等の眼の涙は少しも拭はれない。之を以て彼等の中の多くの者は次第にキリストに對する信仰が弱まり、御國の希望が薄らぎ、それに伴うて日常生活がだらしなくなり、不道德が行はれて來た。之を見て彼等の中の他の多くの者は信仰に疑惑を懷くやうになり

之を捨てゝ舊きユダヤ教、卽ちモーセの律法の嚴守によつて御國を來らせんとする主張に歸向しやうとする者も少なくなかつた。又彼等の弱き者はユダヤ教の熱心なる人々から自分の奉ずる教の非難嘲笑するのを耳にし、又直接彼等から迫害されて、次第に信仰を喪失するやうになつた。

之は實にユダヤに於ける基督教の最大の危機であつた此の時に當り、彼等ユダヤ人なる基督者に對して、彼等が信ずるイエスこそ眞のキリストであり、父祖傳來出現を信じて來たメシヤとして神の國を出現せしめる者なる事、彼等の信仰こそユダヤ人の本來の使命を全うするものであつて、舊きユダヤ教に歸へる事は之れはイスラエルの特權を喪失するものである事を明示して、彼等の信仰を固うする必要があつた。

當時彼等の間にイエスに關して多分二つの書物があつた。それは前に述べたところの使徒マタイが筆錄したといふロギア、卽ちイエス語錄、第二はマルコがペテロに師事して筆錄したイエスの御生涯、卽ちマルコ傳之である。此の二つは彼等の間に廣く讀まれ、之に由つて信仰上多くの勵ましを得て居たのであろう。然し乍ら、ロギアはイエスの教を集めたものであつてその御生涯について語るところがない。殊にその受難の死の記事がない。又マルコ傳はイエスの御生涯について簡明に記するも、その數については甚だ僅少であり、且つ此の書はロマに於ける基督者に讀ましめるために書いたもので、ユダヤに於けるユダヤ人にして基督者になつた者には物足らない節がある。

此の頃ユダヤ教が次第に勢力を回復し來り、ユダヤに於ける基督教は度々種々なる批評を受けた。その最も主要なる點の第一はイエスの出生についてゞある。イエスはナザレの村の素性の知れぬ大工の子にして、殊にその出生には不道德が潜みはしないかとの疑、若し彼が本當にメシヤであるならば、彼は明白にダビデの子でなければならないとの批評はその一である。

第二に彼の教はモーセの律法を毀つものであつて、決して神の聖意を示したものでなく、之に遵つて生きること

とは祝福を得る道でないとの批評、第三にイエスがメシヤでない證據は死である。どうしてメシヤが死刑囚となつて十字架上に死することがあろうかと云ふに在る。

彼等はかく云つて基督教を批難し、ユダヤ人はその父祖傳來の國粹たるモーセの律法を嚴守し、之により神の民たる實を發揮すべきであつて、基督教は此の國粹を破る大なる異端であるとしたのである。而してユダヤ人にして基督者となつた者も、次第にキリストに對する信仰は薄らぐと共に、舊き酒、舊き衣を慕ふやうになつたのである。爰に於てか彼等の信仰を明確にする必要上、マタイ傳は書かれたのであつた。かやうにこの書はヘブル書と同じ目的を以て同じくユダヤ人たる基督者に讀ませるために書いたものであつた。

されば此の書はロギア及びマルコ傳の二書を基礎とし之に著者が自ら集めた記事を附加して成つたものであるが、それは單なる編纂ではない。一つの大なる眞理を語つたものである。それは今見るところの世界が我等の理想、我らの願望の世界と遙に異なる樣を見て信仰が動搖してゐる者に對して、人間を信ずる勿れ、神を信ぜよ、我等を支配する者は天に在り、彼を信ぜよ、今の時代に人々の間に盛である誤れる國民的理想、黃金社會の說に捲き込まれるな、イエスは明に我らの救主に在まし、假令、その來り給う時は後れる事あるも、彼の約束は必らず成就し彼に由つて神の國は出現する。彼とそはユダヤ人が父祖傳來國粹として遵守して來たモーセの律法を完成し、彼を信ずる者にして始めて神の民たる事を得る、卽ち眞のイスラエルは舊きモーセの律法を遵守する者でなく、反つてイエスの說き給うた「天國の福音」を信ずる者であると云ふに在る。

滿蒙熱戰爭熱の流行

我が國民の間に近頃滿蒙熱なる熱病が流行し來た。久しく世界的不況の下に沈衰の極に達した我が產業の前途に一道の光明を見出したかの如く、長く靑息吐息の商人勞働者も生色がある。今や國民の眼前に、我が國土の三倍もある廣漠たる滿蒙の野が、我が經濟的活動の地として展開し、鐵道に鑛山に森林に農耕に、新投資が行はれ

んとする氣運が生じた。財界に復興の希望あり、我が國民は、滿蒙獨立國建設進捗の報にときめきつゝある。

之といふのも軍隊の御蔭である。我が軍隊が激寒に堪え、生死を賭して、此の地の支配者たりし軍閥を排除し之を掃滅して居るからである。爰に於てか新聞雜誌は筆を揃へて我が軍隊の忠勇を讃美し、全國民の感謝は　然としてこゝに集中し、忽ち數百萬圓の慰勞金は醵出された。軍隊なる哉、武力なる哉、之に由らずしては何事をも爲し得ず。國民の戰爭熱は次第次第に昂まりつゝある。

平和の蔑視

近く開催の國際軍備縮少會議に列席のため、先般我が全權は國民の熱狂的萬歳裡に出發した。その時、彼等は國民の熱誠なる後援を感謝し、聲明して曰く、「誓つて國民諸士の期待に副はん」と。

そも我が國民の彼等に期待する處、その熱狂的に後援する處の者は何であるか。世界人類の重荷である軍費を節減し、大砲を打變へて鋤となし、軍艦を商船とすることに在るか。否、我が國民の之を欲し、全權の之を期する處は、出來るだけ軍備を縮少しない事である。他國をして軍備を我以上に縮少せしめ、消極的に我が武力を強めんとする事に在る。孰んぞその平和に在らんや。

武力の外に頼む者なし

實に我が國をして今日世界大國の一に居らしめ、東洋の覇權を掌握するに至らしめた者は、我が精鋭なる武力であつた。之を外にして、我が國は世界に誇るべき何者もない。大文學あるなく、大哲學あるなく、大發見、大發明なく、その法制その產業は皆外國の模倣。軍隊こそは唯一の頼むところ、武力に據らずしては滿蒙に經濟的發展が出來ない。されば若し一朝にしてバビロン王ベルシヤザルが見たる如き、壁に大なる指あり、「數へたり數へたり、秤りたり、分れたり」と書かれん時來らば如何に。

劍を元に收めよ

熱狂せる國民よ、暫し心を靜めて聽け。君達が今武神に仕へつゝある其の熱狂を、何故、平和の君に献げざる我が軍隊が極寒と戰ひ、砲煙彈雨に身を曝し、我が滿蒙の權益を擁護し、帝國の生命線を死守する事を讃美感謝するならば、何故、過去に於てそれだけの犧牲、勇氣、財寶を投じて滿蒙の公益を廣め、一般人民を恤み、義しき事を行ひ、以て此の地を世界の平和境とはせざりし。今日の滿蒙事業なるものは、嘗て數萬の生靈と數億の財

帑を費し、國運を賭して護得した滿洲の權益を、神のために、又人類のために用ひず、空しく之を政黨の喰物として投げ與へたゝめの神の罰である。而して今その權益が他より侵害されたとして、周章てゝ再び、武器を以て之を擁護するは何ぞ。

私は恐る。武力確保の後、再び之を我が國民中の我利我利盲者の餌となし、今後この地を更らに大なる戰亂の巷となさずば已まない事を。否、平和を愛せず、正義を行はず、武力に賴ることその事が將來大なる禍の源となろう。

國際主義のために

高木八尺

人が唯一人立ち孤獨となつたときに、初めて新に目開け、曾て味はざる尊い經驗を體驗することが人生の行程に起ると同じ樣に、一國民が獨り起ち、必死の覺悟を以て自己の確信に邁進する時、初めて經驗し得る貴い體驗がある。其の意味に於ては今日の日本國民は測らず國際社會に獨自の行路を開拓すべき地位に立ち、獨立自主の力行を各方面に企てんとして、眞劍であり懸命であらざるを得ないと共に、かゝる時期に於てのみ初めて際會し得る貴い機會に直面してゐると云へる。其の事は本誌其他の諸先生の力說さるゝ所であつて、單に國際聯盟を脫退した日本の外交の問題たるに止らず、日本の宗教界殊に基督教界の當面の重大問題である事は云ふ迄もない私も根本に於ては、我國民の今日逢着して居る經驗の貴さと今日の時代の重要意義とを認めるものである。

言を換へれば私は自らも、日本精神の意義を解し、所謂自主外交の眞蹄を解し、更に歐米臭味を脫却した本來の基督教の建設の重大使命を理解すると自ら信じて居る然しそれにも係らず玆に私の視角から、此の共通の重大問題について一言の寄與を許して頂きたいと思ふ。

我國民の貴い自覺が近代幾多の方面に發露しつゝあり從つて益々一般人心の自信を强め自恃の念を加へつゝある事は、夫れ自身甚だ慶賀すべき事には相異ないが、かゝる傾向には又危險の伴ひ得る事を私は痛感してゐる。

內に確固不拔の自信を懷きながら、外に對して和協の態度を取る事は出來ないものか？　出來ない、と多くの人は意識して答へ、又は實行の上に答へつゝあるものゝ如くである。出來る、又それこそ人の取るべき當然の道である、と私は答へようとする。

例へば日本は聯盟を脫退した。或人は之を以て歐米追

隨外交の清算、アジア聯盟の樹立、白人優越の排擊の時期なりとし、終始抗爭的の態度を以て臨まんとする。

其の背後に存するは、現存平和機構を目して、既に優勝の地位を獲たる白人種の自己存續の爲めの機關なりとする不信任、並に正義の主張は說服の道に依り得ず究極は實力の裁斷に俟つべしとする所謂「力の哲理」である。

然るに事實に於ては、數年來殊に英米の進步的指導者の間に現存國際社會に於る不公正、殊に經濟的不公平の狀態を如何にせば輕減し匡救し得べきかの問題が重大關心事となりつゝある。之を國際聯盟に關聯せしめて云へば、聯盟をして單に國際紛爭の平和的處理の機關たるに止まらしめず、如何にせば國際間の戰爭の原因となるべき狀態の除去に貢獻せしめて其使命をよりよく果さしめ得べきかを考慮する眞面目な態度が漸く識者の間に加はりつゝあつた。

例へば學界、思想界に指導的地位を持ち其言論は實際政治家等の間にも相當重きを爲すコロンビア大學ショットウエル教授、ハーバード大學ホッキング教授等の主張する所はかゝる精神に基くのであり、又「太平洋問題調査會」なる國際機關が數年來努力しつゝある方向も略ぼ同じと云ひ得る。只「調査會」の場合は無論聯盟と異り全然民間私的の機關であり、從つて徹底的に根本問題の攻究討議を敢てすると云ふ大きな特色があるのである。

かゝる場合吾々は、進むべき道は唯一途、之等の眞實な又謙遜な進步的指導者と調和協力の態度に出でて人類の直面する重大危機の打開に努力するにあるのみではあるまいか。

言ふ迄もなく、かゝる指導者の數は餘り多くはない。否寧ろ甚だ少數である。乍然著しい事は之等少數の指導者が如何に隋力を排し固習を超脫して謙虛に根本的に、凡ての問題を再吟味してゐるかと云ふ點である。ホッキング教授は國際問題、人種問題等に關して昨年「世界政治の精神」と題する大著を公にしたが、其中に白人として又米人として驚くべき自己反省の態度を隨所に示してゐる。

日本精神の發露は單に政治外交の方面に止らず、我が基督教界の一角に其の最も熱烈眞摯な發揚があるかに思はれる。乍然茲にも亦、みづから不斷の靈火に導かれ、確固たる自覺の礎に立ちながら、他と共に和協の道を步むと云ふ理想を遂げることは出來ないものであらうか。

多くの人々も既に指摘した通り一兩年來米國の海外傳道事業に對する調査團の報告書は、其の大膽公正の結論によつて、大に內外の識者を刺戟した。ホッキング教授は此調査團長として盡したのであつたが、彼は我國に於

ける所謂無教會主義基督者の存在と其の重要義については最も深い感動を懷いて歸國したものと思はれる。其報告書を見ても、最も優秀なる資格を備ふる傳道者が「東洋に於て、現在の如く作られたる教會の中に迎へ得べからざる（又恐らく將來も容易に迎へ得ざるべき）キリストの追隨者」と協力提携すべき事の必要を高調して居ると解せられる。

翻つて私は寧ろ自己の分野である政治外交の研究の方面に於て聊かながら國際主義の目標に向ふ努力を續けんと欲するものであるが、近時益々痛切に感ずる事は、所謂國際主義なる名稱の徒らに空漠不明なる點である。國際主義者たるが故に皆同志なりとも夢にも考へられない。第一、唯物主義の上に築かるゝ國際主義に對しては言ふ迄もなく對抗せねばならぬ。吾々は飽く迄理想主義の旗の下に吾等の國際主義の陣營を張りたい。凡そ個人間並に國家間の交渉に於て道義心に基く應酬が可能であると云ふ事を以て、人類の最も根本的なる通性と認むる點から吾々の國際主義は發足しなければならないと思ふ。

太平洋問題調査會の國際會議の如きは政治、經濟、文化の各方面の諸問題につき最も徹底的に冷靜に研究に基く見解の交換を盡さうとする企である。そこは能辯な語學者連の社交の集でもなければ、又徒らに外國崇拜的な講壇國際主義者又は衒學者輩の舞臺でもない。それは自覺に溢れる各國民の學究的な公平な大膽な討議懇談の道場である。勿論集り來る百餘人の代表者が所謂十人十色の特色を發揮する所ではあるが、將來益々強く日本人にして基督者なる人々の叫聲がかゝる會合にも聞かるべきでないかと思ふ。

現日本は江原君を要する

藤本武平二

軍部は今を非常時と呼んで軍備の大擴張をなしつゝあります、國際聯盟を脱退した日本は今や正しく非常時であります。隣邦支那は勿論大英國も米國も日本のアジア主義を武力と經濟力とを以て挫かうとして居ります。故に啻に日本が非常時である斗りでなく、歐米も非常時であります。歐洲大陸の低氣壓は獨墺佛國境に現はれ、印度は抗英運動を起し、共產主義は思想界を混亂せしめつゝあります。經濟會議は失敗して、世界主義的な理論は事實に於て破產し、極端な國家主義が之に代りました。今や世界を擧げて非常時であります。

私達は啻に國民として又人類としてだけでなく、基督者として基督教會が亦非常時にあるを知ります。歐米を

通つて日本に來た基督教は今後どうなるでせう。歐米人は決して眞の基督教を解し得なかつた譯ではありません基督教の故に歐米人は彼等の素質以上の文化を作りました。彼等がその長けた物質文明だけで行動しなかつた斗りに地球上の人類はまだ今日位の不幸で濟みました。歐米人は神を舊約の神、民族的の神、軍國的の萬軍の主として見ました、新約の神十字架上の基督を眞に受け容れませんでした。彼等は眞に基督に生きる民となりませんでした、人類愛に依らず、只管戰爭と搾取とを以て繁榮の唯一方法といたしました。世界歷史は彼等の罪惡史であり、世界地圖の色分けは彼等の搾取を物語つて居ります。領土上を太陽の沒する時がないといふ大英帝國の故に弱少數憶萬の民が泣いて居ります、國際聯盟や歐米の敎會で唱へられる平和論も九ケ國不戰條約も凡べて是れ白人の今日の搾取と壓迫とを持續せんがための一方策に過ぎません、今日列强が何をなしつゝあるかを見れば一目瞭然です、決して彼等が平和主義者や非戰論者になつたがためではありません。若し神在まし給はないならば、そして神の義が世の惡に勝ち得ないものならば、現狀は維持され、或は擴大されるでありませう。

然し神は在まし給ひます、そして必ず世に勝ち給ひます、神の造り給ひし地上に斯かる事のいつ迄も許される筈がありません。やがて沒落すべき時の來るは當然であります。今や世界人類が白人の毒牙から解放されんとする瑞徵が東方から現はれつゝあります。人は非常時とて何の目標もなく唯騷いで居りますが、神がその主宰し給ふ宇宙を改造し給はんとて今その御手を下し給ひつゝあるを知る時、我等の心は躍るのであります。

神は大和民族に極東の島々を與へ給ひました。創めに行はれた混血がその後島國の故に純粹に培養されて頭腦に於ても精神に於ても優秀なものとなり、歐米が永年かゝつて築き上げた文化を數十年の內に攝取し、更にその先頭に立つて文化の指導權をすら奪はんとしつゝあります。物質に惠まれないと申しますが、日本は雨を惠まれ野も山も生ひ茂つて樂園の如くであります、瑞穗の國として國民を養うに足る米を惠まれ、四面の海は管理費の要らない大なる養魚場となつて大和民族の營養を保證しつゝあります。あの狹い歐洲に天然の國境もなく二十に近い獨立國が肉食特有の殘忍殺伐な鬪爭を繰り返しつゝあるに比べて、日本は戰國時代を除き、多くの時を精神文明の培養に費しました。

神の御攝理はこれに止まりません、德川の鎖國は天主敎の渡來を拒み、白人の侵入を防ぎ、同時に日本人の南洋を侵略するの機會なからしめました。若し織田豊臣德

川の邪宗禁制なかりせば短期間の傳道でさへ天草の亂を起せし天主教は日本を忽ちカソリック化したでありませう。又造船を禁壓しなかつたなら、支那沿岸を襲ひし海賊は支那南洋を攻略して領土の大擴張を成し遂げたでありませう。

嘗にカソリック化しなかつた事が日本にとり幸であつたのみならず、明治となつて日本へ傳來した新教各派が歐米の輝かしかつた頃少しく榮えたゞけで、日本に於ては何等存在の意義を有しない宗派がその影を殁しつゝある事であります。武士道と大和魂と神道と佛教とによつて準備された日本に當然生るべき眞のキリスト教は今や新裝を以て生れ出でんとしつゝあります。歐米の心ある人々は彼の過去の基督教が遂に全く失敗に終りしを見て今や新興の日本に生れ出づべき新らしき基督教を待望しつゝあるとの事であります。誰がこの重大なる使命を負ふのでありませう。改めて言ふの必要はありません、反パリサイ的、反カトリック的、反宗教的の無教會精神によるイエス・キリストの福音これこそは神が人類指導のために給ひし最大の賜物であり、之れこそは新興日本を救ひ、萬國民を救ふ唯一つのものであります。

よし日本がその天惠によりて益々國力を充實し、勢威を張り、近來益々正義の觀念に於て低下しつゝある米國の有する大艦隊を擊滅して太平洋の制海權を握り、貪慾飽くなき英國を驅逐して、支那へ阿片を賣り、印度人に對し生活必需品鹽の高價な專賣をなすを停止せしめ、南阿の金鑛をトランスバール、ボーア人に返さしめ、歐洲に於ける各國の空軍と陸軍とを縮少せしめて、平和な一聯邦國を形成せしめ得たとするも、若し日本を指導する精神にして、唯單に國家的民族的の古るき小年的島國的の舊態に留まるならば、日本の覇業は一時的のものであつて、速かなる「極東の沒落」を第二スペングラーによつて預言せられるでありませう。新らしき日本には新らしい指導精神を要します、新らしい世界には新らしい指導精神を要します。日本により新らしい世界が生れ、日本人により人類の福祉が增進せられるためには、大和魂と武士道の外に義と愛との福音を要します。

內村先生の說かれたこの福音を、この非常時に、この新たに生れんとする日本と、改造されんとする世界に向つて、病軀をも押して鎌倉の地に絕叫せんとして立たれた江原君こそは現日本の必要とする第一人者でありました。惜しい哉、彼は忽ち斃れました。主は今十字架のみ旗を先頭に立てゝ、進みつゝあり給ひます、日本のため世界人類のため、御業完成のために、私達も献身して聖戰の尊い犧牲となりたくあります。

告別式

八月九日午前九時より東京市淀橋區柏木内村邸内今井館に於いて、故江原萬里君告別の式が執り行はれた。正面に前日鎌倉に於いて荼毘に付せられたる遺骨を安置し、其前に故人の近影と故人他界の二日前に手記せられたる絶筆とが飾られた。文に曰く「主イエス・キリストを信ずること、是人の至上善。私の一生の經驗」と。

定刻御老體の北堂と若き未亡人と九歳の望君を殿とする遺兒二女一男と其の他の近親各位、靜に最前列に着席せられ、式は東大の南原繁教授の司會のもとに開始せられた。先づ司會者によりロマ書八章十八節以下が朗讀せられたる後、故人同窓の信友金澤常雄君の祈禱あり、柏木教友會の鈴木敏元君故人の略歴を紹介したる後を受けて、三谷隆正逝ける親友の爲めの告別の辭を述べた。續いて入間田悌佶君河合榮治郎君及び山田幸三郎君により、住友時代東大教授時代及び鎌倉傳道時代に亘り、故人ありし日の面影を偲ぶべき數々の想ひ出が敬虔に語られた。就中河合教授は故人と一高以來の同窓の親友にして、又故人が東大在任時代の舊同僚である。その語る所は詳細懇切を極めた。最後に塚本虎二君熱切なる祈りを捧げて式は終つた。かくて式は徹頭徹尾友人達の手によりて執り行はれ、眞情溢るゝ友愛葬であつた。熱暑灼くが如かりしにも拘らず、眞摯なる會葬の男女堂に滿ち、故人愛唱の「ちとせのいはよ」ほか二つの聖歌が、全會衆によつて高らかに唱和せられた。折しも帝都は防空演習の最中にして、けたゝましき飛行機の爆音が屋上を去來すること兩三度。洵に故人の眞摯なる苦闘と信賴との一生を記念するにふさはしき告別式であつた。會衆は故人の信仰にいたく勵まされつゝ散じた。

如此して苦難のうちに故人の一生を玉成せしめ給ひし神は、必ずや故人の遺族を放置し給はず、江原家は萬里君の信仰を通して不壞の家産を遺されたるものであることが、天下に明らかにせらるゝ日が來るであらう。きつと來るであらう。讃むべき哉、イエス・キリストの父なる神！　その智慧と力とは測り難き哉。

三谷生記

江原萬里君告別式々辭

三谷隆正

江原萬里君は終に逝きました。若き夫人と一男二女とを後に遺して、御老母なほいますに先立ちました。

この十何年といふもの、萬里君の生活は病苦と生活苦とを相手の不斷の戰ひでありました。或る時は隨分苦戰にも陷つたでありませう。其間いかなる寂しさ、又いかなる焦燥が人間江原を虜にすることがあつたか、それは彼自身と神樣とのみの知る消息であります。然し江原君は終に勝ちました。殊に最近數箇月間のかれの武者ぶりはめざましいものでありました。致命的な疾にむしばまれて居る彼の顏に、奇蹟的な精彩が漲りました。日曜日毎のかれの聖書講演には獨特の生氣と驚くべき自然さとがありました。それは決して痩我慢のつけ元氣ではありませんでした。結核菌にいぢめつけられた彼の咽喉を通して極めて自然に喜びの音づれが語られました。それは眞に基督によりて贖はれし者の、おのづからにして其心より湧き溢るゝところの歡びの言葉でありました。觀る者は眼をそばたてゝ、江原君の斯の決死的な、然し極めて自然な又歡び溢るゝ奮戰ぶりを眺めました。さうして信仰ある者は此事の故に神をたゝへ、信仰なき者は唯茫然として驚きあひました。かういふ風にして、江原君は殆ど死の門をたゝき破るやうにして天の國に凱旋して終ひました。かれのかばねを蔽ふ滿身の創痍は、見る者をして顏をそむけしむるものがありました。然し江原萬里は終に死に勝ちました。今し天に於いてかれのため高らかなる凱旋が奏せられて居ることでありませう。

闘病十餘年、終に病に敗けず、死に呑まれず、基督に倚り永遠の希望を堅持しつゝ眼を閉ぢたといふ事、これが江原君が世に遺した生活と其業績であります。江原君は生來中々覇氣を持つて居りました。若し君が政治家となつて、能く國家百年の大計に參畫し得たならば、それも誇るべき業績でありましたらう。江原君は住友に六年勤務しました。若し君が巨富を運用して、遠大雄偉なる事業計畫を遺し得たらば、それも亦祝すべき業績でありましたらう。若し又君が經濟學者として、千歲不磨の學的業績を遺すことができたらば、以て大に慰むるに足りたでありませう。然しそのどれをも江原君は遺しませんでした。唯その代りに、闘病十餘年にして終に病に敗けず死に呑まれず、永遠の希望を堅持しつゝ天に凱旋しました。唯この勝ちいくさを世に遺しました。

想ひ見よ、茲に江原萬里といふ一人の人間があり、其人間が格別に身體が弱くて、そのため長い間病苦と生活苦との波浪にもまれて居りました。然るにそのかれが、終に何物を以ても毀ち難き不壞の生命を掴み、歡喜と希望とに溢れつゝ、苦難のうちに力强く生き且死んで往きました。さうしてそれを見て、多くの人が信仰に於いて勵まされ、永遠なる天的希望に力づけられました。それは政治も巨富も學問も終に與へ得ない所の永遠的寄與であります。いざといふ場合に眞實頼みになる模範であります。然り、人生に於いて一番眞劍にいざといふ場合、權力や富や學問が何の役に立ちませうか。江原君はかゝる場合眞實に役立つ所の物を掴みました。人はそれを己がものとする時、他の凡てのものを糞土の如くに思ふに到ります。江原君は苦難のうちにそれを掴みました。そうしてそれの爲めに證言しました。其證言を大聲に呼はらんとして最後の力戰を試み、大音聲に證言しつゝたふれました。否、たふれたのでない。そのたふれ方のいかに慰め豊けくあることか。それは正しく凱旋でありました。江原萬里君は眞に基督に倚りて死に勝ちました。さうして人生是以上の勝利はありません。是以上の成功はありません。

御老母さま！萬里君の一生は比類稀な成功の一生でございました。萬里君によりて、江原家の家名は此世ならぬ輝きを得ました。この輝きは永遠に江原家を祝して、他の何物を以てしても加へ得ないやうな光輝を、末永く御一家に與へるでありませう。かゝる家こそ眞の貴族であります。自ら誇つて差支へない貴族であります。

それにしても、後に遺された方々の今後の御勞苦は、並大抵の事ではございますまい。日毎月毎どんなにか御寂しさの加はることでせう。だが御宅の玄關に懸かつてゐる扁額に、南洲の書で貧居生傑士とありました。神様は活きて支配し給ふ。必ずや人の想ひに過ぐる慰めと勵ましとが天から降つて來るでありませう。頼みとする良人と父と亡き後に、眞に頼みになる御方神様がいらつしやいます。夫人よお兒達よ、天父の御護りいつもあなた方の御上にあらんことを。

人若き時に軛を負ふはよし、エホバ之を負はせ給ふなれ
ばひとり座して默すべし。
口を塵につけよ或は望あらん。

人としての江原君

河合榮治郎

江原君は私にとりまして一高以來二十數年の友人でありました。然し私は唯一介の俗人でしかありません、そうして此の永い間俗人としてのみ同君と交渉を持つたに過ぎません。かゝる關係で二十餘年の友情が續けられたのは、一に同君の寛容に基づく者と思ふのであります。基督信徒としての同君に就ては他に語るべき人が多くあるに違ひません。私は俗人としての視角からみた同君を述べやうと思ふのであります。

私が同君を知りましたのは、一高入學當時の英法科の同級生としてでありました。後年同君の性格として顯著に現はれた特質は、此の時にも既に觀取されたのでありました。それは學校の講義に囚はれないで、又周圍の空氣にも支配されないで、自由に又獨立に自己の思想を構成して往かうと云ふ傾向でありました。今でも當時の君の言として耳に殘るのは、君の愛讀書であつたカーライルのサーター・レザータスの中の「永遠の否定から永遠の肯定へ」と云ふ句でありました。大學に入りまして私は同君や高木八尺君と始終教室の席を隣りして居りましたが、同君は講義を聽きながら常に講義より上に超然として別のものを望んで居りました、そして又講義その者を實によく適確に首要の點を把握してゐたと思ひます。此のことがあれほど講義に囚はれないでゐて、而も卒業當時に拔群の成績を獲たことによく現はれてゐると思はれます。

卒業後の方針に就ては尠からず迷つて居られました。それは一つは同君の運命を托するに足る職業を見當らなかつたことによるのと、今一つはある意味に於ては呑氣な投げやりであり又ある意味では神の攝理に任せるといふことから來てるのでせう。暫らく文官試驗の準備をしてゐられましたが、窮屈な官界に身を置くよりも、寧ろ實業界に而も個人的な信頼で働きうる所と云ふことで、住友に決定されました。

人は後年の君の信仰の生活から考へて、身を實業界に置かれたことを異樣に感ずるかも知れません、然し同君には現實の生活に對する興味がありました、又眼前の事務をテキパキと處理してゆく才能とがありました。たとへ君を住友に置くことが最適の場所に置くことではなかつたにしても、又思ひもかけない場所に置くことでもなかつたのであります。住友六年の生活は決して物足りない生活ではなかつたやうです、殊に最後には住友の旁系

會社の北港土地株式會社を創立する爲に隨分努力をされたので、法律の方を清瀨一郎氏が擔任し、經濟や事務の方を君が負擔して、之が爲には朝早くから夜晩くまで精力を使はれたので、後年の病氣は此の勞働に原因してゐるやうに聞きました。

大正十年の春君は上京されまして私に云はれるには、自分ももう六年住友にゐて必要な見習の時代は過ぎた、今迄親の翼の下に育てられた雛鳥は自分獨りで飛べるやうになつた、そうして今一度行途を決定する分岐點に立つてゐる、若し今住友に落付くことにするならば、恐らくもう一生住友を離れないだらうと云ふことでした。その話を聞いた時は恰も東京帝大の經濟學部が獨立して間もない時で、人を必要としてゐたので、同君を學部に迎へやうと云ふ聲が期せずして各方面から起つたのでありました。

かうして君の助教授の就任が議に上つたのでしたが、君が今迄の研究した勞作として私に送られたのは、一つは横濱で荷揚げした貨物をいかにすれば、最も迅速に又最も安價に東京に送れるかと云ふ貨物運輸に關するもので、他の一つは東京のどこに倉庫を設くべきかと云ふ調査で東京灣や日本橋京橋の堀割の運輸系統を調べたものでした。帝大で必要としたのは交通政策の擔任者でありましたが、恰も君の調査したものも期せずして交通に關するものでありました。今でも私は覺えて居りますが、大正十年の七月十三日に教授會は滿場一致で君の助教授任命を決定しまして、それを早速君に通知しました所が同月の廿八日かに君は東京に移轉する爲の荷造りをしてゐる時に最初の喀血をされたのであります。

かくして君の大學教授の生活が病を以て始まつたことは誠に遺憾でありました。然し君は病軀を押して經濟學の研究を始められました、從來の經濟學に精神的のものを加味しやうとして、君の特異の研究は不幸にして完成しませんでしたが、その片鱗は「聖書的經濟觀」の中に現はれて居ります。又たとへ短い間ではあつたにしても學生は今迄の教師とは異る型の教師を教壇に迎へてその感化を受けました、然しそれにも增して君の存在は教授會に於て輝いて居りました。色々の思想が對立する中に於て、公平にして平衡をえた君の意見は各派の人から傾聽され此の人が未來の中心的勢力をなすであらうとは、多くの人の考へたことであつたのであります。私は今に至るも大學が君を充分に活用する機會を持たなかつたことを殘念に思ふのでありますが、君の大學五年の生活は病を以て終始し、君が教壇に立たれたのは正味二年に止まるか知れません。良心的の君は幾度か辭意を漏らされ

ました、然し大學はその辭意を受取らないで、君を大學に留めやうと努めたのであります、然しそれは君に對する一片の同情からではありませんでした。此の人をいつまでも大學に保持して置きたいと云ふ欲求からでした。大學に智者はあり學者はあり論客はあります、然し大學に缺けたるもの――それが最も大學教育に必要であるもの――は最深最奥の人生の問題に若き青年の眼を向けることです、そしてそれこそが正に江原君の提供し得ることでした、その價値を知ればこそ大學はいつまでも君を引き留めて離さず、どうかして健康を回復して大學に盡くすやうにと希望したのであります。當時私は色々の人に會つて同君の辭意を傳へましたが、すべての人が一樣に君の人格を認識し君を失ふことに忍びないのでした。大學が君を引き留めたのは總長も學部長も各教授も少しの無理をしたのでもない、自然の心からの發露でありました。然し遂に大正十五年の秋君の辭意は止まらずして大學の生活から離れました、それから後は基督信徒として專心に精進されたのは、多くの人の知られる如くであります。

今江原君の人となりを回顧します時に、そこに一般の基督信徒と異る特質を見出すのであります、その一つは君が現世の社會の問題に多大の興味と關心とを持たれたと云ふことです。君が實業界に往かれたことも、貨物の運輸や倉庫の設立や土地會社の創立に興味を持たれたことも、大學に於て交通政策の講義を擔當されたことも、一にこゝから來てゐるので、君は決して來世の問題のみを關心して現世を忘れる人ではありませんでした。現世のことをそれ丈で價値ある事とは決して思はなかつた、然し同時に現實の社會に冷淡な無關心ではありませんでした。聞けば君の母方の祖父君は津山藩の改革派に屬して、遂に反對派の爲に暗殺されたと云ふことですが、その血統を受けてゐる爲か、君の中には常に經國濟民の志が躍動してゐました。君と話して談會々國家や社會に及ぶ時に、君の調子は熱を加へて來るのをよく私は記憶して居ります。

君は啻に現世の問題に關心を持つたのみでなく、同時に現世の問題を處理する才能に惠まれてゐました。枝葉に囚はれずに端的に中心の問題を把握する頭のよさ本末を辯じて平衡を失はない物の判斷、生一本で非妥協的でありながら云ふべき時と云ふべからざる時を心得た世渡りの巧みさ、テキパキと事務を執つてゆける手腕、複雜微妙な他人の心理を直感しうる人情味、若い人を世話して倦まない親分肌、すべて之等の美しい性格と能力とは若し君にして志現世の成功者たることにあつたなら、親

分に君を資格付けたに違ひありません。同時に現世の成功者にふさはしい能力の反面に、君は現世の成功者に伴ふ凡悩も乏しくはありませんでした。物質への執着、結果を擧げやうとする野心、他人に對する優越慾、主我的な强情、負け惜しみ、赤裸々の君に觸れた人々は、必ずや之等のものに逢着したでせう。君は生れながらにして平和な純潔な圓滿な性格を惠まれた人ではなくして、凡悩を負はされてゐた人でした。然し之等のものはかの現世の成功者たらしめる能力に當然に附きまとふ反面であり、唯君の能力のみが之を抑制して世を渡る障害たらしめずに終らせることが出來たのです。かくして君は若し自己が甘んずれば、此の世の成功者と謳歌される生涯を辿りえたでせう。

だが幸か不幸か君には全然別の一面を惠まれてゐました。それは君の能力と之に伴ふ凡悩とに、對立し抵抗し闘爭してゆかずんば止まない一面でありました。此の一面が早く君を基督教に向はしめ、又基督教が更に君の一面を鞭つたものでした。その凡悩が常人よりも强かつた丈それ丈君の闘爭も亦常人よりも苦しかつたに違ひありません。私の觀察によりますと、此の內面的爭闘の結果、始めは自己否定自己嫌惡、殊更に自己と反對なものを誇張すると云ふ風に見受けられましたが、晩年の數年に於ては、積極的なるものが段々に影を大きくし、苦しい爭闘の中から光明が輝いて來たやうに思はれました。

すべて戰ひは對立物が强い丈深刻でなければなりませんん、その對立物にふさはしい强さを持つ場合にのみ之を克服することが出來ます。君の戰ひは對立物に比例して悲壯なものでした。然し同時にそれ丈君の信仰には弱さや生優しさがなくて、人を動かす迫力がありました。君の現世的の能力は之に伴ふ凡悩の故に一度は克服されねばなりませんでした、生きんが爲に死なねばなりませんでした。然し再び新しい姿を採つて君の中に躍動してゐました、君が最後にクロンウエル傳を書かうとしたことに深い意味が窺はれると思ひます。君は聖書を讀みながら、現實の中に靈を生かし靈の中に現實の指導を見出してゐたと思ひます。

誠に江原君の四十四年の生涯は戰の生涯でありました而もその戰ひは凡そ人の有する二元的の戰ひでありました。その戰ひをば君は誰よりも深刻に悲痛に戰つたのでありました。そしてその戰ひを勝つて逝かれました、君の姿は今も尙私共を驅つてその戰ひに鞭つやうに思はれるのであります。

江原萬里君を憶ふ

山田幸三郎

『閑靜』といふ語の具象化として見たら眞に絶好な一例ともいふべき扇ケ谷の寓居に、江原君を私が初めて訪ねたのは、同君の病が一時惡化して高熱に苦しんでゐた昭和三年の夏でありました。既にその前から長い間病氣の爲に大學の方も休職にして貰つて、その閑居に專ら療養に從事してゐる身でありながら、『思想と生活』をその前年から刊行して、基督教主義の立場から、震災後の更生日本の青年大衆に向つて呼びかけてゐる憂國の士がその當時の江原君だつたのであります。

併し私が訪問したのはその方の關係からではなく、寧ろ同君の病氣療養に何か參考になるやうな事でも話す事ができればよいといふやうな、個人的な、謂はゞ淺い狹い小さな考へからでありました。といふのは、その義兄にあたる『永遠の生命』主筆黑崎兄から折を見て、一度見舞つてやつてくれないかと言はれ、先に私自身が重症の床にあつた時に思ひがけもなく二度迄も見舞つていただいた恩人の賴みとて、喜びすゝんで訪問したといふに過ぎないのでありました。

いざ會つて見ると、豫て三谷君から聞いて想像してゐた通り果して廿年前の學生時代に內村先生の柏木今井館で時々會つた間柄なる事が一目して相互にわかつたのでありました。私自身は知らないでゐましたが內村先生からも、何れそのうち逗子の山田に賴んで見舞つて貰ふからといふ旨が江原君に宛てゝ言ひ越されてゐたさうであります。

かゝる關係で信仰の方においては、共通の先輩や友人もかなりある事とて、その後我等二人の間の交情は自然に深厚を加へて今日に至つたのであります。

鎌倉の地が我が國の歷史上いかに由緒深き過去を有するかは世人周知のところであるが、江原君の家の傍には現に梶原景淸の舊跡もあり、江原君はかゝる地に居を定めるに至つて、鎌倉時代といふものが日本歷史の中に有する意義について常に思ひめぐらしたやうであります。大學卒業後住友系の實業界に入りし身が、間もなく之れを辭して大學の助教授に任命されましたのに、病氣の爲にこれも亦間もなく辭して斯かる土地に永住を餘儀なくされるに至つた自分の一身と、鎌倉幕府時代にこの地に發揮された我が國民精神の粹ともいふべき武士道文化とをひきくらべて考へるにつれて、江原君の精神は自分の

上に働きかゝり、自分の運命を導いてゐる見えざる攝理の聖手について深く思を潜めるやうになつて行つたのであります。

この思索は病氣が次第に輕快に向つて昭和四年の秋から自宅に同志の者數名と共に聖書研究會を始めた動機であると共に、月日が經過するにつれて益々深く掘りさげられて行きました、半年後正式に『鎌倉聖書塾』の名を雜誌の上に發表して、私の援助を求め、昔の漢學者が私塾を開いて儒教を講じたのに似た形式の下に自宅で聖書の講義を始めたのも、更にその後約半歳にして、『思想と生活』を改題して『聖書の眞理』と稱し、旗色鮮明に純福音の眞理を顯揚する事を以てその使命とするに至つたのも專ら上記の思索から自己の眞の天職を自覺し、この信念が深まつて來た結果であります。『思想と生活』誌の終り數ヶ月の間

『人の義とせらるゝは律法の行爲に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知つて、キリスト・イエスを信じたり』（ガラテヤ書二ノ一六）

の一句をその表紙に掲げてゐた一事を見ても、この間の消息を窺ふ事ができると思ひます。

『思想と生活』誌の題字は、基督者ではなくても『國寶』的存在として內村先生から嘆賞せられたと聞いてゐる岳父黑崎老人の筆蹟を凸版にして表はしたものでありました。西鄕南洲とも深い精神的關係のあつたこの硬骨誠實の漢學者の題字と並んで掲げられた大使徒パウロの不窮の言！　この表紙一枚に江原君の『鎌倉聖書塾』の眞髓が遺憾なく顯現されてゐたのであります。

鎌倉の地たるやその昔幕府時代においては日本文化の中心でありました。今日の鎌倉は勿論、政事上地理上から一見した所では、この名譽ある地位を失つてゐますけれど、併し之をその內容實質上から觀察するならば、今日の日本文化の中心地たる帝都を距ること僅かに一時間いはゞ東京の郊外又は山の手とも稱すべく、而してそこに住む人は又、帝都の中でも最高教養を有する人々が多くして、東京に於ける智識階級の住居地たる郊外の一廓が鎌倉にあると稱しても決して過言ではありますまい。從つてこの地において福音を說く事は、決していはゆる無智無學な善男善女の群を對象とするのではなくして、日本國民中の粹ともいふべきインテリゲンチヤに向つて呼びかけるのであり、それは取りも直さず、全日本に向つて聖書の眞理を闡明し宣教する事に外ならないのであります。

江原君が自分の置かれた環境についての思念は、最近殊に深まつて、終にこの點に着眼する所まで進んで來ま

した。

それと共に他方に於いては英國の清教徒時代に大なる關心を持ち、之と我が國の鎌倉時代に發揚せられた武士道精神とを比較して、その間に大なる類似を發見し、而も又その類似の中に聖書の有無といふ事に起因する彼我の間の根本的相異に氣付くに至つて、江原君の傳道心は最高潮に達したのであります。

七百年の昔法華經の僧日蓮は鎌倉において立正安國論を草し、國難來を叫び、我が國を外敵の侵入から守るものは獨り法華經の信仰あるのみと、一命を擲つて呼號しました。大學に政事科を卒業した江原君は併し、その深き政事的眼光と實際的洞察とから、既に世界的大勢力になつた廿世紀の日本の地球上に於ける位置とその政事的地位とを思ひ、日本民族が人類の文化に對する使命を察し、今日の日本を滅亡から救つて、萬世一系の皇室を泰山の安きに置き、芙蓉の靈峯に標徴化して現はされてゐる日本民族の崇高雄大なる理想を實現せしむる者は世界的大宗教たる基督教以外になき事を確信しました。かくて彼はその基督教の根本たる聖書の精神に照して、特に非常時日本の現狀とその運命と世界人心の動向とを比較考量するや、日本帝國の國礎を危くする者は、外敵の侵入よりも寧ろ國民の道德的腐敗、道義心の衰頽にありと看破して、この點に向つてその言論を集注するに至つたのであります。

『エレミヤ研究、宗教と國家』はこの彼れの精神思想の內的結晶であり、今年四月からの鎌倉公開聖書講演會はその結實であります。この講演會はその期限や僅かに三ケ月の短きに過ぎませんでしたが、之を內面的に觀るならば慥に我が國の精神史上獨異なる一存在として特記さるべきものであり、江原君の最後を飾る無類の死に花であり、廿世紀昭和の『立正安國論』事件として永く後世に向つて光彩を放つものであります。

雜誌を改題しました時にも、新しき題名を何とすべきかにつき散々に頭を惱まし、周圍の我々にも相談しましたが、誰も名案を得ませんでしたところ、或る日彼は、『聖書の眞理』としては何うだらうかと私達に語りました。私達は異口同音に贊成しました。其後柏木教友會の數士來訪せられて江原君再び之を會談の席上で計りましたら、やはり卽座に贊意を表されたので、會心の笑を唇邊に浮かべつゝ徐ろに口を開いて、『之は慥に神から啓示された題名だといふ事を自分の靈的直感で斷言できる』とて、この名稱を得た時の靈的經驗を語つた。

然らば江原君が文字通りその一命を賭して鎌倉に於いて靜かな併し力ある聲を以て宣べ傳へた聖書の眞理の中心は何であるかといふに、之は前記の『思想と生活』誌の表紙にかゝげたガラテヤ書の言に徵するも明かであり又彼がロマ書の講義の中でも異常の熱を以て說いた第三章二十一節以下によつても知る事ができます。右の句は改題と共に表紙からは消え去りましたけれども、彼の信仰の中心眞理として其重大性を益々加へて行くのみでありし事は、集會の時の彼の祈に於てもよく察せられました。彼の國民的關心も老いませし母堂に對する孝心も、その夫人及び子女に對する愛も、將又謙遜も溫和も鬪志も友情もその他凡ての美德は、十字架の贖罪を信ずる信仰から發して開いた色とり〴〵の美花に過ぎないのであります。彼の師は一人、唯だ內村先生ありしのみであるやうに、彼の救主は唯一人十字架のキリスト・イエスであり、彼の信仰は唯一つ十字架の福音でありました。こゝに彼れの純一性が胚胎し、彼がその獨り息子につけた『望』といふ名稱の根據があります。

江原君が一人前になつてからの地上に於ける存在は、殆ど病氣の仕通しで、殊に私が彼と交はるやうになつてからの彼は一時間の散步にも得堪えぬ身であり乍ら、併し又或る意味に於いては斯かる病弱の身なればこそ、彼と交はる人々の間にあつて、彼がいかに大なる力であり慰安と希望との源であつたかは、彼の姿が地上から消え去つた今日に至つて殊更に鮮かに我々の痛感する所であります。湘南に於ける我々の一團は今や常人の語を以てすれば眞に光が消えたとも謂ひ得べき思をして寂しく今年の秋を迎へつゝあります。

併し我らは落膽せずであります。江原は死んでも江原の信仰は我らの裏に又我らの間に生きてゐます。そうしてその信仰は單なるアヘンでもなく、イワシの頭も信心からの信仰でもなくて、實に世に勝つ力である事を我らは彼の死によつて活きた現實の事實の上で見たからであります。センチな事の大嫌ひであつた實際家の江原君が其臨終にいかなる死を死に、いかなる言葉を絕筆として遺したかを、江原君に負けない實際家としてその方面からも我らの敬服措く能はざる黑崎兄から承はつて、我らも亦江原君の說いた信仰を守り通しさへしたら、此世に於ける物質上の境遇は如何であれ、勇ましく世に勝ち希望に滿ち永生の國に凱旋する事が可能なのみでなく、却てそれは必然なることを確信するに至つたからであります。口には萬歲を唱へないでも前途は光明なる事を確實に知つたからであります。

江原萬里君の使命

南原繁

一

嘗て内村鑑三先生の紀念講演會に於て、我らの敬愛する故藤井武氏は、現代における眞理の敵は正に唯物論的共産主義と現世的享樂主義、語を換へていへばマルキシズムとアメリカニズムであることを指摘し、この二つの惡靈が全世界を跳梁し、今や東帝國の中心に向つて進み來りつゝあることを警告したのでありました。爾來三年の時が經過しました。時は僅かに三年であります。然しその間に於ていかに情勢が一變しましたか。これまで我らの戰ふべき敵は西方ロシアと東方アメリカの精神であつたのに對して、今やそれが我らの國自身、わが國民精神の中に勃然として現はれ來つたのであります。誤れる國粹主義、盲目的なる國民主義がそれであります。

最近一二年の間に生じた重大なる政治的社會的事件の眞相を識り、現代の根抵を動く巨大なる暗黑の力を正當に認識する者は、誰か國民が未だ曾てなき一大危機にあるを思はない者がありませう。徒らに歴史的傳統的なる國民と國家の名に於て、强力を以て一切社會と文化の變革を成し遂げんと欲するのであります。それは暴力による革命、少數者による獨裁政治の思想であります。人間自由の精神に目を覆ひ、明治以來築き來つた凡ての制度文物の進歩を阻み、ひたすら專制と强暴との舊き時代へと道を急ぎつゝあるのであります。かくの如きは獨り我が國の現象たるのみならず、世界における最近の大勢であつて、殊に著しき他の事例を、人はナチス治下の獨乙に於て見出すでありませう。それは實に人道の蹂躪者、文化の破壞者であります。彼らは一切の外來的なるものを排擊するばかりでなく、今は反對に自らの思ひ昂つた國民主義を振りかざして隣國に侵入し、恰も他の國民が同じく獨立の國民でないかの如くに考へ、たとひ國際團體から孤立しても、世界に向つて勝手に主我的に振舞はんとするのであります。

この國民主義の强暴の前には、さしも跳梁を極めた共産主義と享樂主義も一時影をひそめた如き觀があり、今や從來の二つの惡靈に代りて、新しき世界の脅威として臨んでゐるのであります。而して世界における其の一方の中心が東帝國自身のうちに在り、我が國民自身のうちに在らうとは。かゝる誤れる國民主義と國粹主義の危險から國民を救ひ出し、眞に國民の使命を自覺せしめ、進んで世界人類に貢獻せしめんとして起つたのが、實に江

原萬里君の生涯の最後の『鎌倉講演』（聖書の眞理六十七乃至七十號所載）であります。

二

君はこの講演に於て、眞に「日本的」なるものの何であるかの問題から出發して、これを鎌倉時代に求め、この時代に育成せられた武士的精神であるとします。主君に忠誠なる心、義を慕ふの心、その他幾多の高潔なる精神の諸德は鎌倉武士の誇であり、生命であつたのであります。それは高き精神的なるものへの奉仕、そのためにする一切の犧牲、忍從、獻身の勇氣であります。これこそ日本魂、日本精神として、日本が過去において產出したる國民の高貴なる特質、精神文化の華でなければなりませぬ。

併しこれを單に歷史的のものたるに止まらしめずして永遠の所有たらしめ、鎖國日本の道德でなくして世界的たらしめるためには、總ての人間と普く人類の同一根元たる、それ故に又超國民的なる神の生命によりて洗練し淨化し、眞の生命を供することを必要とします。これによりて人間意志をして、武士の精神にも尙まつはつてゐた所の現世的經驗的なる凡ての絆から解いて、高き道德的なる「純粹意志」にまで高めることが出來、彼らが命よりもなほ重しとした所の人の義を淸めて、より善き「神の正義」に打ちかへることが出來るでありませう。かやうにして國民の過去の歷史から超歷史的なる理想の國民をつくることが出來るでありませう。而してこのことを可能ならしむる道は實に基督敎の信仰、就中、近世淸敎徒の精神でなければなりません。されば我が國民が、恰も三百年の昔大英國の國民が爲したやうに、國民として一卷の聖書を受け容れるや否やは、國家の興亡と國民の運命に關する決定的事件である、といふのが講演を貫く基調であつたと思ふのであります。謂ふところの「日本的基督敎」とは此の基督敎の信仰と日本武士道の精神との結合であつて、日本が自らの裡に孕む危機の中から己を救ひて永遠の國民たらしめ、同時に日本が眞に世界と人類に對して寄與し得るのは此の道によりてである、といふのが君の拔くべからざる確信であつたのであります。

私の觀るところにして誤りなければ、それは恩師內村先生の傳へた精神の繼承であり發展であると考へられます。先生の「無敎會主義」が「日本的基督敎」と同義たることを早くも洞察したのは江原君であります。先生に對する追憶文（それは恐らく先生の精神の核心を最もよく把握したもの）に於て、先生の無敎會主義の內容は、基督敎の傳道が外國の人と物との助けによらずして、日本人自らの力によりて純粹に國民的に行はれなければな

らぬといふ消極的意義に寧ろ重要なる意味の存することを摘指したのは君でありました。今や君はその國民的が何か、日本的が何であるかを明らかにして、無教會主義に積極的意義を供したものと考へられます、外的形式的なる教會の宗教でなく、又センチメンタルな感情の宗教や或は智的基督教でもなくして、日本武士の生命とする各々の實踐的意志と義務の精神に確然と基礎を置く所の基督教の信仰、これが日本的基督教であつて、又實に無教會主義の本義と解することが出來ます。

かくの如きが實にわが江原君の使命であり、餘人を以て代へ難き君獨自の立場であります。それには第一に君の如く、往昔日本精神の發詳地たる鎌倉の地に長く親しみ、そこに無限の愛着と興趣を持つ者たることを要します。第二には君の如く英國清教徒に尊敬を拂ひ、これに關する深き智識を必要とします。殊に君がクロムウエルの研究は年久しきものあり、君をして命長からしめば必ずや獨立の一書を成したであらう程の資料の豊さ、洞見の深さ、蓋しこの講演に於ても隨所に窺ふことが出來ます。加ふるに何よりも現在の特殊なる時代を背景とし、時代精神に直面して始めて明白にせられ、又そのゆゑに固有の意義を擔ふところの眞理內容であります。

三

この意味深き講演は、實に祖國日本が歷史上比類なき大なる危難に際會してなされたものであり、それは君が祖國に對する至情、國民に對する熱愛の迸り出でたものであります。病臥十年、これまで恩師親友の告別にも又その吊合戰にも、あたら病のために遮ぎられてゐたのを、本年四月感ずるところあり、遂に死を賭しての戰であります。場所も由緒ある鎌倉の辻であります。君は前後四回にわたる講演を閉ずるに當りて言ひます「この辻に立ち、再び此の地を世界的日本の眞精神の發源地とするため、假令身は窮乏、死に至つても日本的基督教を叫び、一卷の聖書を我が國民に傳へずば已まないであらう」と。そこに集ひし人々は如何に少數であつたとしても彼の眼には全國民の代表者として映じたのであります。この代表者を通じて病患の一學徒が預言者的情熱と愛國至誠を傾けて、日本全國民に——今あるもの及び後に來る凡てのものに——呼びかけた言葉であります。

それは其の後長く經續せらるべきであつた基督教講話會の「開會の辭」でありました。然しそれは或る意味に於て彼の生涯の全業の結晶といふことが出來ます。昨年出版せられた君が病中の力作、エレミヤ記の研究「宗教と國家」も、その爲めの準備的勞作であり、日本的基督教のための歷史的基礎づけであつたと觀ても誤りないで

ありませう。それは君が最後の勞作として殘つただけに君の全精神の頂天、君の登りつめた眞理の最高峰であつて、隨つてそれ以前の凡ての生活と思想——實業界の活動も學界における研究も——皆こゝに至る階梯に外ならなかつたと謂ふことが出來ます。

「人は各々その使命を果すまでは死せず」とは、平素君の所信であつたと聞きます。長く病患のうちにも保たれて今日に至りしは、一に此の眞理の啓示せられ、力强く叫ばれるが爲めであつたのであります。君自身最後の病床にありて云ひます「いつか爲さねばならないと豫てから期してゐた義務を果した。最早何の思ひ殘すこともない」と。君は實にこの眞理を宣べ傳へるために生れ、そのために死んだのであります。僅に數十頁に滿たぬ一小冊子ではあります。然し量に於てでなく、その盛る眞理の內容の故によりて高き價値を有する者であります。將來綴られて一書となし、かの日蓮上人の「立正安國論」と共に或はこれと對比して、永く國民の間に讀まるべき不朽の眞理であることを疑ひません。

四

天がその人に特別の使命を降さんとするや、彼を特別の境涯の中に置くものであります。江原君をして遂に新しき福音の戰士として立たしめたものは、決して單なる思索や研究の結果によるのではありません。それは實に多年の窮乏と病苦の中に、君とその愛する者だちの命を懸けての戰に於て、文字通り血を以て贖ひ得た眞理の證明であります。最近十年に近い日々の生活をいかにして生活し來つたかは私ども友人の間に於てさへ一つの謎であります。又その間に病の容易ならざるを傳へ聞いたのも一再にして止まらなかつたのであります。しかも不平焦燥、苦痛、すべてそれらに似たる言葉の一つも彼の唇より漏れたことはありません。自ら困苦のうちに在りてただ誠と正義を慕ひ、友のために思ひ、國と同胞のために泣いたのであります。彼の血には確かに祖父の武士の精神が流れてゐました。更に彼の魂には恩師によりて教へられた淸教的基督教の信仰が燃えてゐました。されば こそ最後の死の床に於て、復活を信じ、神の榮光を崇め人類の救濟と宇宙の完成とを望んで、歡喜と勝利を叫び得たのではありませんか。日本的基督教を宣明した彼自らが最も典型的なる日本的基督者としての生涯を立派に戰ひ拔いたのであります。

この隱れた現代における一人の基督教的日本武士、鎌倉武士的基督者の、而も齡未だ壯んにして世を去つたことは、國民にとりて一大損失たると共に、彼を識る者のひとしく深き寂莫と哀惜の至りであります。ましてや、

彼のいつくしみいつくしまれた最も近き人々にとりて、いかばかりの心の空虛と痛苦でありますか。かよわき母君と夫人と未だ幼なき子だちの上を思うては云ふべきところを知りませぬ。然し彼が高潔なる現代の武士であつたやうに、いづれ亦武士の母たり妻たり子らであります。この可憐な人々は、彼の長き病の看護に於て、そして又その死に處して、既にそのことを健氣にも示してくれました。それが自らの識らざる所に、どれだけの福音の證明と大なる教訓を我らの上にも與へて來たことでありますか。彼らも既に眞理の戰に呼び出されたことであります。さればこののち襲ひ來るべき如何なる嵐と暗黑の中にも恐怖と失望はないでありませう。江原君の一生を護り導き給うた神は、必ずや彼の愛した是等の健氣の人だちを祝して、各々の一生を護り導き給うでありませう。そのうへ今や天に在る彼が、世に在りし日にいや勝る現實の新な力となりて生き、これらの人々の戰を共に戰ひ助くるでありませう。私共はそのことを信じ、切にその爲めに祈る者であります。（八月十三日鎌倉の家庭における記念集會に於て）

江原兄に學ぶ

藤本武平二

信仰の先輩江原兄は『我れ義務を果せり』との朗らかな心持ちと、『キリストは復活し給へり、我も主に在りて甦る』との固い信仰とを持つて、この世に何の未練もなくその靈魂を彼に委ねて安らかな眠りに就かれた。私は殊にその晩年に於て江原兄に親しく接し信仰問題を語ろうの機會を與へられた。そして神様が令兄の性格の上に、又その使命の上に特に授け給ひし數々の御恩寵に就て見又聞くの幸ひを與へられた。

内村先生の永眠された年の秋であつた。教友數名と共に令兄を訪づれ、無教會的信仰に就いて話し合つた。我等は唯信仰のみによつてキリストの十字架の贖ひの故に義とせられ、救はるゝのである事、そしてこの救ひは我等が善業を勵んだとか、傳道したとか、教會に屬したとか、洗禮を受けたとかいふやうな行爲の故でなく、全く代價なしに神より賜はるものである事、この故に我等の救は全く神より恩惠として與へられるものである事等を

語つた。そして共にこの福音のために立たうと勵まし合ひ、且つ祈つた。

その後この事のために江原兄は同信の友から非常な誤解を受けられたとの事であつたが、同兄はそれを何とも思はれなかつたらしく、一言もその事を漏らされなかつた。令兄の心事を解する私達も亦別に氣に留めなかつた。

江原兄の御生涯を見て最も教へられるのは、令兄の思想も生活も凡べてが自己中心でなかつた事である。令兄は身邊雜記といふやうな事は餘り書かれなかつた。自分を少しも語られなかつた。信仰を持てる自分を誇られなかつた。立派な思想と智識の所有者として自己を宣傳しようとされなかつた。人の意表に出でて人の心を捕へやうとか、人が感激するやうに自己を表現しやうとか、そんな心は微塵だにも見られなかつた。自己中心の人が動もすると、讀者や聽衆をして自己の崇拜者たらしめ、フアンたらしめなければ止まないといふやうな、自己を偶像とし、人々をその偶像崇拜者たらしむるやうな、そんな自己中心的な心持ちが令兄には少しもなかつた。令兄は常に神中心であつた、神を中心とする愛國者であつた眞の國士であつた。令兄は神中心の信仰に入る事と、神中心の愛國者となる事を勸められた、故に江原兄には崇拜者が出來なかつた。神の眞理を恰も自分で發明したか或は創造でもしたかのやうに振舞ひ、自己の偉大を誇り或は稱揚させるといふやうなことは令兄には少しも見られなかつた。眞理を讃美させるのではなくて、眞理を傳へた自己を讃美させて、自他共に陶醉狀態に入り「主の御榮が擧がつた」と考へる教役者の多い中に、令兄にはそんな自己中心の氣持ちは毫もなかつた。故に江原兄には所謂取り卷き連や陣笠は一人も出來なかつた、令兄を專有しやうとする心醉者も起らず、又專屬の弟子を作つて之を私有物視しやうともされなかつた。令兄でなければ夜も日も明けない、令兄の書かれた事や語られた事なら是が非でも肯定するが令兄以外の人からは何も聞き度くないといふやうな盲目的な信者は起らなかつた。令兄は飽くまでも神第一眞理第一であつた、故に無理もなく焦燥もなく、心には平和と力とが充ちてゐた。クリスチヤン當然の事ではあり乍ら、見遁すことの出來ない神よりの尊い賜物であつた。

江原兄は長の間病と戰はれた、然しその戰方が普通の人とは違つてゐた、多くの人は難治の病に侵されると周章狼狽して節度を失つて仕まふ。しかし令兄は極めて沈着であつた、養生法に就いては醫師の意見を徵しても、日常生活の全部を醫師の意見に任かさうとはされなかつた、殊に根治は望む事の出來ないのを知つてゐられたか

らその生活を信仰的に定められた。私は本年に入り令兄が街頭に立つて福音を傳へられると聞いた時、ついこの間の事、十分間以上の面談謝絶の貼札を必要とした同氏が何日迄も講演を無事に續けられる事は到底不可能であらうと考へた。恐らく令兄は今日の日本を見て默して居らるゝ事ができなかつたのであらう。エレミヤが命を堵けて預言したやうに、令兄は自らの健康など顧みるの遑がなかつた。最近の「聖書の眞理」誌上に叫んで居られる通り、令兄は神を離れて國家の存立し得ない事を國民に強く訴へられた。赤誠逝つて病床に靜養するを許さなかつたのであらう。愛國、憂國の熱血が令兄の血管を躍動してゐたのであらう、病床に鬪病の日を重ねんよりも寧ろ眞理のため國のため立つて討死しようと決心されたのである。敵彈に戰死するは武士の譽である、信者として眞理のために戰死に優る名譽が何處にあらう。武士は疊の上に死するを恥とする。聖戰に身命を献げて遂に玉碎された令兄や但し信者の本懷であつたらう。別項最後の言葉を讀んでその感を益々深うする。

靈友江原兄を弔ふ

森本慶三

敬愛せる我同鄕の畏友江原萬里兄召さる。我之が訃を受けて寂寥哀悼の情惻々として胸に迫る。數日にして默示錄に「汝死に至るまで忠實なれ、我汝に生命の冕冠を與へん、……勝を得る者は第二の死に害はるゝことなし」との聖語に接し、我信仰は勃然として興り、「血の海をこえて友は勝ちぬ」との讃歌は覺へず我口に上りぬ。

ア、勇しき哉我友よ。ア、福なる哉我友よ。死に至るまで聖書の眞理を叫びつゝ君は逝けり。勇しき哉。重き病苦のその牀より直に天のパラダイスに擧げらる。幸福なる哉友よ。恐しき死の手に惱まされつゝ、福音の恩寵を證して休まず止めず、終に至るまで其職を全ふせり。偉大なる生涯なりしよ。而して我等は尙塵世に殘りて、暴虐淫蕩と戰はざるを得ず。孰れか果して福なる。我知らず人知らず、只神のみ知り給ふ。往くも殘るも只聖旨に任せんのみ。是最善き事なり。友よ爾の召されしは余に大なるショックを與へぬ。恩師さきに世を去り、藤井兄直に其跡を追ひ、君今逝く。無敎會的眞理を證せん爲に已に三つの貴き血は要せられぬ。續て其同じ光榮に浴するものは誰ぞ。願ふ、余も亦同じ馳場を趨するものとせられんことを。

江原萬里君の死を聞きて

南洋群島より歸航の途中にて
矢内原忠雄

江原君。君はとう〳〵行つたのか。お芽出度う〳〵。よく戰つてくれた、よく忍んでくれた、よく最後まで信じてくれた。さぞ苦しかつたであらう。

今や君の苦杯は滿され、君の使命は果された。憐憫深き主の御もとに君は安らひ、勝利の榮冠は君の頭上に輝いてゐる。ほんとにお芽出度う。

しかし君、驚いたぜ、パラオで家からの手紙を得て、開封直に君の死を知つた時は。僕は思はず聲を立てた。言ひ難き寂寥の中に陷つてしまつた。それからといふものは轉々として僕は樂しまない。船は一路北進して日本に近づいて行く。併し其處にもう君は居ないのだ。或る時は信仰の深みに潜り、或る時は世事の廣みに浮んで、君は君の病を忘れ、僕も君の病を忘れて、無遠慮に、聲高く、縱横論議し合つた君はもう居ないのだ。

僕は八月の半過ぎヤルートに向ふ航海中、君の夢を見た。君はもう召された後だつたのだが、僕はそんな事とは未だ知つて居なかつた。その夢で、君と僕とは福音の爲めの事業に關して例の調子で熱心に論じ合つた。そして大抵論じくたびれた揚句、

「しかし事業よりも、『汝の天にある生命の書に記されたるを以て喜びとせよ』だね」。

「さうだ〳〵」。

と二人の意見は一致して落ついた。そして二人共歡呼して笑つたね。その時君の會心の笑ひ顏がとても輝いて居た。夢ながら今に鮮かだ。

君は僕と異つて、事業に隨分興味を持つた。そして腕もあつた。然るに神樣は早く君を病氣に投げ入れ給うて君から事業を奪つてしまはれた。しかし君は最後迄事業心を以て生きた。君が鎌倉聖書講話會を公開した時にも事業についての野心（勿論聖なる意味でだが）伴つて居た樣だ。しかし事業は思ふ十が一も出來ずとも、君の名が天にある生命の書に記されて居たことが、君の最大の歡喜だつたのだ。君の眞髓はやはり事業の人でなくて、信仰の人だね。君が天に行つて生命の書に君の名を見出した時には、入學試驗の成績發表に自分の氏名を發見した生徒の樣に、うれしかつたらうね。羨やましい〳〵。

君はあんなに長く病氣して、病氣そのものゝ苦痛は言ふ迄も無く、經濟的にも家庭的にも苦しみの中に居たのに、自分の私生活の事について語る處殆どなかつた。と

の點で君は不思議な人間だと、僕はいつも思つて居た。詩篇の樣な個人的感情の溢れた調子は、君の言論文章に著しく現れなかつた。君は多く公的生活を、國家社會の政治を、經世の事を論じた。同じエレミヤを論じても、藤井は彼の人間的心腸の煮えくり返る音を聞いたし、君は彼の政治的見識を現代に生かさうとした。君程の私生活の苦痛を受けながら、君程自分の生活についての一喜一憂を公にしなかつた人は無い。君は信仰によつて君自身の病氣や家庭のことなどあまり問題にもしなかつたのか、或は自分では問題になつても信仰の公的方面を以て私的方面よりも重要であると考へたからか、君の性格からか信仰からか、自然からか、努力からか、何せ僕には一つの不思議であつたのだ。しかし今それがはつきりした神樣が君にさうさせたのだね。神樣は君をさういふ境遇に置きながら、さういふ風な事をさせたのだね。それが神樣の君に負はせた十字架なのだ。同時に君に賜つた獨自の使命なのだ。君の矛盾ではなくて、君の價値なのだどうだい、さうぢやないかね。針の先で突いた樣な一寸した私生活上の出來事にもわめき叫ぶ感情的クリスチャンを辱しめる爲に、神樣は君を立てられたのだらう。

君の『宗教と國家』が出版された時、僕はほんとに喜んだ。僕が『通信』でこの本についての感想を書いた時君はどう思つた？　一言あつた事だらうね。之が又君との間の會話の種になると思つて樂んで居たのだが、その機會も得ないうちに君は行つてしまつた。僕は君のこの著述は『必死的』だと述べた。あれはたゞの形容でなくほんとにさうだと思つたのだ。君の著書の內容に必死の氣魄が溢れて居るばかりでなく、君の樣な不健康狀態でこれを書いたといふ事が肉體的にも必死であつた。多少著述の經驗ある者は知つて居るが、これだけの書物を出すについては、身體の丈夫な人でも健康を損じて、その恢復に骨を折らねばならないのだ、それを君の樣な病人がやるのだから、療養といふ點から言へば無茶苦茶な話だ、しかしその無茶苦茶は誰がさせた。神樣ぢやないか。

君は『宗教と國家』を出版した後、矢つぎ早に集會を公開するといひ出した。之だところで肉體的には算盤に乘らぬ無茶な計畫だ。しかし僕は君からその計畫の通知を受けた時、直ちに背後に君を動かす者を見た。之は君の仕事であつて君の仕事ではない。君はもう生きて居ない。生きてるのは君を動かすキリストだつた。その時の君には、エルサレムに向つて直進するイエスの風があつた。だから僕はもう引き留めなかつたのだ。且つ僕の助力を快諾したのであつた。

「これが江原君の最後かも知れない」と、僕も家の者も直感した。かくして始められた講演會にも、君は例によつて微塵の感傷的氣持もなく、病人のくせに信仰による天下の大事を論じた。ほんとに君、よくやつてくれた信仰の勝利だぜ。

一昨年だか、君の病が喉頭に來たとき、僕はもういよ〳〵駄目だと思つた。しかるに不思議にも君は元氣を恢復して、かすれた聲もまた出る樣になつた。不思議だなあ、と僕は思つた。江原の身體の事は常識ではわからないと、僕はその時以來決めてしまつた。神樣は君を尙暫く地上に保存し給ふたのだつた。その二三年は君に取つて誠に多忙な、又幸な時であつた。この間に君はエレミヤ記の研究を書いた。公開の連續講演會を開いた。家庭の平和を確くした。君は奧樣の居る前で僕に向つて、奧樣の愛勞を感謝して認めた（そんな事を人の前でおくびにも出す君ではなかつたのだ！）。君は又友人との平和を恢復した。君は柔和になつた。病と貧とは別として（之も亦君から奪ふことの出來ない神の恩惠であつたのだが）、かうした喜と活動の二三年を以て、神樣は君の最後を飾り給ふたのである。神樣は恩惠を以て君を導き給ひ、君は信仰を以てよく神樣の導きに從つた。君の感謝であり又君を信仰の友人且つ證人として與へられた僕達並に日本の感謝である。

江原君。默示錄第二章九、一〇節の言葉を以て僕は君を送る。否、反對に君がその言葉を僕に送つてくれてるのかも知れない。可矣、僕も僕の道程を歩き終るであらう。切に願ふ處は最後迄君の樣に信仰の善き戰を戰ひ、よく忍びよく望んで、天國再會の幸福を惠まれんことである。

われ汝の艱難と貧窮とを知る――されど汝は富める者なり。我はまた自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあらず、サタンの會に屬く者より汝が譏を受くるを知る。

なんぢ受けんとする苦難を懼るな、視よ惡魔なんぢらを試みんとて、汝らの中の或者を獄に入れんとす。汝ら十日のあひだ患難を受けん、なんぢ死に至るまで忠實なれ、然らば我なんぢに生命の冠冕を與へん。

―默示錄二ノ九・一〇―

祖國と信仰

今泉源吉

亡き江原兄。肉に於て最後に御目にかゝつたのは確か六月四日の公開講演の折でした。集會の了つてからづか〳〵と近いて來て熱い握手を交はして下さつたことを忘

れ得ません。七十九になる老母が私達に扶けられながら出席したのを非常に喜ばれて、「御母様は木戸御免でよい。今後はゆつくり何處ででも横になつて聞いてゐて下さい」と云はれた、あの優しい御心持を母は今も感謝してゐます。あの時のマタイ傳の御話は實に印象が深かつた、しかし少し息苦しそうでした。あとで奥様が氣遣はしげに聞いてゐられたのに對し兄は無雜作に「もう肺は駄目で皮膚で息をしてゐるのだらう」と笑はれた。そのにこ〳〵した御顏はもう此の世の人とも見えない榮光でかゞやいてゐました。私に向つて、雜誌に平田篤胤のことを書いてくれませんかと熱心に勸められて、もし教會の立場が惡くなれば困るがと親切につけ加へられた。私が、青山會館の學生聯合禮拜當時の話をして、祖國の救ひの爲めには內村先生も高倉先生も手を携へて壇に立つたと云ふやうなことに言及した時、貴兄の顏は一層輝いて「確かにそうだ、もう教會信者だ無教會主義だなどと云つてゐる場合ぢやない。眞物か贋物かがあらはになる時だ」と言葉に力を込めて言はれたことを思ひ出します。あの一言は胸に刻まれてゐます。私が再び直接傳道の戰線に立つに至つたのもあの御勵ましによる所が多いと思ひます。何が出來なくても、神の前にほんとうの信仰をもちつゞけて行きたいと思ひます。貴君の絕筆から教へられるやうに——

貴兄の最後の一戰は實に決勝戰でした。湊川で討死した正成のそれのやうに、皮相な人世では失敗とも輕擧とも見えるでせうが、やがて福音の光りがこの祖國に輝き渡る日が來ることを貴兄は靈界から望見してにこ〳〵してゐられると思ひます。

御約束に從つて誠にまづしい研究ですが、平田神道に及ぼした基督教の影響について少しく書かせて頂きます。村岡典嗣博士の諸論文に負ふ所多いことを感謝を以て附記することを御許し下さい。

平田神道に及ぼした基督教の影響を明示する文獻は本教外篇上下二卷です。一名を本教自鞭策と云ひ未許他見と附記され二十五秘書の一だそうです。篤胤三十一歲に當る文化三年の作です。處がその內容は大部分、支那の耶蘇會士の漢文傳道書から得てゐるのに驚かされます。先づ冒頭に揭げた二の漢詩が利瑪竇の西琴曲意から少し手を入れて載錄したものです。利瑪竇は伊太利の耶蘇會士 Matteo Ricci の漢名で萬曆二十九年（一六〇一、慶長六年）に北京に到り皇帝に贄物を獻じました。その中に雅琴一具（ヴアヰオリン）があつたが、之を奏する曲を知りたいとの帝の所望に利は對へて「私は外の曲を知

らないが道に關する數曲を漢譯して御覽に入れます。方音が異るから曲意を記すに過ぎません」と云つて出來上つたのが西琴曲意八章であると云ふ。拔目なく傳道の機を捉へた所が面白いではありませんか。篤胤が自ら序曲として之を轉用したのはエキゾチツクな感興からでなく本敎は天よりの啓示で、上帝を知るは知慧の始であると云ふ全篇の精神を先づ明かにしたものと思ひます。兩者を比較して見ませう。

本敎外篇

樹之根本在地。而從レ上受養二其幹枝一向レ天。竦人之根本者向レ天。而自天承育二其幹枝一垂下。成人智者知二上帝一。成人之學者學二上帝一。因以誨二蒼生一。

而琴曲意

誰識人類之情。即人也者乃反レ樹耳。樹之根本在レ地。而從レ上受養二其幹枝向レ天。而竦人之根本向二乎天一。而自レ天承育二其幹枝垂下。君子之知知二上帝一者。君子之學學二上帝一者。因以擇誨二下衆一也。（以下略）

（二）

更に本論に入りますと上卷の前三分の一位は利瑪竇の名著天主實義の要旨に據つてゐます。中士對西士の問答を「儒生曰く」「篤胤曰く」の形に改め、天主を上帝とか天神とかに變へてゐることは勿論ですが明かに一神敎的な神觀を述べてゐます。

上卷の殘りの部分は殆んど利瑪竇の著畸人十篇の各章を意譯又は直譯したもので、基督敎獨自の來世觀が如何によく彼に消化せられ巧みな和文に移されてゐるかに驚嘆せしめられます。畸人十篇に「爲義彼窄難者乃眞福爲其已得天上國也」とあるを「神明の爲にし德義の爲にし窄難を被る者はすなはち眞福すでに天國を得たり」としてあるのもその一例です。

下卷は漢文で書かれてゐて耶蘇會師父龐廸我(Juan de Pantoja)著七克と殆んど符節を合はせるやうに同一で只天主、耶蘇を幽神等に改め、「天主聖經に曰く」とか「聖若翰有言」とかの辭句を削除するなど苦心の跡歷然たるを見るのみです。七克七卷に傲つて傲、貪、淫、忿、嫉、妬、怠の七罪宗に別ち、深刻な罪惡觀を示してゐます。そして屢聖句が出て來るのが興深く思はれます。たとへば

爲二天帝一爲レ善是則與二天帝一也。行レ善右手所レ爲勿レ使二左手知是知眞陰德也（本敎外篇）

聖經曰爾賑窮乏時。右手所レ爲。勿レ使二左手知一。秘密而行（七克）

（三）

之等の禁書がどうして篤胤の手に入つたかは問題です

が、既に、林羅山は天主實義を荻生徂徠は畸人十篇を讀んでゐたことの確證がある所を見れば、心ある學者達は何等かの苦心をして耶蘇教書に接してゐたものと想はれます。しかも篤胤に在つては單なる知識慾を滿足せしむるに止まらず信仰と云ふ位にまで打ち込んでゐたことを深い理由なくしては考へ得られません。

本教外篇の成る前後から家庭悲劇は相次いで彼を襲つた。長男の夭折についで養父の死、更に糟糠の妻を奪ひ去らる。しかも悲哀の中に債鬼の追窮はいよよ急、火の車を廻はす苦心の間に二男も又大患に罹る、彼の心果して如何。

「それに悴が病氣、其中に大業を成就せんとの苦み、戒人伯夷加傳、司馬遷云天は是か非かと云へり、篤胤も云ふ神は是か非か」

彼の心盡しも甲斐なく愛兒は九歳にて母の跡を追ふた。「神は是か非か」の歎聲が肺腑からしぼり出されたであらう。しかし彼は終に落膽しなかつた。彼を勵ます自鞭策なる本教外篇があつたからです。之によつて苦痛の秘義を知り、この顯世は寓れる世であつて眞の故郷は幽世にあることを信じました。暫くの輕き患難は極めて大なる永遠の光榮を得しむことを悟りました。この篤胤の思想の轉向は神道に新時期を畫しました。從來現世的に情緒的に然達して來たのが、こゝに主意的倫理的に轉回し發展しました。篤胤の著書は百餘部千餘卷と云はれるが凡てその倫理的價値の根本が幽冥思想にあり、更にその根抵に天地を主宰する人格神の絶對性を要求する信仰の横はるのを洞見する時、誰かその基督教的影響を思はないものがありませうか。

（四）

かゝる他界的な實踐的な精神は國家に對する態度としてあらはれました。國内の行き詰りは黒船襲來によつて暴露せられた。國家興亡の跡を想ふて神の攝理の前に首を垂れ、幽世に於ては祖國も又審判の座に立たねばならぬことを思ふた。天地の主なる神に從ふことが眞に國を愛し君に仕へる所以であることを知つたことでせう。本教外篇の最後の言葉として次の如く記してゐます。

一國ノ臣民多ク敬信上帝ヲ者。王新即レ位令曰。今日諸臣偕ニ我事レ佛者官位如故否悉逐去。諸臣中有ル不レ背上帝ニ者上皆棄レ位去。有ル戀ニ官位者上。内信ニ上帝外若王命一。向レ佛禮ニ拜之。王遽命去者悉還官レ之。其外順王命ニ者盡逐レ之曰。爾曹不レ忠ニ于天地大主一而忠レ我乎。今向ニ微利レ棄ニ大主一遇レ利豈不レ棄ニ小主一乎。

平田神道が明治維新の原動力となり得た事は、遡れば

本教外篇の中に溢れる基督教的の倫理的な精神の策勵の結果とも謂へるでせう。祖國は二千五百年の間知らざる神を求めて來ました。衞士が明日を待つ如く救ひを待つてゐると思ひます。明治維新の根底には宗教改革の必要が逼つてゐたのでした。さればこそ平田門流の大國隆正、矢野玄道、玉松操、福羽美靜等の活躍となつたのでせう。然しその純粹な宗教的源泉は思ひの外淺かつた。滔々と迫り來る歐米の啓蒙思想の波濤に洗ひ去られ、明治以後の形式的な神社崇拜と國粹主義とに墮してしまひました祖國愛に燃まされてゐた彼等が、多年憎惡した異教をそのまゝの形で受け入れる能はず、神道の堝坩の中に鑄直さんとした心には同情を惜むものではないが、それがためにナザレのイエスに於ける神の唯一絶對の啓示に全幅の信仰を投げかけ得なかつたことは、佛作つて魂を入れなかつた憾みを深くします。篤胤も晩年は靈肉の間に於ける惱みを深刻に經驗し、世を終るに臨んで左の辭世の歌を殘しました。

思ふこと一つも神に勤め終へず、今やまかるかあたら此世を

貴兄が書き遺された「主イエスキリストを信ずること是人の至上善、私の一生の經驗」と云ふ絶筆とを思ひ比べて感慨無量であります。

貴兄は「宗教と國家」の中にこう叫ばれました（一四〇頁）

「視よ此の國民的組織的宗教の大改革は遂に失敗に終つた、それは外なる改革であつて心の眞の改造でなかつたからである。イスラエルの民の罪は之を以て除かれなかつた」

世の罪を負ふ神の羔の姿を仰ぎみる迄はこの國民は救はれないことを思ひます。貴兄の肉體は鎌倉の露と空しく消え果てましたが、貴兄の眞の生命は基督の中にあつて昨日と變はりなく今日も明日も此の祖國に十字架の福音を傳へて止まないでせう。池田醫學士が月の初めに貴兄を診て、普通の人なら絶對安靜を要する容態だと告げた時、貴兄は「戯談ぢやない、これから街頭に出て大に福音を說くつもりだ」と云はれたことは尤です。池田兄は、貴兄位肉體のことから超越した人を見たことがないと申されました。確に貴兄は基督に在りてのみ生きてゐられるのです。出でては十字架の御旗の下に戰ひ、入つては十字架の蔭に善き寢りを與へらる、病ひにもあれ、健かにもあれ、死にも生にも、只主イエスキリストの榮光のあらはれんことを貴兄は希つてゐられることでせう。不信なる私を宥して永き祈りの中に待つてゐて下さつた御友情を感謝するためにこの拙ない一文を草しました。

日記の中より

江原萬里

昭和八年三月一日　いくら軍備を縮少してもそれで戰爭をやめるわけにはゆかない。軍備縮少會議は、先日來朝のバーナードショーが云ふやうに只安上りに戰爭をする相談會であるに過ぎない。戰爭をやめやうとするならば、戰爭がいやにならねば駄目である。自國の主張が貫徹しない時はすぐ武力に訴へやうとする心、相手を暴力でやつゝけて自分の思ふ通りにしやうとする心、他に仕へるのでなくして、他を自分に仕へしめやうとする心、こんな心がある間は戰爭はやまない。

武器を以て相手をひしぐのを勇氣と云ふ、然し道德的に行ひ、決して武器によらず、他に對する善意、自己の正義、平和を維持する事はより以上の勇氣がいる。かゝる勇氣こそ望ましけれ。

三月二日　基督教の社會的影響について考へる。今後無產階級のものに福音をゆき渡らせる事が重要である。彼等の人格尊重の念を一般に起さすこと、これが今後の我が基督者の各自の任務であらねばならない。その目的を以て福音書を研究する事、說く事、集會をする事、農村及び都市に於ては勞働者の此の聖書的教育を根本にしなければならない。誰か之を試みるものぞ。セツトルメントの事業、又クエーカーが主としてなした成人教育の根本精神はこゝに在りと云ふ。然るに我が國では只表面を模倣したのみである。聖書が英國を改造した、エリザベス女王時代聖書が國民の書となり、國民の心を一變した。（グリーンの歷史）その代表的のものが淸教徒であつた。淸教徒の遺した影響の第一は遵法の精神、自治の精神であつた。此の精神は十八世紀ウエスレーの福音運動となりて復活し、英國をして世界的國民とした。

三月五日　己をなくする事、全くキリストに在り、彼の生命を生命とする事、それは人に奉仕する生涯である事、これが神への生涯である。

若し御意ならば福音をもつと廣く說き度い。それには此の精神が肝要である。最早自己を全くキリストに獻げ、キリストとして生きる事である。

友人に援助せよとマセドニヤ人の叫聲を發した、矢內原君が快諾の返書をよこした、今日三谷、南原兩君に書いた、何と返事するか知れない。自分は彼等の主となるのでなく、從となり、僕となつて働き度い。兎に角友人

が一つとなつて福音を說き得ば、至大の幸福である。

祈るところは善き場所と善き聽衆を與へられんことである。

三月七日　三谷君より快諾の書翰うれし、祝キング商會別館を會場に借りる約束をして歸る。凡て神の御攝理と思ふ。この乏しい健康を携けて鎌倉の中央にて福音を說こうとする。一體誰がそうさせたのか、普通ならば病氣にいぢけて毎日ねて居るばかりの身體、否最早とつくの昔に死んでゐる筈の身體、それが今奮然起つて福音を說こうとする。あゝ神よ、かくならしめ給ふためにどの位あなたの御導がありしか、あなたの强制がありしか、あなたの鞭は痛い、然し兎に角最初から預め定め給うた任務に追ひやり、之を果すまでは許し給はない。神はある。大ありだ。こんなにまで自分の生涯は彼に引づられて居る。自分は逃げてばかり居た。そうでなければこんなみぢめな健康で今起たなくてもよかつた。然し今はしり込む時にあらず、死を覺悟し、救を信じて起つ。

三月二十五日　賴山陽の日本外史を興味をもつて讀む何故武家政治となりしか、義家の仁慈が賴朝の覇業の基礎となりしこと、承久の亂、泰時時賴の政治など面白い。

楠正成について櫻井の驛を訪ねた時の感想は外史中の特に名文であろう、その中に若し正成を重く任じ、新田義貞に代らしめばもつとよかつたであらう、正成一人は神器以上に重し、然るに朝廷彼の門地の低きため、重用しなかつた。されど重用されなかつたが彼は却つて千歲その香ばしい風を遺して居る。これに比して「利害何れぞ」とある。こゝに山陽の最も力說した楠氏論の長短がある。彼には結局史論は利害論だ。

三月三十日　此の度決心した公開講演には自分の健康は全く之を遂行し得る自信はない。只一切を神の御前にもち出し、その御意に委ねるのみである。或はこのため健康――僅かばかりの――を悉く失ふかも知れない。或は兎に角之に堪えてゆけるかも知れない。自分は全く先のことはわからない。

現在一番大切なことは、我が意志を遂行するのでなく、神の御意は何處にあるかを知り、知つたらそれを行ふに在る。若し講演續行が御意であらば、死を決して續行する。若し中止が御意であるならば斷然やめる。

御意は何か。要するに空しく祈つてもわからない。本當にキリストを信じ、その福音に生きることである。我生きず、キリスト我がうちに生き給ふこと。それが御意である。

四月三日　來る九日からの講演會は自分としては最近健康最惡の時之をやるので、果してよくやれるか否か全

く自信はない。或は之で斃れるかも知れない、自分も死を覺悟してやる。只覺悟だけでは足るまい。よろしい。我が國に福音の傳はるため、若し自分の生命が要せられるならば、献げる、四十四歳の今日まで生きた事は神の恩惠である。今後は全く肉に何ものをも頼まない。只神の聖意のみを最善としそれにのみよる。そして假令死するもやがて主の日に榮光の復活に與り得ると思ふ。今生命を措しんで逃げかくるゝよりも、此の方が遙によい。妻や子についてはキリストに在る神におまかせするのみ。

四月七日　神の民のために仕へると云ふ方が日本國のために仕へるといふより自分の考を云ひ顯はすに適切である。日本の國全體が聖徒の國になるとはどうしても思はれない。願ふことは我が同胞全部が救はれんことである。されど自分にはその確信はない。自分の確く信ずるところはバアルに膝を屈しない神の民が此の國民中に在る。教會内にある、教會外に在る、我らの知らぬところに在る、今は自分自身で信者と思つてゐないものゝ中に在る。彼らが本當に信仰に堅く立ち、本當に神の御意を行ふやう私はそのために生き、そのために死する。

四月八日　愈々明日は最初の講話會が開かれる。今日も尙臥床中であるが明日は出られる。有り難い。自分の生命一切キリストに在る。之を省る要なし。一家も亦キリストの内に在る、信頼して安心である、只祈る、彼の御恩惠を、先づ最善を以て惠み給ふであろうと信じ安心する。自分の願ふところは日本の國民の救はれる事である。本當にキリストを信じ、彼のうちに在る神の恩惠を受け東洋に本當の聖徒の國が出現する事である。神のこの御意は必らず成ると信ずる、而してそのために自分は今起つて一生を献げるのだ、日本國を愛するといふよりも神の民を愛しそのために仕へる。

四月九日　大雨大障害、人は豫期より少なかつた、然し善い會であつた、若し神の御意がこゝに在らば此の會は眞に善い會であり、多くの人に本當に善いものを與へるだろうと信ずる。人も亦次第に增すであろう。

三谷君の話多くの人に感銘を與へたらし。自分は死を決して此の會を創めた、今は近來に於ける健康の最惡時である。今日もどうかと思つたが出かけて見ると十分やれて大に感謝した、然しこれから先どうなる事か全くわからない、若し許さるれば健康を維持出來やう、神に於ては能はざるところはない。問題は御意なりや否やである。或は自分の生命を献げる事が御意であるのかも知れない。

四月十日　今日は昨日の講演がたゝつて一日元氣がない、左胸に手をあてると妙な音がして居る。少し深い呼

吸をすると「ぐるつ」と響く、氣持惡い事夥多しい。此の徵候は生命とりかも知れない。

臥床中少し原稿を書く。

今日黑澤元悌君より書狀あり、四月號棄教問答及び身邊慢筆を讀んで昨年一時講讀中止を申込み、その節大變失禮なことを云つて相すまないと云ふ手紙であつた。自分は讀み乍ら泣いた。わかつて貰つて有り難く思つた。それよりもこう云ふ卒直な眞摯な手紙を書く人の心ばせに對して嬉し涙であつた。キリストと共に生くることは何よりもよし、一時離れてもやがて一緒になる。やがて塚本ともそうなろう。

四月十一日　行詰りに會し只信賴のみ、健康はどうも善くない、働けない、金はない、どうする事も出來ない。何ものもない。あるものは信賴の心のみ、これがなくなつた時は自滅である、底知れぬ深淵、これに入つて滅びない道は只信賴、然しその信賴が若し空であつたならば本當に馬鹿を見るのだ、之は生命がけの仕事だ、然し親鸞が云つたやうに此れ以外に賴るものはない、所詮　滅ぶべき身　只キリストを賴るのみ、かゝるキリストを與へられたる事これが神の最大の恩惠である。

四月十三日　塚本君から和解の手紙が來て心が長い事此の一事で曇つて居たのが今晴々として本當に感謝である。明日來訪との事、眞にキリストに在る兄弟の愛を以て待ち度い、又自分の爲した非について心から謝し度いこゝまでに至らしめたのは祝の努力であつた。又こうなるのは互にキリストを信ずるからである。今後はキリストに在つて假令意見は異なるも互に他を容れ合ひ、舊友として交り度い。且つ彼の事業について同情をもちてゆくやう願ふ。

四月二十一日　鎌倉に小集會を開いて既に三年集會は極く小さい、然し此の集會に於て聖書に於て示された福音を一同信じた。　してその結果、克服し難しと見られた自分の性格は次第に改造され、周圍の困難は次第に克服され、新しい世界がそれ〴〵の上に展開して來た事を見る。自分はこの短期間程福音の實力を經驗した事はない。確にこれは世を救ふ神の力である事を感ずる。今集は少しく擴張せられた。然し自分の願ふ處は人數ではない。我等がこの二三年の間に受けた此の只ならぬ恩惠を今少し他の人に分たんためである。それ故人數が多くては却つて目的を達しない。百人二百人では駄目である、小さい群それが少しづつふくれ出すことを願ふのである。思は東洋全體に在る。然し爲すところは只僅かの集。

五月八日　鋤子が神樣はアダムとエバを造つた後天照大神を生んだのかとの奇問を發した。エホバと天照大神

との關係がのみ込めないのだ。そこで私は答へた、天照大神はエホバとは全く別のもので我等の祖先が太陽の恩惠を讃美し、之を神として拜したのだ。太陽は神ではない、太陽を造つた方が神だとそれならばスサノオの尊は神様か人かと問ふ、あれは神様でも人でもない。嵐である、嵐が亂暴するので太陽は黑雲の中に隱れて天地が眞黑暗になつたのだと返事した。それならば嵐がどうして叢雲の劍を見つけたかと聞く。あれは嵐が放逐されて平穩な風となつて朝鮮から出雲の方に吹いて來た。そうして簸川の上流に來るとそこの住民が泣いて居る。何故泣くかと聞くと洪水が毎年出て田畑を荒しその子なる稻を食つて仕まふと云ふ、それで退治する事となつた。それは稻田（姫）を高くしその下に八つの大きな堀を掘り供水が來た時こゝに流れ入るやうにし此水を四分にづたつたに分ち田を荒さなくした、その時洪水の去つた後に當時は珍らしい精巧な劍が流れて來たのを見つけた、これが叢雲の劍だと話した。

五月九日　益々基督敎は實際生活の力であり、又なければならない事を思ふ、單なる思想ではない、我らの生活の調子を高め、聖める力である。

家庭に於て基督敎があると否とどこが違ふかについて考へて見る、幸福といふことからせば必らずしも基督敎がなくとも幸福であらう、然し本當にホームと稱すべきものは基督敎なくして可能であろうか、神に對する眞の敬虔、人に對する本當の尊敬、之があつて聖い愛の家庭が出來る。現今家庭から不良少年の出るのをよく驗べて見ると大ていは子に對する本當の尊敬、人格に對する尊敬がない、溺愛か然らずば無視、彼等の人格的存在を認めない事から來る。

五月十三日　今曉左胸ラツセルの響甚しく氣持惡しき事夥多し、朝起きる頃は全くやみ、けろりとしてゐる、實に妙な身體だ。ラツセルの響甚だしい時には自分の壽命はもう長くはあるまいと思つた。今年中續くか否かをすら疑つた。

兎に角仕事はイエス・キリストを完成し度い。其の他についてはやり度い事は多くあるも成算なし、何の計畫も立たない。只眼前の義務を果そうとするのみ。

只神に委ねる、自分に何の義あるなし、神が惠み給ふならば惠み給ふのである。所詮惠まれる資格は自分のうちにはない。

五月十七日　鎌倉市中に出た事は善かつたと同時にそれは自分には犧牲であることが明瞭である、善い事は次第に反響があり、一般に段々基督敎と云はずも光を求めつゝある者が次第にわかつて來た、やがて彼等は光に來

るであろう、鎌倉に靈的なる一運動が起るであろう、今日も婦人會について話し會つた。

然しそれらは結局自分の犧牲によつて爲されるのである、生命を捨て自分の事を思はず、家族の事すら思はず只人を愛し、その靈魂を愛して始めて可能である。大きい任務である、始めて知る、神から重い任務を負はされると重い犧牲を需められる事とは同一である事を、イエスの御任務について思つた。

六月二十日　深遠なる思想を平易なる言を以て語り、何人にも解し易くすることに心がけねばならない。學者の如く語る要なし、民衆に力を與へ、指導となる何物かを供せばよい。その方が永久的なのである。

○日曜日矢内原君の話を望が聞いて面白かつた、これから後も聞き度いと云ふ。矢内原君の名譽であると思ふ。僅か九才の子供に一時間以上に亘る長話をあかせず、まだ聞き度いと云ふのは一つはその主題が聖書から來り、人の心（それは老若を問はない）の最も深いところをつくからである。

○自分の身の幸福を思ふ、寢床に臥して居て妻はよく看病し、子は愛あり、母姉妹昔からよし、而して善き友多く、先輩も亦少なからず、これらは皆神から來る。

六月二十一日　病みて己が無力を感ずる事切、只全くキリストに賴るのみ、己が身を我が罪のため棄て給ひし彼に賴りて安全、之以外に安全がどこにある。世の人はこの信仰を不安と思ひ阿片とする。然し所詮他に救はるべき途を知らない自分は假令だまされたのであつても夢であつてもよい。これにすがる、然るに種々なる患難に際會して他の途悉く駄目となつた時始めて信仰が救を得させる事を次第に實驗して來た。どうして之から離れ得やうか、出來るならば他の人々にもこの信仰をすゝめ度いのである。

○大學生が教室を占領し、教授に授業中止强求、大會を開き「大學の自由擁護」をやることの馬鹿々々しく誰かバンダルの侵入を單身防ぎ得たミランの大僧正はいづや。

七月五日　倉田百三氏が朝日に日本の知識階級が重大乃至獨のナチスの焚書に對して自由主義の聯盟を企てゝ居るのを警告して居る所論は面白い。之は日本に今起りつゝあるフアシズムに對抗する運動となり、勢マルクス主義と一致の行動をすることゝなる。一體我が國を根本的に改革しやうとするには自由主義では駄目、マルクス主義は論外、此の新興のまだ理論もない新らしい勢力（之をフアツシズムと云ふ）にまつところ多い。と云へるは我が國の實情を知れる者の言として謹聽するに足る。但し今起りつゝある新らしい勢力も亦駄目だと知られる時

が來るよ。基督者が本當に働かねばならない時がその時來る、自分のやりつゝあることはその先驅だ。

○「福音と現代」七月號に高倉氏が「我らよりも無教會主義者の方が、却つて讀書力がある如く見ゆるのは一考を要する」と　然り一考再考を要する。教會主義者は教會の擁護擴張を以て信仰生活の最大事とした。內村先生は教會を建てる代りに雜誌を發行し月々讀者のハートに直ちに聖書の眞理を傳へた。そのため教會信者が牧師にたより、說教をきゝ教會維持擴張に力を盡すとき、聖書研究誌讀者は賴るべき教會なく、牧師なく只聖書とそのよき指導書とによつて信仰を養つた、之れ自ら讀書力ある所以。

教會主義者は教會といふ設備なくして基督教は存在しないかの如く考へ、教會を大切にする。然るに眞理は眞理として自存力を有する。教會なく牧師なき所、却つて善き信者が生じ、渴ける如く眞理を求める。教會主義者よ餘りに教會のために心を勞する勿れ、直ちに國民の心に聖書の眞理を說け、それで澤山。後は自然に成る。

（臨終に讀ませたる聖句）

われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給ふキリスト・イエスの前にてその顯現と御國とを思ひて嚴かに汝に命ず。なんぢ御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも常に勵め、寬容と教誨とを盡して責め、戒め、勸めよ。人々健全なる教に堪へず、耳痒くして私慾のまにまに己がために教師を增加へ、耳を眞理より背けて昔話に移るとき來らん。されど汝は何事にも愼しみ、苦難を忍び、傳道者の業をなしなんぢの職を全うせよ。我は今、供物として血を灑がんとす、我が去るべき時は近づけり。われ善き戰鬪をたゝかひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。今より後義の冠晃わが爲に備はれり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜はん、啻に我のみならず、凡てその顯現を慕ふ者にも賜ふべし。

テモテ後書四章一―八

臨終

江原祝

一陣の嵐、續いて激浪は地上からなくてならぬものを奪ひ去つた。一人海邊に立つて大海原の物凄い波の動きを茫然と見つめるのみ。今語ろうとして、書かうとして何が綴られやう。心の中は只混亂あるのみ。然し主人が死の二日前、も早や間近に死の來るを知り「この有樣を細かく雜誌に書いてくれ、文章の下手だなどいふ事を心配するに及ばないから」と平素から臆病な私を促すやうに繰り返しきつく命じた。この言葉がなかつたならばどうして之が綴られやう。

七月初め病勢が次第に惡化しゆくのを憂慮しつゝも、尙間もなく再起の希望をいだいて、只其の間のつなぎの積りで八月號に不慣な報告を餘儀なくさせられた。それがかくも早くかくもかなしい結果を再び御報告しやうとは思ひもよらなかつた。人々は皆夢のやうでせうといふ然し餘りにも現實な出來事である。

前掲の日記は七月五日を以てぱつたりペンがと絕え、それ以後白紙となつてゐる。丁度この日より看護婦を要する容態となつた。日に幾回かの發作に七八本の注射を要するやうになつた。暑氣はいよ〳〵加はり終日誰かしらんの手を以て團扇は動かされてゐるにも係はらず堪え難い。注射の跡は日々に增し、食慾不振が永らく續き、痩せ衰へて行きはしないかと母などはそれのみ心配した頃、不思議にも肺部のカタルが次第に減じ、順つて心臟の鼓動も稍々恢復し、呼吸も樂になつて來た。醫師もこの分ならば起きる事は出來ないまでも、この冬位まで持ち直るかも知れないといふ。そして强心劑を水藥から拔かれるやうになつた。その結果急に食慾が付き、何を一口食べてもおいしい。子供のやうに食事がまたれてならない。姉妹や近親友人の心からなる贈物をどんなに喜こんで感謝して、心底おいしく頂いたか筆紙に盡し難い。そして氣分のよい折には「此の分で呼吸困難さへ全くなくなれば現狀維持でいゝから、ベットに寢たまゝでもいゝから、もつと〳〵書き度い、それをお前に筆記して貰ふか淸書して貰ふかして、も少しは御用に立ち度いものだ」と、嗚呼然し、この喜は束の間で胃腸を害しても强心劑を必要とする病狀にあるものらしく又々激しい呼吸困難の襲ふ處となつた。一切を捨てゝ神のためと信じて爲した事の結果が、何故かゝる苦しみを與へ給ふのであろうか、限界せまくしては永久に解けない疑問であろう。而して再び食慾減退を忍んでも强心劑を盛らなければな

らない矛盾に醫師もなやんで居られた。

丁度七月廿一日の深夜激しい呼吸困難と共に二かたまりの喀血を見た。喀血の量の少ない割に苦しみの大きいのは不思議な程であつた。「いよ〳〵やつて來たな」と主人は云つた。この日以後最後まで各日に襲ふ喀血と終日ぬぐつても〳〵後から後から出て來る血痰と、咳のためどんなに肉體がさいなまれたかは書く事をさへ憚り度い。私共の切な箇々の祈は決してきかれなかつた。神樣は耳をおほひ給ふたかの如くにきかれなかつた。或日「噫、こうして血痰の止るのばかり待つてゐても肉體と一緒に靈魂が痩せてゆく一方だ、聖書を讀んでくれ」と、この日から一日中一番氣分の良い時を盗んでヨブ記を讀み初めた、そして祈つた。その後の一二時間は精神と肉體の均等を保ち得てか非常に心地よげに見えた。そして

用はてし　ともし火のそれかあらぬか
　日々にうすれゆく　我が命なりけり
さはあらず　御救の力　われにも來るべし
　たとひおくるゝことあらんとも

又心地よげに

夏雲の上に仰臥し　晝寢かな

又　このやぶ蚊　何をか知らん　わがうちに
　御救の君　宿り給ふを　などと記させたりした。「僕は病氣してつくづく思ふ事はこんな場合決して平常の思以上に一歩も出るものでない。だからいかに平常高い生活、聖い生活をする事が必要であるかといふ事だ」「神樣は少しの誤魔化しも許さない方だ」

又一としきり來る苦しみをジーツとこらえて「ヨブの苦しみそのまゝだね」「何のためにかゝる苦しみが世の中にあるか、自分には全く解らない。無意味だ、無意味だ。必らずもつとよ　世界がなければならない」と叫ばない日はなかつた。そして宇宙全體の榮化される時を切望し、高熱の中から八月號の完末にものにしたのであつた。深刻な苦中よりの衷心のさけびであり、希望であつた。この痛々しい肉の苦しみの側から何と慰めの言葉があろうか、「只同じ病で苦しんでゐる人々に心からの同情が出來る事と、キリストの御苦しみの一端を知る事が出來る事でせうね」といふ以外には、絶えず己が胸の痛むより外すべを知らなかつた。

又或時は打續く咳に苦しみ、肉體と精神の疲勞をどうすることも出來なかつた、然し自分は今餘りにも注射液に賴り過ぎてゐるのでは無いかと心付き、「此の大病にあつて心は常に平安、死も又怖れず、毎日の喀血も平氣でゐられる。これはキリストを信じてゐるから大病を克服してゐるのだ。それだのにこの咳位にどうして信仰に

よつて打ち勝てない事があるか」。かく云つて咳止めの注射をせずに休んだ事もあつた。その時は不思議に一時咳が止つたと云つてゐた。然し病魔は手をかへ品をかへて襲ひかけ、如何ともする事が出來なかつた。

然し主人は「キリストが我が死となり、我が彼の生となる」事を信じぬいて遂に此の病魔にさへ打ち勝ち得ると確信してゐた。嗚呼、然し此の信仰は空であつたであろうか。基督教非難の立場よりすれば或は空であると云へやう。然し眞實にキリストの喜に與つた者は又彼の苦難をさへ喜こんで共にせずに居られやうか。これがほんとうに基督者らしく生き又死に得る唯一の道ではないか。

此の頃藤本重太郎氏の御厚意により熟練されたマツサージの治療をして頂く事再三、非常に心地よく安眠をさへ得られた。又食後胃腸の飽滿を感じ苦痛やる方なく私の下手なマツサージも天下一品と稱して痛く喜こんだ。

又こんな問答を交はした朝もあつた。私が「信仰を以て死んだ時その靈魂は必らず、憂きも、患難も、爭もない神樣の御許（天國といふのでせう）に行き得るのだと思ひます」と、最初から眞心もて看病に盡してくれた辻田さんが「私も確にそうだと思ひます」と、主人は「單純に天國を信じられる人は最も幸福な人、それを決して否定しはしない。お信じなさいと進める。然し僕にはそんなセンチな天國は無い」と。私は「學問の無い私には深い怪疑もなければ、喜も淺薄なのでせうね」「先生のやうに深い學問があつてその疑問からすつかり解決された喜なのだから人にうつたえる處も强いのでせうね」と辻田さんは云つた。もつとつき詰めて聞き度い問題でもそれは病狀が許さなかつた。兎に角天國といへば自分一箇の此の世の苦しみの避難所として期待され、自殺をさへ天國へ行くといつて流行する世の中に、ほんとうの基督教の天國はそんな淺薄なものでなく、キリストの十字架の死と復活と再臨の基礎の上に築かれる宇宙完成の狀態をいふのであると信じてゐるのではないかと幾分想像される。

かくして七月も過ぎ八月に入つた。かゝる病中からどうにか八月號を發送し得て、喜は決して小なるものではなかつた。然しすでに出來上つた雜誌の內容にもう目を通す元氣は失つてゐた。「病氣と知つて見舞の手紙がくるだろうからお前に返事を書いて貰ふから葉書を澤山用意しておけ」といつたのは確か三日の日であつた。堪え難い暑さと病苦の中から思は讀者の一人一人の上にあつたのであろう。肉體の衰へは目立つて來ても天來の生命によつて生きる力はかなり偉大なものであつた。四日の午後十一時再び只ならぬ苦しみが襲つて來た。五六本の

ピタカンフアも今日は用をなさない。全身から玉の冷汗が枕といはず、敷布といはずにじみ出して來た。激しい戰だ側から「どん底まで下つて下さつたイエス樣がこゝにゐらつしやらない筈はありませんね」と云へば「理屈はわからない、が只信じるだけ。子供のやうに」といふ。かけつけた醫師の直接胸部への痰を切るための二三本の注射、又强心劑の數々の手當の間も苦しい息づかひである。脈は無數である。いつぱつたり心臟の停止が無いとも限らない。やがて目は次第に上に上につゝて行く。そして力ない目は停止した。呼んでも〳〵更に返事はない。嗟、これ切りであろうかと母と不安の目を見張つた。醫師は明方までもちませんといふ。瞳孔はすでに開いてゐる。子供等を呼び起して代る〳〵唇を潤ほさせた。やがて五日深更一時頃ふと眠から覺めたる如く周圍を見廻した。そして最期と悟つたらしく苦しい呼吸の中から稍々感高いとぎれとぎれの然ししつかりした聲をあげて祈つた。

「嗚呼、神よ感謝す、今日まで私をお守り下すつた事を、今、今、我が靈魂をあなたに御ゆだね致します。神よ御意のまゝになし給へ、我は天下の同病者に限りなく同情す、天下の人々皆この罪の身體が全く潔められ、榮光の主と共に復活する事の出來ますやう祈り奉る。どうぞ今榮光の主を我に示し給へ」

かくて後兩手を天に向けさしのべた。その靈魂を全く神に御ゆだねする心がまへであつたであろう。暫くして母と私以外の人を退け、母に「色々御世話になつて有り難う御座いました。何も御恩返しをしないで御許し下さい。どうか基督を信じて下さい。これより善い事は外に決してありませんよ」と、母は「直ぐ後から私もゆくから待つてゐて頂戴ね」と云へば「イエス樣を信じなければ一緒の所で御目にかゝる事は出來ませんよ。姉さん達にもよつく此の事を云つて下さい。神樣を信じるやうに。秀雄にも」そして私に「有り難う、ほんとによく助けてくれて有り難う」といひ、母に「祝はほんとうによくやつてくれました、誰にでも出來る事ではありませんよ」といつた。又私の母や兄姉達へ盡すべき事を一つも盡さなかつた事を詫びるやうに言ひ殘し、そして三人手を取つて今後を誓つた。

「どうか私は皆のために死んでも惜しくないから」と一言一言呼吸困難の中からはき出される。

やがて前の焦燥の樣はなく、階下の人も呼び寄せ、ロマ書八章及びヘブル書十一章一―八迄を讀ませ、ちとせの岩よの讃美歌を自らも苦しい聲で合唱した。歌ひ終へ

て子供らをにこやかに見渡し一人々々に注意を與へた。何か答へさせやうとしても上の二人は泣き伏すのみ。再び私に「子供らをよろしく賴む、殊に望をよろしく賴む、僕よりも立派な者にしてやつてくれ」と、あゝどうして之を誓ふことが出來やう、私は唯「何も出來ないでせうが神樣におすがりします」と答へた、靜かに合點してゐた。私は「短い一生でしたがほんとに有り難う御座いました」といつたのに對して「樂しくもあつたし、緊張したいゝ一生だつた、お互に感謝して死なれゝば之に越した幸福はない」又「誰一人恨む人もなし、すべてよかつた。殊に最後は良かつたね」と如何にも滿足氣に公開講演の事を感謝してゐた。すべての物に對する一大調和である。又敬愛する友人の誰彼を思ひ浮べ、一々その厚意に對する感謝の傳言をなし、當底言葉を以てしてはあらはし得ない容子であつた。又

「寛一君のことは僕は心から思つてゐたのだがなーどうかして信仰に返つて來られないかなー、よろしく言つてくれ」と言ひ殘した。又純情をもて看護してくれた辻田さんを側近く呼び寄せて感謝と遠慮のない注意を與へ、看護婦に禮をのべた。

「死ぬにはまだ間がある」、「のどが渴いた」といふ。冷えた葡萄液を持ち來たるを、よい機會だと申てパンをもち來らせ、コリント前書十一章を讀ませ、自ら祈り、聖餐式を行つた。何か書き殘さうかと申して有り合せの封筒に絶筆をしたゝめた。そして

「僕の信仰は何先生、彼先生から頂いたのではない。イエス・キリストから直接頂いたのだ」

「僕が死んだら無教會主義が問題になるかも知れない。そしたら僕はそんな小さな問題ではない。キリストの十字架の福音が第一義だと云つてくれ」

「イエス・キリストが未完成で、殘念だ十字架と復活をウンと愼重に書かうと思つて餘り愼重にし過ぎた。クロンウエル傳も書こうと思つて中途だが止むを得ない。」といかに無念の思であろう。

「何か歌つてくれ」と乞はれるまゝにやつとの事で讃美歌二つばかり歌つた。かくしてまだ死ぬのに間があると今度は談笑し始めた。辻田さんがその容子を見て嬉しさに堪えず「先生まだ死にはしませんよ、神樣がまちがつてゐらつしやるのですよ」と云ふや否や大喝一聲「馬鹿、神樣に間違などは斷じてない」と呶鳴つた。初めて我に返つて窓外に目を見やれば東天しらじらと山の端から明けて一番鷄の鳴く聲を聞いた。化石したかのやうな重苦しい頭も復活の朝を思つて晴れ渡つた。

やがて電報に驚いて姉妹等かけ付け、又一しきり感謝

や依頼の數々、切々の言葉が交はされた。しかして發作の靜まる（勿論注射を以て）のを待ち、再び聖書を開かんとして探したれど「あゝもう目が見えなくなつて來た」と非常にせかるゝ如く頁をくり、やうやうテモテ後書四章を開き一節より九節までを讀ませ、姉達の爲めに自ら祈つた。

「僕が死んでも女々しく騷がないで、日本武士の娘らしくやつて下さい」と泣きじやくる姉妹を勵ましたことは耳朶を打つた。緊張の後に非常な疲勞が襲つて來た。意識が餘りにも明瞭なるため靜かな睡眠を求めて得られなかつた。折から篠つく雨が一度ならず降りそゝいだ。不安の內に夜を撤し六日早曉再び昨日にも增さる激烈な呼吸困難、殆んど肩を以て呼吸するより外方法がない。酸素吸入の交換も頻繁である。醫師は當底絕望を宣言する。家人としては一縷の望は無きかと迷つた。然し三四日前迄「どうせ駄目なら苦しまずに死なうか」とも云ひ又「最後まで戰つて見やうか」とも云つた。此の二つの間に在つて迷つた。然し之以上の苦しみを見るに忍び得ず思ひ切つて鎭靜劑の注射を依頼した。此の日午後なりしか黑崎の兄のかけつけてくれたのは、一目見て驚いて手を握り、

「思ひがけなかつた、よく來てくれた、後をよろしく頼む」

それ以後次第に容子が變つて行つた。

「あゝ、身體が鉛のやうに重くなつて來た、こうして段々死んでゆくのかな」「しかし平和だ」醫師が「お苦しいですか」と聞けば兩手を擧げて「もつと」といふキリストのお苦しみに比べて小さいといふのであろう。

再び子供らを呼び頭をなでて父として最後の愛と注意を與へた。又雜誌思想と生活發刊以來六年間彼なくしては當底繼續し得なかつた田村次郎さんが最後にかけつけた。もう思ふ存分言ひ得ない爲め只につこり笑つて力强く謝意を表した。こんな狀態にあり乍ら「まだこんな力があるぞ」と知らせるかの如く私の手が痛い程握る事も出來た。此の力はどこから來るのであろうか、若しか恢復の兆候ではなかろうかと私は迷はざるを得なかつた。

時がたつにつれて全身の機能の働は停止狀態となり、永い間惱ました啖の排泄さへも無くなつて仕舞つた。從つて苦しみとしては感じ得なかつたやうである。最後の夜神田モードさんより私に送られた慰めの手紙に目を通し、「いゝ友達だ」と靜かに云つた。

嗚呼然し刻一刻脈搏は數を減じ、呼吸は遠のいてゆく。七日午前一時三十八分大きな呼吸一つ殘して、最期である。噫。

柏木通信（第三十三信）

齋藤宗次郎

柏木通信第三十三信　余は今本號に於て、最後の通信を綴つて親愛なる讀者諸士に見えんとするに當り、神の奇しき御導きを蒙りし過去數年間を回顧し、且又尊き攝理の漸次に生み行く將來を推想して感謝と希望に堪へざるものである。余の畏兄江原主筆は常に十字架の信仰に歩みし眞摯從順の士にして、其『聖書之眞理』は純潔精品の雜誌である。余の如き想に文に些の見るべきなき低劣の一野人が、如何にして毎號其貴重なる紙面の割愛を受けたるかは、神の特別なる命令と氏の寛大なる措置に因りしものといふの外一の理由をも發見することは出來ない。獨自の使命と光輝とを以て現はれつゝある內村全集の間斷なき業務の一端に携る身にありて、天賚の時と力とに接するなくば一行だも草し得ざる事實を案へては、一面に於ける重責の苦惱を思ふと同時に、其半面たる聖靈に歩む基督者の行爲の極めて安全愉樂なるものなることを信ずるものである。一體此通信は內村先生の死によりて始まり、江原先生の死に於て止むの嚴明なる姿である。此二大事實を貫く歷史的精神が創造の斧鉞に固着して國民と人類とを祝福し、神の預言成就に資するに際し、幾多の小事實が相應の使命を胎みつゝ起り來て其大樞軸の周圍を擁護し、時の波を蹴つて戰ひ行く狀態を記述せんとしたるものは所謂柏木通信と名けし拙筆蕪文であつた。只恐る、毎號同じ題下に類似の記事を報ぜし時、又重大なる預言的精神を選民に傳ふるに當り、暗示的模糊の文辭ひねばならなかつた時に、或は倦忌の念を起し、或は奇癖として斥けられしことがあつたではないかを。

柏木の近狀　柏木は帝都北郊の一小地名である。其蜀江山九一九の三百坪は、內村先生が明治四十年より昭和五年まで二十四年間の居住地、苦鬪陣、勞働場、然り彼を用ひての神の戰場であつた。キリストに對するベツレヘムとナザレとは勿論のこと、パウロとダマスコ、アウガスチンとカルセージ、ダンテとフイレンチエ、ルーテルとアイスレーベン等、偉人と土地との密接なる關係を解する者は、日本に於ける柏木の地が夙に神の創造聖圖に一特點を畫し、我が蜻蛉洲が亞細亞大陸から分離する時に、既に或る日の爲に豫定せられたる所なるを信ぜざるを得ないのである。其處に於て如何に深刻なる祈は捧げられたか、如何に激烈なサタンとの戰は鬪はれたか、如何に優渥なる天恩に浴したか、如何に多くの人々の饑えし靈魂が追慕の視線を放つたか、如何に鮮明にカルバ

リーの十字架の眞理は宣べられたか、如何に尊き愛國の涕は注がれたか、如何に高き預言が發せられたか、今や誰人も其等一切の事實の質と量とを知悉することは出來ない。長き三千年を準備的區間として勇飛疾驅し來りし若き日本に興りし歴史的事實の綜合も到底柏木の一角に起りし彼の天に通じ地を貫く偉大な事業に比すべくもないのである。去れば我日本は愚か全人類の運命に干與する新文明源泉の精神の發生を見たる柏木の地點は、徒らに記念塔を以てすべき單なる一地名にあらずして、今より後は一大精神を代表する言として永久に後人の心に傳はることであらう、定にこれあるが爲に幸福なるかな日本、多忙なるかな日本と歌はざるを得ない。幾回か柏木！柏木！を呼び來りし余は、今や讀者諸君と筆硯の別れを告ぐるに當り、玆に附言を敢てするには決して無意義無益のことではないと思ふ。

其後の柏木は相變らず恩惠に滿され靜肅を保たれた。淺間山麓の山氣野花涼風の中に健康を增されつゝある靜子夫人は、屢々書を寄せて故園の安否を問ひ又我等の勞を慰められる。信仰美談を翳す今井館講堂は嚴然として昔時の面影を保ち、多年全地に送り出せし恩師の無形の產業が、到る所に花果の收穫を見るの時を待ちつゝある。其附屬とも見るべき預言寺は淺野氏の起臥する所となつて居る。氏は祈禱默想研鑽傳道に全力を灌ぎ、克く獨立傳道者たるの苦節を守りて、靈界日本の立脚地を深く地軸に据え高く參宿に繫がんとの高潔なる信仰生活を營まる。彗星の如く訪づれ來る大賀氏高橋姉、靜かに尋ね來る葛卷氏青山氏は、孰れも愛を以て柏木精神の安全祝福を冀ふ人々である。今後幾多の星霜を迎ふる間に、此境を通して神意の現はるゝもの必ず多いことであらう。再び通信を諸士の掌中に送り得るは何れの日か？。

窓外の白雨　八月六日名古屋兄と同道して御殿場なる東山莊に向つた。目睫の間に開かるゝ聖書研究會の準備に遺漏なからんことを期する爲であつた。此世の事は明日を保證することは出來ない。行つて見れば意外の事故が起つて前約の內容に裂傷を生じ、應急の策も講ずるに詮なき有樣であつた。然し其儘で下山することは斷じて出來ない。兄は信仰と愛と常識の限りを盡して最善の途を諮るを觀た。余は其側に默禱するのみであつた。斯くて一切の成り行きを主に委ね、愛の奇跡を祈つて歸途に就いた。午後三時小田原邊より驟雨となつた。余は鎌倉に立寄る豫定を中止し、窓外の白雨の彼方に、大患の身をイエスの愛の御手に支へられつゝある江原主筆の爲に只管祈つた。大船近く眼を放てば、昭和六年六月十日愛兄と偕に登つて福音と日本國との爲に肺肝を吐露せし扇

ケ谷の裏山の松の梢を認めた。生死を判じ得ざる現下の容態を想ふて堪らなくなつた。然し靜かに兄の惠まれし生涯を考へ、最近なる鎌倉講演の奮闘に思ひ及んで力强く感じた。生ける聖書の眞理を提げて生ける者の里に突進せし大兄の活動は眞に時を得たるものなるかな。そは絶對の至上善に始終せし兄の生涯は不朽なれば也。今や禪林邃き黄梅院裡の夢窓國師の大悟は夢と消え、街頭高く響きし日蓮の佛法は可惜死せる遺跡と化し去るを見る時に、新しき福音を以て鎌倉の地に幕張りを敢行せられし兄の晩年は、實に神の殊更なる配慮恩寵に依るものである。思は思を生んで際限ないが、雨は既に歇んで大山を掠むる斜陽は海上の積雲を照すこと急であつた。兄を愛すること切なる山桝、藤本、鈴木の諸氏を沿道の彼方此方に思ひつゝ都門に入つた。

夏期聖書研究會　神の御計畫に成る空前の集會であつた。神は統計と組織とを好み給はぬ故、之が記錄を試むるは至つて困難である。然し内村先生の死によつて定礎式を起され、藤井先生の死によつて上棟式は擧げられ、江原先生の死によつて落成式が遂げられし直後に於てバールに跪かざる幾人かゞ國の四隅より立つて窄き門を通りて來り、選ばれし人としての共同の新たなる生活を見るに至つたものなることを知らば、其如何に意味深きものであるかを略ゞ察せらるゝであらう。其特長は神中心イエス中心を以て一貫せし點であつて、先生先輩長老なる者一人もなく、急がず熱せず騷がず、謙遜と靜肅と平和と希望と清潔とがキリストの愛の圈内に於て實現せし集會であつた。

一、共同生活　故郷を去る時には一二人、宿舍に入ては二三人、浴室に於ては四五人、歩廊にあつては七八人芝庭に出でては十人、展望地に上つては二三十人、食卓に着ては六七十人、講堂に納つては八九十人、兩性の比例と年齢の差等も調和の美を保ち、各自の地方癖も信仰によつて除かれあるを見た。九州と關東と相和し、四國と東北と相解し、關西と北陸と相通じ、鮮人と我等と相一致する所に愛の疏通を認むることは出來た。其處には統率的人物なく、熱狂的憧憬なく、嫉視の眦なく、陰口の冷評なく、憤慨の不平なし。慣れぬ食餌に舌鼓を打ちズツク張の褥に安き睡りがあつた。我等相共に神の子なりとの自覺と相愛の心と寛容とあれば、兄弟の共同生活は其目的を達し得らるゝものである。加之、凉を追ひ骨を休め書を讀まんとて夙に來り宿泊し居る數十人の同胞に對して常に禮儀と同情の愛を表し得る機會を與へられしは、我等一同に取つて思ひ設けざる恩惠であつて、意外の事變、約束の違背なる劍を平和幸福の鋤にうち代へ

られたる神の特愛に出でしものである。

二、開會式 九日の夕振鈴の合圖に應じて講堂に集る會衆各自は、顏面に光、胸宇に望、膂脚に力といふ信仰的準備に身を固むる美はしさであつた。大賀氏司會讃美歌三五番、石原氏哥林多書を朗讀して後祈る。名古屋氏、事此處に至りし經過を報告し、藤本氏本會の精神を明かにし、余は一般注意の細目を擧げた。再び感謝の歌は綠林に響いて餘韻は富士の裾野を渡り、背後に漏れしは金時山の峯を越えた。平和なるかな天國の市民を蔽ふ淸爽の空氣、我等の集會にありては、地上に見る所の權勢を示すの要、特質を誇るの言、監督の眼を張るの要、怠慢を責むるの語、懇願を迫るの辯、決議を要する緊急の問題等一つも無かつた。我等基督者に取つては萬事は既にシオン山に於て悉く根本的に解決せられたのである。一同平安の裏裡に導かれた。

三、講演 翌八月十日より十四日までの講演は午前に一、石原兵永氏の羅馬書大觀、二、塚本虎二氏の共觀福音書問題、三、金澤常雄氏のエレミヤの內的生活、四、畔上賢造氏のヨハネ書の一斷面（說敎）及びイザヤ書に於ける主の僕、五、黑崎幸吉氏の聖靈の研究で孰れも充分なる祈禱の準備と聖書中心より聊かも脫せざる深き廣き研究の結果を發表されしもので、既に限られたる二三時間に於て、此豐富なる材料、深遠なる眞理、高尙なる敎訓を述べられし諸講師の苦心に同情と敬意とを拂ふと共に、僅々五日間に然も居ながら此恩惠に浴せし會員一同の幸福は非常なものであつた。今玆に其要綱をさへ揭げ得ざるは遺憾なれど、幸各講師の主幹せらるゝ雜誌に現はるゝことなれば就て味讀せられんことを望む。午後の課外講演は一、大島正健氏の國語の話、二、大賀一郎氏のパレスチナの植物、三、鈴木俊郎氏の內村先生と戰爭であつた。是れ孰れも蘊蓄深く造詣到れる各講師の腦中より流れ出づることなれば、語るに易く聽くに易き多趣味有益なる研究であつた。會員に取つて意外の收獲といふべきである。聖靈の立案に從ふの安全を今更の如くに感じた。

四、諸小集會 終日故障なく聖靈の恩化に預らん爲の準備として每朝祈禱會を開いた。會員交々に立つて司會の任に當つた。簡單なる自己紹介は最初の晩餐の席に於て行はれた。入間田氏の感想があつた。キリストと自分との關係更に自分と會衆及び社會との關係立場を明かにせん爲の感話會はあつた。正直に自己を告白することによつて益々深く相識り相愛するに至つた。我等は又半日の間心身を天然の懷に投じ、僞らざる天然を通して人類に聖書を賜ひし愛と生命の神を識らんが爲に、一部は長

尾峠乙女峠に遠足を試み、一部は富士五湖巡りの途に上つた。一人の落伍者なく一服の藥餌を呼ぶ者なくして樂しき經驗を味つた。思想の衝突信仰の相違の爲に多くの難問題に苦む姉妹等の心に平和直進の坦道を拓かん爲めの婦人會は開かれた。信仰と實驗に富める兄弟等は一々之を解いて求むる心を滿された。純福音による新しき使命に服するに當り眞理の躍動と歩調の正律を來さん爲の懇談會は壯年組青年組婦人組に三分して開かれた。忌憚なき表白は何れも目に涙し拳に汗して眞劍の協議に入つた纖弱の婦人も黄口の青年も禿頭の老人も等しく靈感に生くるを見た。碧綠の樹海に浮んで富嶽の夕日の前に祈る夕陽會は開かれた。丘上に立つ一團の群は世に見るべき誇るべき數ふべき何物もなけれど、各自父なる神の愛に沐することの深さは測り知ることは出來ない。東西南北より導かれ來りて此處に相會し、僅かに數日の間に底知れぬ交りを結ぶに至つたが、將に相別れて後は再び相見るの機會の有るも無きも、主に在りて此結締の絶えざらんことを翼ふ爲の親睦會は開かれた。司會者名古屋氏に指名せられし十七名の兄弟等は各々衷心の感謝と歡喜と慰藉と希望とを述べて、宛然百花爛漫の境に在るの思ひであつた。赤き西瓜と甘き菓子とが味覺の漣波を以て心奥の靈感に應ずる頃吉田繁氏會員を代表して發起人事務員に對し慇懃の謝辭を述べられた。恩寵によつて一絲亂れざる經過を執りしものといふべきか。

五、閉會式　十四日午前十一時命により余は此式の司會者として起つた。其刹那神の榮光の座を仰いで歡喜の滴り來るを感じ、我衷を省みて滿足の充ち溢るゝを覺え、緊張せる會衆の面を眺めて勝利の色に輝くを認めた。神のプログラムを奉じて日を閲すること玆に六日、時充ちて最後に達したる此會の爲に先づ感謝の祈禱を捧げた。次に藤本氏は假りに夏期聖書研究會と名づけて開きたる此集會の中心の精神はイエス・キリストの十字架に絶對の信頼を奉るにありと斷じ、之に適應せん爲の諸般の經過を明かにした。續いて畔上氏は演題の選定と順序と內容に就きての意の在る所を述べ、更に我等は何を携へて下山すべきかの注意を與へて戰陣に向ふ身の裝ひを敎へられた。最早一同の心の整頓は成つた。アヽ自分の爲ではない日本國と人類との爲である。否神の榮光の爲の集會であつたとの確信を持つに至つた。其爲に現在の我職は我を待ち、我鄕は我を要し、日本と亞細亞とは我等に無言の叫びを寄するではないか。名古屋氏の最後の報告の聲に接して讃歎感謝は絶頂に達した。足れり足れり我杯はあふれたり。宜われよき嗣業を得たるかな。默し難き默禱を獻げて正午散會。

追

憶

萬里を憶ふ

母　江原茂登

江原家は其祖江原和泉守佐次が永正年間に美作國今の岡山縣久米郡倭文に其居城を築きまして以來代々此地に居住し同地に現存の江原寺は其菩提所で御座います。

佐次の孫、兵庫介親次は豊太閤の朝鮮征伐にも從軍致しましたが豊臣家滅亡と共に江原家も亡ぼされ後津山城主森侯に仕へましたが森家の斷絶に伴ひて歸農し其後幾何もなくして次の津山藩主松平家に仕へて明治維新に至りました。

萬里の父晴次郎は學問を好みまして四才の時一字一尺位の大きさ「松竹梅」と書いた額が村の天王様の社に納めてございます。五才の時津山藩の學校に助教を致して居りました。

萬里はその長男に生れましたが、六才の時父を亡ひ母の手に依つて成長致しました。素より裕ならぬ家計は未だ幼き四人の子の教育に餘程苦心を致しました。萬里は四人の中でたつた一人の男兒でございました。豫て父は學士に致したい希望を持つて居ましたのでございます。彼の幼時は氣の弱い泣蟲でございましたが小學校時代はズート優等で通しました。中學の二年頃には大變ないたづらで落第するのではないかと危ぶまれましたが後勉強致します様になりまして遂に特待生となり卒業の際は縣知事から賞品を頂きました。

直ちに一高に入り帝大に進みましてから、呼吸器が弱いから鎌倉に轉地せよと醫師にすゝめられましたので私は出京致しましたのでございますが二木博士の診察を受けました處「これは知らぬ内に病氣になり知らぬ中に癒えて居るのである音が違つて居るから前の様に申されたのであろふ心配する事は無い」と申されましたので大いに力を得ました。こゝでも特待生となりました。時には電車賃を節して學校から徒歩で小石川小日向臺町の姉の處まで參りましたり又夕方にはよく私の肩を打つて呉れます様な事も度々ございました。

學校を卒業致しまして住友の本店に勤めます様になりましたので阪神間の芦屋に私と二人でさゝやかな家を持ちました。夏の夕方私は團扇を持ち彼はステツキを待つてよく散歩に出掛けましたがいつの間にか團扇とステツキとを取り替へて持つて居りますので大笑ひを致して歸つた事も度々ございました。又或時は萬里が少々熱があると寢て居ります時私も熱が有る様なと申して計つて見たら私の方が高かつたので「それでは代りませう」と申

して私が代つて寢てしまつた事など思ひ出は中々盡きません。附近の方々は「江原さんは親孝行だ」とよく申されて居ました。

其後結婚致しましたので私は東京の娘から來てくれと申しますので上京致しました。後河合さんの御盡力で東京帝大に勤める樣になりましたが間もなく病氣の爲め出講出來なくなりましてよく相濟まぬ〳〵と申して居りました。私は片時もこの病氣の事は忘れられませんであちらこちらで好いと申す藥は送り色々心配致して居りましても彼は一向平氣で「藥はきかぬものだ安靜に限る」と申しながら少しの間も本を手から離しませんでした。

此度の病氣の知らせを受けました時最早終りではないかと感じられましたが何分慾目があるものでございますから今に良くなるかとも思つて看護の手傳を致して居りました。八月四日の夜は朝まで保たぬと醫師に申されましたので親戚に打電致しました其後意識が恢復致しまして私初め妻子看護婦などへ一々別れを告げました。お友達の皆樣へ一方ならぬお世話になり何のおむくいも致し得ずして逝く事をよく〳〵お詫び申上る樣色々皆樣から受けました御恩を感謝致しました。これで申しのこす事はないとてお祈りをし讃美歌を歌ひましてばんさんをすると申して「パン」と「葡萄液」とを持つて來させ自分でパンを裂いて一同に與へて平和を喜び私と妻の手を握りつゝうとうと眠りました。其時姉達が東京から參りました。

六日の朝は意識が朧朦として來たと申しまして再びお祈りをし聖書を讀み、姉達に遺言を致し、子供達も呼び來て下さつた親類の方々にも御挨拶をして夜半一時半過「あゝ平和だ」と申して遂に永眠致しました。代れるものなら私が代りたいと思ひ續けて居ります。

江　原　茂　登

吾が命神にさゝげて祈るなりわが子の病いやさせませと
病ひ重き吾が子思へばくりや邊に氷わるまも神にいのりぬ
鎌倉に病みて久しき吾子の命あるもあらぬも神のみ心
病む汝(なれ)は老い母われにみとられていかにわびしき思ひなるらし
ぬば玉のくらき心に夜もすがら明けゆく朝の光り待ち居り
日もすがら鳥なきたちぬこの夕べ汝(な)が脈は二百に近し
朝開き夕べにしぼむ朝顏の短かき花を見つつ逝きにし
病む床に樂しみ見つる朝がほの花あすも咲かむ見る人

なくに
母われの命ちぢめて汝がために生くべき道をいのりしものを
とし老いしわがためたのむおくつきを汝がために今日たずね來にけり

永別に臨みて

長姉　犬丸恒

豫ねてかくなる日の近づきつゝある事は覺悟されて居ながらも矢つ張り慾目で今一度持ち直すのではあるまいかと賴み難きを賴んで居りました。

八月五日午前一時門外の呼鈴はけたゝましく鳴りました。ハツトしてうけとつた電報は「マサトキトク」のしらせでございました。早速練馬の妹と次男と私は車を鎌倉へと走らせました。

一昨年の大患以來ずつと衰へた私の身體は未だ恢復せず醫藥に親しんで居ります處へ十日程前からの長男の病氣でその看護に餘程疲勞して居りました。長男は叔父の危篤に侍る事のできないのを悲しみましたけれどあわれと思つてもどうする事もできませんでした。

車中どうか間に合へばよいがと一心に祈つて居るうち私はだん〳〵氣持ちが惡るくなりアヽまた一昨年の病氣が再發するのではないか、どうかそんな事のない樣にと二重の心配を致しましたがどうにかその事もなく鎌倉に着きました。直ぐ間に合つたかどうかと聞きました處、「あの時は醫師も夜明けまで保つまいとの事で打電したけれどその後落付いて今は眠つて居るから少しこちらで休め」と申樣な事でございました。暫くして病室を見舞ました。さぞ痩せ衰へて聲も出ない樣になつて居る事と思ひましたに二週間程前に見舞ました時ほど驚きませんでした。顏色も赤味を帶びて聲もしつかりと「よく來て下さつた。有難う。長い間色々お世話になりましたその御恩を返さずに終る事は心苦しいが致し方ありませんどうか兄さんにも宜敷お禮を言つて下さい。秀雄も身體が弱いから無理をしない樣に。此の僕の事を考へて前車の覆がへるを見て後車の戒めとする樣傳へて下さい。まだ〳〵大丈夫です少し慌てすぎたのです。こんなに夜中來てもらはなくもよかつたのです。こんなに皆に圍まれて暖い看護を受けほんとうに自分は幸福です。今は何も思ひ殘す事なし此の上はたゞ神の思召に依るのみです。今朝は痰もよく切れ呼吸も大變らくになつた近頃こんな事はないのです。昨夜から昂奮して居るから少し靜かに眠

むらせて下さい」と申す様子は中々危篤の人とも思へぬのでございました。

これ程の病苦の中にあつても團扇を借せと申してそれを口にあて呼吸の他人にかゝらぬ様にと細い事にも弟は注意を致して居りました。私は階下に居りました時けたゝましい「ベル」に驚き病室に入つて行きました。又呼吸困難がきた様でしたが稍々靜まりかけましたと見へて皆々に靜かにして呉れと手にて制し靜かに目を閉ぢて祈禱を捧げました。その聲はしつかりして居て常と少しも變らずこれが今逝かんとして居る人とはどうしても思はれません。それが終ると祝さん（妻）に聖書を讀ませ次々に握手してこれ迄の恩を謝し、後事を托し、知人に傳言し、そして神の愛を知る様、「キリスト教を信ぜよこれが人世の最も善い事である」と訓へられました。

かくて不安の中にその日は過ぎて翌六日となりましたがだん〳〵死期は近づいて來るばかりでございます。昏睡より醒めた時いよ〳〵別れの近づいた事を感じたのでございませう子供達を呼び一々その頭を撫で「善い子になれ虚言を言ふな。父は虚言を言はなかつた虚言を言ふのが一番惡い事である」と溫顏に微笑を湛へて訓戒致しました。それから枕頭に在つた辻田さんをさしまねきヂツトほゝ笑みつゝ暫くその顏を見て居ましたが此の時の弟の顏はなんと申したらよいで御座いませうか恰も慈母が幼兒に對する時とでも申す様な顏色なり態度でございました。そして懇々と訓へて居りました。その光景はなごやかと申しませうか平和と申しませうか一寸旅行する人が留守中の事を申しのこして居るとでも申す様な有様でございました。たゞ違つて居たのは感極まつて辻田さんが聲を揚けて泣かれた事でございました。その後は段々呼吸困難になり酸素吸入を絶えず續けて居りましたが昏睡狀態となり夜半一時半頃ふつと目を開き双手を擴げ昇天を知らすが如くして何の苦しみもなく遂に逝いてしまひました。

嗚呼何と云ふ嚴肅な光景でございましたでせう。ほんとうに神の御召を喜んで逝つた平和な最後でございました。實に自づから頭の下るを覺えました。

憶えば十餘年の長い間病苦と闘ひその間幾度かその生を危ぶまれました。その苦しみ。それのみでも堪えがたうございますのに色々の惱みを持つて「あの身體でよくまあこれまで保つたものだ。まつたく信仰のお蔭げだ。」と常々私共は申して居りました。然しもし病氣でなかつたならかくまで神様の深き御惠みを知る事はできなかつたでございませう。あゝ　この御同情。この御追慕實に何と感謝致してよいかわかりません。唯生前これを知ら

せて喜ばす事のできなかつた事を返す〳〵も殘念に存じます。

どうか殘つた遺族が再びこんな病苦を味ふ事なく、皆様の御同情を無に致しませぬ様逝いた人の心を心として立派に世に處して行かれます事を日夜私は祈つて居ります。

松井欽子

私と萬里とはきようだいの中でも一番年齢が接近して居ましたので幼い時はいつも一しよに遊んで居りました。別に喧嘩を致しました記憶は御座いませぬけれども私がいつか引搔きました爪あとがかなり大きくなりました後まで彼の額に殘つて居ました事は私の心を痛くする處で御座いました。私は女學校にゆき彼は中學校に入りましてより生活がわかれわかれになりまして何時しかあべこべとなり何事にも彼の方が兄のやうになつてしまひました。幼くて父を失ひましたこと既に不幸の一歩で御座いまして誠に苦難の一生で御座いました。思ひ出すこと皆涙で御座います。私は彼の病中しばしば音づれて慰めるといふ事も出來ませんでしたが病ひ既に重りました一日彼を病床に尋ねました時左に掲げましたつまらぬ歌の中六七首見せました處姉さんの云ふ事は望坊がお母さんにだだをこねて居るやうな事を云つて居る生も死も何事もみ心のまゝにと思はなければならぬ。とて猶色々話しかけますので又熱が出ましては大變だと思ひましたものですから、病氣がよくなつてから御話しをよく聞いてあなたと同じ信仰を持ちますからそれ迄話さないで下さい。と申しました處うなづいて止めましたが遂に永遠に虛しきことゝなりました。然し鈍な私は今迄教へを聞きましてもそんなものかなあと思ひますのみではつきり分りませんで御座いましたが此度萬里の死によりまして何だかキリスト教と云ふものがはつきり心に分りましたやうな氣が致します。臨終の際天國に於ける再會を約しましたがいつの日か必ず會はむ望みに私は滿たされて居ります。

（弟と姪鎌倉に病む）

胸を病む人たづぬるは稀にして潮けむる海もかなしきろかも

鎌倉のうみに風吹き沖べまで白浪あがり立ち騷ぐ見ゆ

この土地に親しきもの〻二人まで病み居るといふわれ堪へがたし

山水の細々流る〻溝川に沿ひたる道は海藏寺に盡く

癒ゆる日をしたに待ちける年月や虛しきものにわが祈りつゝ

嘆きては時に疑ふ事もあれなほすがりまつるおほき力

に
世に生きてなすべきことを多く持つ人をむなしく死なしむる勿れ
幼子の育ちゆく迄そこばくの生命を君に許させたまへ
うつし世に息ある君にあはむためま夜なかかけて鎌倉にゆく
君病臥る窓べを漏れて灯見ゆほのかに白む朝光の空
うつしみの弱きに生きて堪ふるより死の安けさを今は思はむ
遠つ代の聖の如き面ざしにまざまざと想ふ君が一生を
これの世に病みさらぼひて堪へにつゝいまぞみたまは天に安けき
天なるや逝きにし人といつかわれまさしく會はむ願ひこそ持て
人の世の大き歎きにあへるとき空遠く月の澄みて隅なき

妹　小泉勝子

ひとすぢに唯ひとすぢに祈るなり我が行くまでのはらからの命
今日しらぬ人とも見えず力強く説きたまふ君が眼のかがやき
身もたまも神にさゝげて安らけく逝きにし人は尊かりけり
たまさかに訪ひ行きし我をなつかしみ語りし人の面わ忘れず
病みませど彼の山かげにはらからのいますと思へば嬉しきものを

無言の傳道

横尾睦子

煌々たる電燈の光の下に作業して居る者が、急に其電燈を奪はれたらどうでせうか。江原先生を失つた私の困惑は丁度それでした。意氣地なくも一時は胸つぶれて只呆然、涙の落つるを覺えませんでした。消されて今更に、私共にとり先生が太陽のごとき光であつた事を痛感されます。然し先生の御生涯、平生の御教訓、殊に御臨終の床より遺された「主イエス・キリストを信ずる事、是人の至上善」なる御言葉を思ふ時、私共は徒らに悲嘆に沈んで居られない氣持に奮起させられるので御座います。思へば二夏前にも吾等舊鎌倉聖書塾員は、これに似た悲しみを經驗致しました。それは先生の咽喉の御重患でした。

私共は悲壯な祈禱會を最後として、一時解散を餘儀なくされました。其御靜養中、私は時折先生を御見舞致しましたが、先生はいつもにこやかに引見され、絶體に談話を禁じられておいでになる中から、一こと二こと御話下さいました。それはいつも神の讃美と歡喜の御言葉でした。「この病弱、何時召されるか明日をも知れぬ身の、語る事許さるゝ時は語り、筆執る事許さるゝ限りは書き、聖國の御用に參加せしめらるゝ悅び且つ光榮は身に餘る感謝である。斯く聲を封ぜられて、彌々傳へ度き事胸に溢れ、執筆れば想後をついで湧き、雜誌の原稿もすでに半年分以上も出來、今はエレミヤ記の研究に非常な興味を覺える」といはれました。舊臘刊行された先生憂國の熱情を盛つた「宗教と國家」はこの時已に、先生の御胸の裡に出來上りつゝあつたのであります。この平靜と歡喜に輝く御顏、不治の疾、命數月を保せずと宣告せられた人間の誰が、斯くあり得ませうか。眞に凡てを大能の聖手に任せ奉る人のみのあり得る狀態であります。私は思ひました。此無言の傳道こそ、數千言に勝る大きな力であると。歸路につく私の心は非常に明るく、喜びに滿ちたものでした。かゝる再起を期し難き難症も奇蹟的に癒され、御宿望であつた公開講話會さへ許されて、鎌倉の地に幾多のよき種は蒔かれました。此度の聖召と共に此祝福に滿ちた會はとざされ、私の心の燈臺「聖書の眞理」誌も、限りなき愛惜の裡に影を隱されて、今度こそ完全に先生の御筆は絶たれ、御口は緘せられました。然し先生の御俤、命をかけての御教は、强く深く私の心に印せられ、勵ましの御聲が今尙ほ聞こえるやうに思はれます。神は與へ神は奪ひ給ひます。私は唯、量り知られぬ聖意を畏こみ、恩師の遺訓をひたむきに邁進する事の出來ますやう、只管神の御加護を希ふもので御座います。

眞の愛國者

石渡登喜三

「私は私の友人基督者に勸める。現在の暗黑時に當り、各自その義務を果されたし。私自身については神に感謝す私は義務を盡しました」と江原先生はいはれた。

「後の世と聞けば遠きに似たれども
　知らずや今日も共日なるらん」新渡戸博士

蓬伯玉は五十にして四十九の非を覺りたりと。然し私共直接先生の御指導に與かりました者は江原先生こそ義務を果されましたと言ひ得た方だと信じます。顧りみますと、七月二十六日の夜半でしたかに三十九度の高熱を押され

てペンを走らせましたのが八月號の「宇宙完成の希望」であります。いゝえ此の時ばかりではありません、毎月の原稿日には、戰場の戰士の様でした、ですから御食事の時なども御自身は何杯召上られたか御存じないのです奥様から御注意を受けられることは珍らしい事ではありませんでした。此の一事に依つても、如何に精一杯に福音の爲めに盡されましたか想像に難くはないと存じます。その疲勞が毎月原稿の出來上りました後には必らず顯はれまして一週間程は休養なさらねばなりませんでした。江原夫人は此の發熱を原稿熱と申して居られました。あまりに御無理をなさいますので私共心配致して申上ますと先生は申されますのに「若し寢て居つたら、とつくに死んでしまつたんだらう。現代の醫學に見離されて既に死んで居る筈なのに不思議なものだ一時間以上の講義が出來るではないか、大丈夫だ與へられた使命を果さない內は死なゝい其の事は確實だと被言つてゐました。致命症の病氣から不思議にも回復されて一段と神様と親しまれ神の聖意を悟られ悲壯な決心と覺悟を以て御奮闘なされました事は近親の者には勿論のことですが何程の人々を勵ましたか解りません。噫々不信國の此の世からは其の酬はあまりにも僅でした。或る日の夕食の時の事でした、或る方が「最近聖書之眞理の評判が良い」と申上ました。すると奥様が「お櫃が空ぽにならなければ善いものは書けません」と御冗談を言はれましたが、その言葉は冗談事ではなかつたのです。家計は左様な狀態でしたが先生は殆んど構はれなかつたのです、奥様の心勞見逃してはならないと存じます。

零落れて袖に涙のかゝるとき
人の心の奥ぞ知らるゝ。

昭和八年のお正月を迎へました。先生は、私共に申されますのに、「私共十數年間の夫婦生活で今年の正月程感謝な生活を味つた事はない」と被言ひました。何んと美やましい心持では有りませんか。顧り見ますと丁度其日てした。色々のお話の中に「今日英國の皇室程國民から尊敬され安定な皇室は無い」と申されました事を今日思ひ出して考へて見ますと、先生は日本の現狀にもどかしく、死を覺悟なされまして日蓮が鎌倉の辻に立ちまして國難に際し此の國を救ふのには只一卷の法華經にと叫ばれました樣に、バタ臭い基督教でなく、澤庵臭い基督教で日本を救ふとなされました、其の燃えるが如き愛國心から、街道にお立ちなされたのであります。昨年の暮に出版なされました、宗教と國家には眞の愛國たる心情が彷彿として顯れてます。此の出版が完成致しました頃には鎌倉講話會の計畫がありましたのです。噫々戰場に

血を灌がれました。天國へ凱旋致しました、日本國の悲しみであります。過日松岡全權が世界各國の代表者に向つて叫ばれました正義その程度の日本の正義で世界を救ひ得るでせうか。心ある者は寂寞を感じて居りませう。眞の愛國者江原先生は死を賭して日本的基督教を說かふとなされました動機は此邊にあらはれたと存じます。御老齡なる御母堂やお成人には程遠いお子供さま、又お若い奥樣等の前途を人と致しましての情をお察し申上げて斷腸の思が致します。然し江原夫人は「神樣だからこんなことをなされるのでせう」と私共に申されてます。聖書を讀み說教を聞いて居りますのみでは私共の兄弟姉妹ではありません。「誰にても天にいます、我が父の御意をおこなふ者は即ち我が兄弟わが姉妹わが母なり。」十字架の血に依りまして救はれました、お互は骨肉以上の親しみの兄弟姉妹ではありませんか。ルーテルの宗教改革も英國のピューリタンも內村先生の無教會主義も皆信仰の絕體的自由を得るためでありますことを認識致しました。それ故教會信者も無教會信者も一團となりまして此の暗黑の世のために、何が何んでも何が何程ありましても、神の正義が世を支配することを確信を以て闘はうではありませんか。恩師江原先生の一生涯の經驗は「イエスを信じて世に勝つことが人の至上善であります」と貴い體驗を遺されて凱旋致しました。闘ひませう。勝利は確實であります。御名の崇められ御國の來らんために。

感想

川西田鶴子

九月になつて、又方々に、キリストの御名による集會が開始せられた。しかし我が江原先生による鎌倉キリスト教講演會は、もう再び開かれる事はない。やうやう始められたばかりであつたのに先生はあんなに御元氣に感謝と希望に滿ち〳〵て聖書の眞理を說き出された所だつたのに。私達は先生からまだマタイ傳の一ページの系圖に就いて教へて頂いて居たのだのに。私も私の誘つた友達もこの集こそ自分達の生活の支へ、信仰の成長になくてならぬものだと知つてその繼續をひたすら賴りにしてゐたのだのに。……

實は去る三月、先生がこの講演會をお始めにならうと御決心なさつた時、私達は皆先生の御顏に決死の御意企を讀み、死の戰場への門出を送る思がしたのである。しかし、かく速かに先生を奪はれようとは思はなかつた。六月十八日の日曜日少しおくれてキング商會別館へ行き着いて見ると先生のお顏が見えない。私は思はず「神樣

もうですか?」と云はざるを得なかつた。神様は先生を長い間いぢめにいぢめて、遂に「鐵の柱銅の壁」とせられた、憂鬱の眞中より堀出され、燃ゆる恐怖に灼熱せられ瀧つ涙の湯に投ぜられ滅びの激感に打ち敲かれ鐵は形成りて用をなす。(エレミヤ記)所が先生は折角鐵として形なりしにも拘ず神は先生に思ふ存分の用を爲さしめ給はなかつた。幾萬回か火と水の中をくぐつて、やつと鍛へられた正宗の銘刀をさげて、手負ひの御身を顧ず勇ましくも戰場へ立たれた先生は僅に一太刀、二太刀銘刀を振かざしただけで、かくもろく倒れて了はれた。先生として之が殘念でなかつたであらうか、恐らく先生は最後までもし御心ならばもう一度立つて福音の證をさせて下さいと切に祈られたであらう。私達も一心にそれを祈り求めた。私達の爲に湘南の凡の人々の爲に先生の傳道は最も必要である事を神様は御承知ではありませんかといつて……。しかし神様は江原先生をどうしても私達からもぎとつて了はれた。しかも十何年もの病苦に今や骨と皮ばかりに痩せ衰へられた先生を最後の數日まで堪へがたい肉體の苦痛の中にお置きになつた。「我神!!我神!!何ぞ我を捨て給ふや?」の叫びは又先生の紫色になつた口唇をついた叫であつたに違ひない。しかし先生はイエスと同じく遂に勝たれた、さうして最後の力をもつて「イエス・キリストを信ずる事是人生の至上善」と書いて感謝しつゝ希望に輝きつゝ凱旋せられた。先生の「一生を通じての體驗」である、この言葉こそ私達鎌倉キリスト教講演會に聖書を學ばんとして集つた者達へ先生が最後の血と肉をもつて教へられた絶大の眞理である。この數年間に先生の御生活を親しく見て來た私達には先生の此絶筆がどんなに深い根底のある確信であつたかをよく知つてゐる。先生が病床に呻吟してをられる時、キリストのみがその慰めであつた。先生がやゝ小康を得てをられる時福音の證のみが其仕事であつた。先生の御家庭が三度の食事を二度にする程の欠乏の日に、キリストのみが支へであつた、先生程の深い孝心をもつて御老母にあの心痛と困苦を與へるのを見て居られるつらさ!!キリストのみは其涙を知つてをられた、先生の純情を以つてしてか弱い御夫人に過勞を強ひ幼い子供さん達をたのします事も出來なかつたこの數年間の身を切るやうな思ひ!!キリストによつてのみそれに堪へてをられた。かくの如く凡ての艱難をキリストと共にしてをられた先生であつた故に、私はかつて一度も先生から呟きの聲をきいた事がない。先生のあの青白い肉のない顏はほんとうに不思議な程常に感謝と喜びに輝いてゐた、患難、苦難、迫害、飢、裸危險劍……凡てこれらの事の中にありても

我等を愛し給ふ者により勝ち得て餘ある事を先生の御生活を通して私も遂に「目をもて見たてまつゝた」。（ヨブ記）福音が凡て信ずるものに救を得させる神の力である事をもう疑ひたくも疑ふ事が出來なくなつた。先生を召し給ふた神は先生を義とし、之に榮光をたまはつた、先生は今や義の冠を戴いて主イエスキリストと共に彼處に我々の行くのを待つて居られるであらう。まことに既に冷たくなつた先生の死顏まで、名畫に見るキリストの御顏そのまゝではなかつたか??

神よ江原萬里を我等の師とし友として與へ給ひし御惠を何といつて感謝いたしませう!!

叔父と私

犬丸秀雄

「江原は凱旋した。江原は凱旋將軍の如く意氣揚々として天に昇つた。」

今井館の告別式に於て三谷隆正氏がその端正なる痩軀に全身の力を込めて吐かれた此の一言程叔父の最後をいみじくも云ひ表はしたものはない。私は此の一語に、叔父の死が基督者として如何に輝しきものであつたかハツキリと思ひ至るを得て感謝に瞼のあつくなるを覺える。

叔父の半生は病苦と生活苦との戰であつた。叔父自ら語れる如く、善きも惡しきも凡ての事はこの病弱から出でたのであつた。叔父が、叔父の所謂「內なる聲」に强制されて住友を辭し東大の講師となつた時、絕えて姿を見せる事のなかつた學生時代の忌まはしき友が彼を訪れた。「胸疾」即ち是であつた。此の病弱の爲に職責を果し得ぬ自責の念といよいよ劇しき「內なる聲」の要求とは、遂に叔父をして大學を辭し只管此の聲の正體の探究に身を捧げむと決心せしむるに至つた。雜誌「思想と生活」とは此の時創刊された。創刊後半歲ならずして彼は重い肋膜炎に臥した。而も病床から起き上つた時、そこには驚くべき「靈的經驗の躍進」があつた。雜誌の發行は彼の健康にとつて大なる負擔であつた。この故に彼は健康を損じ、この不健康ゆえに彼はいよいよ神に近づく事が出來た。而して又この信仰こそは彼をして長き病苦に堪えしめた唯一の力であつた。偉大なる神の攝理よ、彼の明瞭に感得したキリストの十字架の福音は之を說かずに居られぬ處であつて、「思想と生活」は擴大して、「聖書之眞理」となつた。而もその後一年と出でずして神は再び彼に喉頭結核なる重病を負はしめられた。彼のエレミヤ記は此の時死を覺悟した彼が此の世への置土產の積りで著はしたのであり、そこには彼の現下の日本に對す

る憂國の至情が滿ち溢れてゐる。誠に彼自身が聖召に逢うたエレミヤであつた。一度潤れ斂がれた彼の聲は不思議に癒えた。彼は神の御心を感じ決然立つて鎌倉の辻に主の福音を說くに至つた。否說かずに居られなかつた。一年前に「私は鎌倉の地に住み乍らこの地の人々に福音を傳へ得ないのを殘念に思ひ先日來何處か目貫の場所で講演會を開かうと思ひ度く祈つた。そして今は聖意でないのを知つて斷念した」と云つた彼に遂にその時は來た。而もこの時の彼の健康は如何に？　曰く「右肺は全く駄目、左肺も大分やられてゐる。普通の人ならば差し當り絕對安靜を要する」と。今は從前の自宅に於ける日曜集會さへ行ひ得ぬ身を以て彼は病床から銅ひ出して壇上に立つたのである。彼は自ら言つてゐる。「私は文字通り死を覺悟して立つた。」又「屹度私は再び重病に襲はれるであらうと豫期し姉にもその事を書き送つた」と。ああ、此の如き他に數多くあらうか。そは六百年の昔、國難を救ふは法華經一卷あるのみと呼號した日蓮の壯烈にも勝る。彼は常ならばベッドに仰臥してゐる筈の身を以て無意識に椅子に坐り無意識に立ち上り、我と我言に狂へるが如く精根を盡して絕叫した。「假令身は窮迫死に至つても日本的基督敎を叫び一卷の聖書を我が國民に傳へずば已まな」かつたのであつた。

豫期された事は事實となつて顯れた。剩つさへ彼の長い長い療養生活の中にも未だ一度も經驗した事の無い劇烈な發作さへ起つて彼を苦しめた。醫師は回復不可能と語り、彼自らも死の前味を味ひ乍ら、心は驚く程平安であつた。痩せ衰へた身體からあらん限りの力を絞り出して、息詰まる呼吸困難と戰ふ事、夫は彼にとつて「日本の皆の爲に苦しむ」事であつた。しばし發作の靜まつた時、枕許のメモを取りあげて彼は書いた、「神よ、感謝す私は義務を盡しました。」臨終に近づいては肉身緣者、その他の人を呼び寄せて恩を謝し遺言を述べ、聖書を讀ませ讃美歌をうたひ、一片のパンを自ら千切つて食し一杯の葡萄酒を口にして「こんな美味い葡萄酒を飲んだ事はない」と稱へ「もはや何も思ひ殘す事はない」と述べ遂に兩手を左右に擧げて動かし恰も昇天を告ぐるが如く、全幅の信賴と希望とを主に置いて昇天した。而して之より先の五日に之が最後かと思はれた激烈なる發作の後で西洋封筒に仰臥のまゝ書き附けた文字は平素と變らぬ筆力を持つて居りその文句は「キリストを信ずこと、是人の至上善」であつた。近親への遺言にも亦此の言葉を繰返した。

再び思ひみるに、神は叔父を選び遂に苦難の道に追ひ給うたが、此に依つて却つて叔父は神を深く知る者とな

り、筆に口に神の御心とし給ふ處を行ひ果した時、「神よ、義務を果しました」なる十全の滿足と「キリストを信ずること、是人の至上善」なる尊き體驗を土產として神の御許に喜び向つたのであつた。正に凱旋である。そして天下、之より大なる幸があらうか。

誠に幸にして此に勝るものがあらうか、然り彼の死は私に取つて美しくさへある。とはいへ、畏敬し我が心秘かに倚りゐし肉身を失へる淋しさ、此に勝る淋しさも亦多くはない。

「僕には知らぬ市ですが親しい友人の故鄉であつたのでなにとなく親しく感じます」と叔父が言ひ寄越した金澤にも秋は來た。この夜、月影の無い河原から聞こえて來る犀川の水音は靜かにて、すだく蟲の音はあはれである。壁間に揭げた叔父の肖像は穩やかな笑をたゝえて私に呼びかける如くである。今私が此の地で叔父を思ふよすがとなるものは此の肖像の他、此の春叔父より貰つた一通の書面である。

御手紙有難う。封入の○○感謝の外ありません。啻に、私を思つてくれて居ることが有り難いのみでなくその心が有り難いのです。自分の收入は全く自分の享樂のためでなく、之を以て他を喜ばせやうとされる心最初の收入の時これを明瞭に實行された事が、今後どの位、生涯を聖め、その生活を有意義にするかわかりません。これが本當に善き教育者とさせます。深い學問は善き人格から出ます。又本當の教育も亦、人物にして始めて可能であります。どうぞ金澤の高校の學生に對して深い强い感化を與へ得る善き教育家となつて下さい。

○○○は雜誌の維持費に入れます。今の私は雜誌が生命です。此の雜誌で精神的に生きて居るのみならず、此の雜誌を出して居るので健康さへ維持されて居ます。

講演會は人數は少ないが善い會です。三谷、矢內原等の友人たちが援けてくれて皆心から一生懸命です。もつべきものは善き友人だと云ふ事を感じます。此等の友人が心から援けてくれるのは一つは高等學校からの同窓であるのと今一つは信仰を同じうする事です。高等學校以來の親友でも信仰がないものは自然疎遠になつて來ました。此の年頃益々感ずる事は信仰の必要です。

此の次の日曜日三谷君に會ひます。

五月三日　萬里

秀雄君

私が叔父から貰つた手紙の中で一番長いものと思はれるこの最後の書信を讀み返す時、私は涙の溢るゝを禁じ得ないと共に、之は叔父が私への一生の教訓として書いたのであらうと確信する。叔父の「啻に私を思つてくれてゐる事が有り難いのみでなくその心が有難いのです」といふ言葉こそは寧ろ私が叔父に對して述ぶべき言葉なのだ。私の微意が之程迄に叔父を喜ばせたかと思ふと、私の目頭はあつくなるのだが、私は夫が有難いのみならず、かゝる場合に於てすら、叔父は忘れずに私の前途を考へて訓へてくれてゐる事が心に泌みて有難いのである。私如き者が叔父の望んでゐる如き有爲の士となる事は甚だ心許ない事であるけれど、叔父のこの言葉は私をして私の職業を無限に張合のあるものとしてくれた事を感じる漠然と考へてゐた自分の地位が如何なるものであるかをハツキリとさせてくれたのは叔父のこの書面であり、かく考ふる事によつて私は眞に生き甲斐を見出す、叔父が力說してゐる信仰も亦遙かなるものではない。

叔父の住友時代は姑く之を置き、叔父が東大に移り東京に近く住む樣になつてからその死に至る迄數年の間も恐らくは數へれば數へ得る位しか私は叔父に逢つてゐないであらう。而も私にとつてこの叔父位大きな感化を與へてくれた叔父はない。大阪から東大に來た頃の叔父は私には近づき難い叔父であつた。長く大阪にゐて殆ど逢つた事が無かつた事と、或る自分勝手な事を叔父に依賴して叱責の手紙を貰つた事とは、氣心の知れぬ叔父と思はせ、近づき難い叔父にさせた。此の感じは可成り長く續いた樣に思ふ。叔父が東大の經濟學部に出講してゐた頃、私は東大法學部學生であつたにも拘らず、私は叔父に近づく事なくすぎた。却つて經濟學部の掲示場に「學生の江原助教見舞」の掲示を見て輕い皮肉と淋しさとを感じたりした。（私は後年一高時代の友人島德郎君がこの時代に私以上に叔父に近づき私淑してゐた事を知つて驚いた位であつた。）だが私は全然叔父に無關心でゐた譯では勿論ない。その證據には私は法學部の或る教授の休講を利用して秘かに叔父の講義を聽いたりした。夫は震災と火に逢つて屋根は落ち、壁は剝げたまゝの荒れはてた講堂であつた。叔父はマーシアルの分厚い經濟學理の原書を粗末な机の上に開いて、熱心に講義をしてゐた法學部の休講を利用して當然聽講した私は教科書を用意してゐなかつた事ではあり又當時はさして經濟學に興味を持つてゐたわけではなかつたせいか、私はその講義がどんなであつたかを今覺えてゐない。だが恐らくは聽き棄のあつたものであつたに違ない事は、私が後年思ひがけなくも東京の或る私大で英文經濟學を講ずる樣にな

つた時に叔父がマーシアルの第一章を例として外國經濟學の讀み方を敎へてくれた時の講義振りから、想像し得る處である。私は今でも後悔してゐる。法學部の學生時代に叔父の講義を聞いて置かなかつた事を。私は「聖書的現代經濟觀」に收められた論文「富の增進」を讀いてそこにはマーシアルの研究が隨所に光つてゐるのを見て切にこの感を深くする。

私が漸く叔父に近づいたのは、叔父がその後一歩も踏み出す事の無かつた鎌倉の地に退いて、雜誌の發行にその心魂を投げ入れる樣になつてからであつた。此の頃から叔父の健康は或は良く或は惡く波打ち乍ら次第に衰へて行つたのであつて、私は叔父の健康に障るを氣遣ひつゝ時折叔父を訪れてその元氣な聲を聞く事が樂しみとなつた。私が叔父を近づき難く思つてゐたのは私の認識不足に基いてゐたのであり、却つて叔父は私を理解してくれてゐたのを知つたからであつた。叔父は如何な不健康の時でも、一度逢へば、病を忘れしものゝ如く語りついだ。叔父の談話は多方面に涉つた。信仰問題に、時事問題にそして又或る時は私一個人の問題に。如何なる問題に對しても叔父の口にする意見は合理的であり、一つの軌道を離れる事がなかつた。一つの信仰より生れでる判斷力の力强さに私は敬服し心を惹かれて行つた。叔父の云ふ處は、屢々餘りに理想に過ぎて現實には不可能と思はるゝ事もあつたけれど、結局現實にふさわしい解決策は間に合はせ的であつて、俗耳に遠き解決策こそは信仰に立脚した眞の解決策である事を私は信じる事が出來た

又叔父は誠實を愛し、虛僞を憎んだ。或る時は餘りに融通が利かず、又或る時は所謂馬鹿正直でさへありその爲に不測の損を蒙りさへした。叔父が藤井武氏に就いて書いた「彼程虛僞を嫌ひカントの所謂純なるものを求めし人はなかつた。夫は殆んど道德的潔癖に近く度々頑固とせられた程……」なる言葉は叔父自身に當て嵌る。叔父の道德的潔癖は恩師の信賴深き依賴さへ謝絕した。東大を辭して收入の途絕えた時親友の申越した好意をさへ受くる事が出來なかつた。

叔父の言は信賴するに足りた。僞が無かつた。夫故彼が私の經濟學の小譯を最後の病床に於て「良く出來てゐる」とただ一言漏らした事は千万言の讃辭よりも身に泌みた。彼は「思想と生活」に於て彼の祖父が人間は常に正直でなければならぬ旨を訓してくれた事に依つて自己の墮落の危險より免れた事を述懷し、又臨終の床に三人の幼子の頭を撫でつゝ與へた遺言は「良き人となれ、嘘をいふな、父は一生嘘を云つた事がない」の一言であつた。

叔父は良き友を持てる事を常に誇りとしてゐた。――この機會に叔父に御高誼を賜つた方々に衷心より深謝し奉る――叔父も常に感謝してゐた。變らざる友の友情に泣いた。又地方の讀者からの心からなる書信に屢々涙を流した。廣告をせず購讀を勸誘せず經濟的に何等引き合はぬ雜誌を、確たる收入の途なき身を以て「自己の健康家族、其他一切を無視し」續刊し得た有力な動因の一は此處にあつた、廢刊に頻する時必ず途は開かれた、彼は之を「神の御手による」ものと信じた。內村鑑三氏が「聖書之研究」に就いて述べられた「幾度か終刊ならんとし幾度か發刊せり……此の誌は之れ吾人の業にあらず或者が吾人の手を執て作り給ふなり」であつた。

かくて彼は體驗に依つてキリストの十字架の福音と神の存在とを信じてゐた。理窟ではない。「神は正しくいます。この自分の身體の中にいられる。私は御聲さへ聞く」確信に滿ちた聲であつた。歡びに滿ちた眼ざしであつた。かく云ひし時の彼を私は終世忘れ得ぬであらう。而も嗚呼、何といふ頑な私の心か。常に常に信仰を求めつゝ至り得ぬ私であつた。「君にそして君の家に必要なのは信仰である。信仰がある時正しい考が生れ之に背く者に反對する强い力が湧き出でる」。事に觸れ折につけ叔父は語り、私は又叔父の美しき生活がすべて信仰より生れ入づる事を確信し信仰に憧れた。

今春四月私が獨り當地に來て遠く叔父から離れた時、叔父は忘れずにこちらにも雜誌を送つてくれた。叔父の鎌倉講演の決行は私をして驚愕せしめたがその講演の內容は深く私の心を捕へた。暑中休暇が來て叔父に逢ふのを樂しみに歸京した時、嗚呼叔父は既に一言を交ふる事も遠慮すべき重態であつた。叔父の髯は延び延びてゐたが、その白い顏には微かに血色さへ浮かんで心の平安を示してゐた。その有樣は私をしてキリストの肖像を思ひ起こさしめた程、崇高であつた、壯嚴であつた。間もなく私は病臥し八月七日の夜中フト病床に目覺めた。午前一時卅七分であつた。叔父は此の時召された。母から具さに聞いた叔父の臨終の樣子はいたく私の心を擊つた。告別式には病床から匍ひ出して弟に附添つて貰ひつゝ參列した。殊に三谷氏の演說――わけて「江原は凱旋した」の一語は私の心に食ひ入つた。私は叔父の雜誌の合本を貪る如く讀み返した。私の心は磁石に對する如く惹きつけられた。そして私は叔父の言葉が今迄よりも遙つた力を以て私に迫つて來るのを感じた。叔父の所謂日本的、武士道的基督敎の提唱に頭は下り、叔父が極力唱へたキリストの十字架による福音は最早私にとつて單なる聖書的知識以上のものである。

一言を發する事も愼まねばならぬ重態にあり乍ら「三谷氏に話してあるから逢ひ給へ」と云つてくれた叔父の配慮、死の二三日前に私の病氣を案じて秀雄に見舞品を送る樣にと家人に傳へた叔父の心配り、自分を良き手本として身體を大切にせよ」といふ叔父の遺言、更に又叔父の死後机の引出から發見された、叔父が私の一身に就いて書き殘した同情あり理解に富んだ覺書――之等を思ふと私は目頭のあつくなつてくるのをどうする事も出來ない。然しながら思ふ、之等の何倍にも增して大なる私の感謝は、叔父が自己の死に依つて私に與へてくれたこの大きな感化である。信仰心である。

遠い肉身の一人としては此のはかない一文をも私は隨分書きあぐんだ。讀み返す事によつて、言ひ過ぎた事、云ひ足りない事の發見は私をして又改稿の念を頻りならしめる。だが之は自己の病臥の爲に直接臨終に侍し得なかつた甥が、この機會に叔父へ送る一獨語であり又自らの爲の心覺えであるとして許して頂けるではなからうか。叔父は嘗てアララギ年刊歌集を開いて「僕はこの人の歌が一番いゝと思ふ」と云つた。夫は中村憲吉氏の傑作「鳴門觀潮」の一聯であつた。叔父は私の言を聞いて、自分の鑑賞力に滿足した如く微笑んだ。今殆ど私の口を突いて出でた荒削りのまゝの次の一聯を見て、叔父は何と云ふであらうか。私の想像する一言はかうである。「君は相不變歌は上達しない樣だね」だが私の精神生活は一歩進んだ。私は信じる、叔父は常に私の側にある！

髯のびて衰へ臥せる君見れば聖者の如くきびしかりけり

朝光のさし來る時しきぞの夜苦しみけるは暫し忘れむ

咯痰に一日苦しむ君なれば暑き日中は暫しだに寢よ

多摩墓地を買ひおけといふ衰へし君が言葉ぞ遂に悲しき

かへりみて何にかなしむ神により心は足りて逝ける思へば

まさしくも神はいますと君が眼のかがやきにつゝさとしたまひき

いたつきを忘れて君がいひたまふ事のことごとは身に泌みにけり

キリストの福音を說きて死にせむは思ひ定めて既に居りけむ

火に逢ひてなかば破れし講堂に君が講義は隱れて聽きぬ

御靈前に

幾代

目さまし主の強者の最後こそ弓矢つるぎの折れ盡すまで

鎌倉講演の尊かりしを思ひて

いつの日か思ひ合はさめ君が叫び此の鎌倉に成らむその時、
人の目に打死の如　見ゆれども御靈は天に凱旋して
目にあまる仇に向はん物の具はよろをわず棄てず聖書一卷

御母堂様に

おゝし立神に捧げしいとし子の先途男々敷見守りませし
人皆は神のみもとに凱旋と告ぐれど君はさびしくおわさめ

祝様に

行手遠し山又谷も多からめされど安かれ主さゝゑませば
殘されし神のみわざは君か肩に心して行けつまつかぬよう

御子様方に（父君日頃お二階御住居と承りければ）

子等を思ふ父うせしにあらず二階よりいと高きところに移りませしのみ
み姿は目にこそ見えねかなたより子等の内外を守りますらめ

年老て血の氣とぼしき私には父祖の血のいづこに流るゝや心元なけれど

父祖の血の殘りあるとも覺えねど事あらむ時流れそめなん

江原先生の病床に侍す

辻田兎三郎

一九三三年八月七日地は著しく其美はしさを減じ、日本は眞の愛國者を失ふて悲しみ、私の心には終生充すべからざる空虛が生じた。江原先生は召されたのである。

私は先生を先生と呼んだ者の中の最後の者であつた。誠に私が此地上で先生を知つたのは、先生の御生涯の最後の八十日間に過ぎない。（あゝ如何に遲かりし事よ）。されど又私は最も幸運の者であつた。いかなる神樣の御攝理によつてか、親しく其病床に侍する事を得、最後まで心の限り先生に仕へた。そして私はこゝに一人の敬虔なる靈魂がキリストに在りて如何に生き、又死ぬるかを見た。殊に最後に死を見事に征服していと安らかに天の故郷へ歸り往く、その輝かしき光景を見た。此活ける事實により私は最早基督による救の確實と、來世の實在とを疑ふことが出來なくなつた。而して今私は知つた、私の十年の信仰生活と一眼の喪失とは此大なる恩惠に與らんが爲に必要であつたことを。

私がこゝに此手記を載せるのは其事實を傳へん爲と、他に尙一つの理由がある。先生は或日私に斯う仰せられた。『神樣が僕の最後を慰むる爲に君を遣つて下さつた』と。私は無論其大なる名譽に値しなかつた。併し兎に角私が先生に對して何事かを爲し、先生が其事を喜んで下さつたことは確かの樣である。されば私は病床記に入るに先立ち、其事を最初から順序を追ふて記さうと思ふ。

私は先生の御名を雜誌『思想と生活』の創刊される直前恩師故藤井武先生から聽いた。藤井先生が先生の比ひなき誠實な人格に就き話された御言葉は、併し私の注意を惹かなかつた。其は私が藤井先生よりも誠實な人格を想像し得なかつたからである。同樣に『思想と生活』は『舊約と新約』を唯一無二のものとした私の机上に其所を得なかつた。昭和五年三月私は鎌倉へ移轉して偶然にも先生の御宅近くに住み、それとは知らず朝に夕に其家を眺めたばかりでなく又其前を通つて源氏山、葛原岡神社附近を逍遙した事も一再ではなかつた。併し其處に先生の散歩姿を一度も私は見かけず又其門の標札は私の眼に留らなかつた。まして其家に日曜集會のあつた事を私は知る由もなかつた。私は今其を思出して哀哭、切齒する。私が始めて先生を知つたのは五月二十一日鎌倉講演會に於てであつたが私を此處へ引つけたのは先生でなく

して他の二人の講師の名であつた。斯く私は先生を知るべくして知らず、しかも尋ねずして先生に會つた。そして此日先生が私に與へた美しき印象と強き感銘とは遂に私をして最後まで先生の病床に侍せしむる因となつた。實に奇しき攝理と言はざるを得ない。

永き病弱の御身を已むに已まれずして立たれた先生の御叫びには眞に悲壯な響があつた。基督に對する聖き愛と熱情と、聽衆に對する深き親しみと同情とは其一言一言に溢れて切々と私の心に迫つた。胸を打ちつゝ家に歸つた私は、直ちに長文の手紙を先生に寄せて言ひ難き感謝と感激を述べ、又今まで理由なく心に先生を疎じたことをお詫し、今後は先生の爲に何かの御役に立ちたい事を申出でた。此手紙は非常に先生を喜ばせ後に私が夫人から伺つた所によれば、是を受取つただけで公開講演を始めた甲斐があつたと仰されたそうである。且その一節は雜誌に載せられし所である。

其後三回先生の講筵に列し私の靈は嘗て經驗しない高揚を覺えた。若し馬太傳の講義が斯樣にして永く續けられたならば、どんなに立派なものが出來たであらう。僅かに其緒に就いたのみで中斷したのは眞に惜しみても餘りがある。

私は又先生に書を寄せて講演會の爲に樂器を獻納せんことを願出でた。私は嘗て業務上一眼を喪ひ其代償として〇〇圓を與へられてゐたので、之を以て樂器を購ひ先生必死の戰場に獻ずるは相應しと考へた。そして更に若し之を奏する人がなければ私自身練習して其光榮に與らんことを願つた。此時先生はすでに病床の人であつた。それを聞いて翌日私は先生をお見舞した。私のお願は又も先生のお心に叶つて先生は『涙を流して喜んだ』と仰せ下さつた。そして『オルガンは家に有るから買ふ必要は無い、併し彈手が無いから練習して呉れるなら有難い、オルガンは家へ運ぶとも此處へ來て練習するとも自由にせよ、眼の代價は餘りに貴重だから大切に保存して置け他日有意義に用ひられるであらう』と仰せられた。又私が嘗て藤井武先生に就き五年の間聖書を學んだ事を非常に喜ばれ、興味を以て種々の事を問はれた。私が先生の雜誌の讀者でもなく、又一度もお目にかゝつた事がなかつたのに、斯樣に信用して頂けたのは此事が大きな理由であつたと思ふ。私に就ては『福音の爲に大いに働いて下さい』とか『勤務所でどんなにか大きな感化を及ぼして居るであらう』と仰せられた。私は全く慚愧に堪えない、先生は餘りに過大に私を信用して下さつたのである。此日先生が繰返し繰返し言はれた一の御言葉を私は永久に忘れまい。曰く、『神樣を信ずる事程安心なこと

は無い。何と云つても神様は有る、永く信仰生活を續けて居る中に君にも其事が判つて來るであらう』。と。

其翌日から私は毎日役所の歸りに立寄つてオルガンを練習し、又何事か御用を御手傳ひする事が出來た。かくて四五日經つうちに此家庭に或る寂しさを感じた私は極めて單純な氣持で樂器獻納の資と考へたものを聖書の眞理社の振替へ入れて了つた。先生の御病床に用ひて頂きたい心からであつた。(此事は實に私の過失であつた。併し私が敢て之を記すのは其によつて先生の比ひなき誠實と深き愛との顯れん爲である)。　先生は無論御承知下さる筈はなかつた。先生は言はれた。『僕は君が想像して居るやうな立派な者ではない。君が僕に失望して離れて往くのは仕方がないが其爲に君を躓かしてはならない。其を最も懼れる』と。私は『其は先生の杞憂であります』と抗辯した。押問答數回の後遂に先生は仰せられた。『君の心は充分に判つてゐる。併し僕の心も少しは考へて呉れなくては困る。君が切角貴重な一眼を犧牲として與へられたものであるから之を大切に保存して置けば將來何か困る事が起つた時、君を救ふものとなるであらう、僕は之を何うするのが君の最善かと其を考へてゐるのである。少しはこつちの氣持も考へて呉れ』。何といふ優しい御心であつたであらう、今思出しても涙が零れる。私は謹みて不遜を謝すべきであつたのに猶も答へて言つた『將來の必要に備えて置くよりも、今先生に用ひて頂く方が私には喜ですから已むを得ません。さうすれば私の一眼の損失は償はれるやうに思ひます』と。遂に私の强情を持餘した先生は習日親書を下さつて私のお願を聖き事業への寄附として受けると仰せられた。私は御願ひした通りに許して頂けなかつた事を悲しく思つたが、先生が私の心情はよく判つたと仰せ下さつたので感謝した。併し私には先生の深き御心が判らなかつた。殊に『之を受ける事は大なる責任を感ずる』と仰せられたことに對し、私は餘りにも愚であつた。

其日私は徹夜して三度目の手紙を書き、私の心の最も深き所に永く秘めてゐた願を先生に訴へた。私は福音を人に傳へる能を有たない。併し私が之を爲し得る人を助け、其下に於て働くならば私も亦福音の爲に働く者とせられるであらう。初代基督者の間には其が實行せられた。私は此理想を先生によつて實現しやうと思つた。それ故私は先生にお願ひして言つた。『私を先生の許に置いて下さい。私は晝間は現在の職業に從ひ其に依て得る所を皆先生の御事業の爲に捧げます。其他の時間は凡て先生の僕であります。先生の許に於てならば私はどんなに働き甲斐を覺えるでせう。こゝに一年生くる事を得れば最早

死んでも宜いとさへ思ひます。どうぞ私の夢みし所を現實として下さい』と。私の御願は又も先生の御心の深き所に達した。先生は仰せられた『君の心持はよく分つた。併し申込通りには承知しない。僕は今君を養つて上げる事は出來ないから食費を貰つて置いて上げやう』と、そして小額の食費を課せられた。斯く先生は極めて自然な方法で私のお願を許して下さつたのであるが、私に取ては永き永き夢の實現であつた。私は天にも登る心地して急ぎ家を片付け其日から先生の家に起居する事となつた。是より先生の召される日まで四十日餘私は親しく其病床に仕へた。あゝ其一日々々の如何に貴重なりし事よ、如何に樂しかりし事よ、而して又如何に辛かりし事よ。

御病氣の始め母堂が未だ御看護に見えず、看護婦も來なかつた時は、私が看護婦であつた。毎朝先生の脈と體溫を測り、昨夜の御病狀を伺つて日誌に記し、洗面の御世話から御身體を拭き清める事まで皆私の手にて爲し、又病室の掃除をするのが出勤前の私の仕事であつた。勤務が終り私が心急いて病室に駈つければ先生は詳細に御病狀を話された後必ず私に汗を流し著物を更へて來ることを促された。先生の御氣分の良い時には御身體を揉んだり團扇で風を送りなどしながら種々のお話を伺つた。所謂無教會主義の先生達の講演や雜誌に就き私が感想や不遠慮な批評をすると、先生は興味深さうに其を聞き同意されたり又は誤を正して下さつた。七月二日最終の講演會に夫人は是非共出席される要があつたので私は休んで先生の御病床を守つた。十時十五分になつた時先生は、『集會が始まるから默禱をしやう』と仰せられた。私が默禱を終つても先生はまだ續けて居られた。御苦痛を堪へてじつと祈られてゐる敬虔な御姿は强く私の心を打つた。御病氣が段々進んで時々呼吸困難が起るやうになつた。併し先生も私達も尙確く醫しの聖手の加はるべきを信じて只管祈つた。先生は私のオルガンが上達しないのを責めて練習上の注意を與へ、『そんな事では九月からの集會に間合ない』と言はれたり、又私の持つてゐた時計が鐵道省用の精確な物であつたので『病氣が治つて集會に出る樣になつたら其時計が欲しい』などと仰せられた。先生があの公開講演を續けて行く事をどんなに深く願つて居られたかを思ふと何とも言へず悲しくなる。御病氣が進んで衰弱が目立つ樣になつた。併し先生は全く御平安であつた。私が心配さうな顏をしてゐると笑ひ乍ら、『病氣になつたら焦つては不可い、病氣は神樣が與へて下さるのだからじつと辛棒することだ、一年位は寢るつもりで』と言はれた。斯樣にして十日餘り經つうちに私がひそかに憂へてゐた事は早くも實現した

私が先生の御期待に反する鈍物であつたのである。先生はどんなにか失望されたであらう。又私が物事に不器用であつた事は病床の先生をどんなに苛立たせたことであらう。私自身其を感じ乍らどうにもならなかつた。そして只自分の愚を悲しんだ。併し先生はよく其を許し同情を以て見て下さつた。其は先生が私の心に一片の誠實を認めて下さつたからであつた。或時病室へ電鈴を取付るのに私が電氣を取扱ふ業務に從事して居り乍ら不用意に電池を接いでベルが鳴らなかつた。先生は非常に御氣嫌を損じ私が學理に疎いのと仕事に不注意な事を痛く叱責された後、電氣學の講義をして下さつた。私は驚いて其を聽いた。斯の如き告白をする事は私の堪えられぬ恥辱である。併し已を得ない、私が職務上知らねばならぬ所より先生が常識として知らるゝ所は遙に深かつたのである。私は遂に決心して一切の自負心を棄て、自分の不注意と不熱心とをお詫して今後を誓ひ、愚な私の爲に先生の御指導を仰ぎ度いと願つた。先生は嚴肅な御面持で、『君が其つもりになれば僕も心配して上げやう、其代り僕の命令に絶體に服從しなければ不可い、其でなければ責任は持てない』と仰せられた。私は喜んで御命令に從ひますと誓つた。其時私の眼に何故とも知れぬ涙が湧いた。此契約により私は先生に對し眞に和ぐ事が出來た。最早自分の愚を恐れることなく有の儘にて先生に近づき教を請ふことが出來た。そして先生が一層慕はしくなると同時に又先生に對して畏敬の念を增した。其後先生は私に聖書の事や信仰の事は餘り仰せられず、多く實生活上の事に就き私を教へ訓して下さつた。又私に對し一層 at home な御心持になつて下さつた。

先生は眞によく私の心を知つて下さつた。私が申上げた言葉は眞に其儘先生の御心に達した。或時私が、『先生の御見舞に見える方が「江原先生は今度の御病氣で又新らしい眞理を示されるでせう」などと言はれるのを聞くと、其が眞理であつても同感が出來ません。私には其餘裕が有ません、私は早く先生に治つて頂きたいだけです』と申上げた時先生は、『君は現金主義だね』と笑はれ、やがて嚴肅な面持で、『君は其人達より一層切實に僕を思つて呉れるからさう考へるけれども、其人達もさうして思つて呉れるのだから有難い』と言はれた。又私が『どうぞ私を何時までも先生の御許に置いて下さい』とお願ひした時先生は、『大丈夫だ、君が信仰を失はなければ、信仰を失つたら追出すぞ』と言はれた。（私は深き喜を以て此御言葉を心に留める）私が答へて、『私は先生が信仰を失はれても出ては往きません。先生を再び基督に歸らする爲に死にます』と言ふと先生は、『お

れが信仰を失つたら君がどんな事をしても駄目だ』と言はれた。二度目の咯血の後に、『私が輸血をさせて頂きたいと思つて居ります』と申上げた時ですら先生は少しも異とせられず、輸血の無効を說いて、『其事はもう考へるな』と仰せられた。

病勢は進んで胸にも腹にも氷が載せられ、烈しき呼吸は階下にまで聞える樣になつた。而も先生は愈々平安に其御顏は輝いて見えた。劇しき苦痛が注射に依て鎭められると周圍の人々に看護の勞を謝し、『自分は只安心して寢て居れば宜いが皆は心配しながら働かねばならぬからさぞ辛いだらう』と言はれたり、來診の醫師には努めて元氣を粧ひ、精神に少しの不安もない事を述べて、『私は自分の身體を試驗臺として、病氣を客觀的に觀て居ます』などと仰せられた。私が心崩をれて嘆聲と共にペツトに顏を埋めた時、先生は力一杯私の肩を叩いて言はれた。『確かりしろ、死んだつて又天國で會へる』。

私は最早オルガンを練習する必要なきを覺つて止めてしまつた。其に氣付いて先生が、『オルガンは物になりさうもないか』と問はれたので私は本當の事を答へた先生の御返事は無かつた。私が又『藤井先生も御病氣勝でしたが先生程寢てばかりは居られませんでした』と言ふと先生は沈痛な御聲で、『さうだ、藤井君の方がよく働いた』と仰せられた。あゝ何と云ふ冷い私の心であつただらう。

御病氣は愈々進んだ。絕食、咯血、呼吸困難が續き、其間注射によつて僅かの安靜が保たれた。其僅かの安靜の時に先生は言はれた、『死に臨んで急に高尙な考に成らうとしても何うにもならない、日頃の考より一歩も上に上れるものではない。それ故每日を聖く正しく活きる事が何より大切である』。又來世の事をどんな風に考へるかと問はれたので夫人が單純に、其實在と其處にて愛する者との再會を信じます、と答へられ私も其に同意した。先生は『單純にさう信じ得れば幸福だ。其信仰を毀さうとはしない。併し來世の問題は今少しく深刻だ』と仰せられた。私は其に答へる言葉を知らなかつた。只私の心に大いなる愁ひが生じた。

恐れてゐた日は遂に來た。私は記憶を辿つて其日の樣を記さう。八月四日の夜十時頃先生は咯血と共に烈しき苦痛に襲はれた。看護婦は直ちに注射を行ふた。私達は憂ひつゝも間もなく鎭まるものと思ひ只管それを祈つた併し先生の御眼は充血し、瞳は天井の一點を見つめて動かない。皆互に顏を見合せた。やがて先生は呻くやうに『我が靈を汝の聖手に委ぬ』又『全世界の凡ての病者の苦痛に同情す』と言はれた。私は愕然とし宙を飛んで醫

師へ走つた。馳せつけた醫師は直ちに看護婦を促し胸と兩腕とに十數本の注射をした。そして夫人に明朝までは保たないと告げた。夫人と母君と御子達が大聲に呼はつても答は無い、只烈しき呼吸のみ。私は又御近親への電報を打ちに走つた。歸つた時先生は兩腕を高く斜に差上げて居られた。其が十字架の御つもりか又は萬歳の形かを其時私は考へなかつた。恐らく其兩方であつたのであらう。私は馳け寄つて『私が判りますか』と言つて見た。先生はぢつと私を見つめて默頭いて下さつた。私は急に悲しくなつて其處へ泣き崩れた。意識を回復された先生は私に、出來るなら席を外して欲しい、と仰せられた。私は入口の外に出た。先生は心急かれるもの丶如く早口に、キリストを信ぜしめられた事を感謝し、家族も同じ信仰により共に御救に與らしめ給へと祈られた。そして夫人に讃美歌『ちとせのいはよ』を求め御自身も共に聲を合せられた。歌ひ終つて少時の後、『今度の咳で愈々お別れらしい』と言はれた。息つまる樣な沈默があつた、最後の咳は併し出ない。私は堪えられなくなつて枕頭に馳せより、最後のお別れを言はせて頂きたいと願つた。先生は早口に、『ウン、聞く、何？』と言つて私を見つめられた。私は容易に言葉が出なかつたが漸く是だけの言を云つた。『本當に僅かの間でしたが大そう近くして頂いて有難う御座いました。天國へ行つてから種々の事を敎へて頂きます。天國へ行つてからも先生はどうぞ私の先生であつて下さい』。先生は『うん、うん』と云つて一々默頭いて下さつた。そして私に、『君は誠實であつたけれども才能は乏しい。もつと勉强しなくては不可い。そして一人の人として眞面目に生きて呉れ、僕には大そう善くして呉れた、有難う』と仰せられた。あ丶何と云ふ事であらう。是が私への最後の御言葉であつた。併し私は嬉しかつた。私に斯う言つて呉れた人は今まで一人も無かつたのである。そして今後も無いであらう。私が尙去り兼ねてゐると先生は『今は最後の時で餘りに嚴肅だ、家の者に後の事を話し度いからどうかしばらく下へ行つて呉れ』と仰せられた。私は階下の室に退いて祈つた。併し祈は言葉を成さなかつた。少時して私は病室へ呼ばれた。先生と母君と夫人とで主の晩餐を憶えられ、其さかれしパンの一つを私に賜はる爲であつた。先生は、『是ですつかり爲すべき事は爲し、言ふべき事は言つた。もう何時お迎へが來てもよい』と云はれた。其先生の御顏には最早先刻の苦悶や焦燥の色なく、御聲も落付いて居たので私は又希望を取戻した、併し其は空しかつた。醫師は先生の御回復を絶望して其爲に手を盡す事を止め、只苦痛を和ぐる方法を取つたのであつた。死

は先生の御身體の半を領して腹部は太鼓の如く張り、腰以下は感覺無く『鉛の樣に重い』と仰せられた程であつた。而も、『死よ汝の勝は何處に在りや』であつた。先生は母君には、『どうぞキリストを信じて下さい。それでなければ天國で御目にかゝれません』と願はれ、夫人には御子樣達の御養育、別ても望樣の事を懇ろに依賴され、又借りた書籍の返還、雜誌、原稿の處理、永眠の御通知方に至るまで細々と命ぜられ、私には勉强して知識を得、善き生涯を送ることを訓し、又看護婦に向つては『どうです、基督信者の死方は他の人と違ふことが判りましたか』と言つて死に對し完全の勝利を宣告された。誠に其餘裕ある御心持と平和な御顏とからは、何うしても先刻の樣な切迫した氣持が起らなかつた。そして多くの友人の名を呼んで友情を感謝し、殊に或る方が再び基督に歸られん事を心から祈られた。それから聖書を取りロマ書八章十八節を讀まれた。私も其處を開いて讀んでゐたが先生の御聲が苦しさうなので私が聲を出して助けた。すると先生の御聲は消えた。私が二十五節を讀み終ると先生は大聲に、『よし！、コリント後書五章!!』と命ぜられた。續いてヘブル書十一章、コリント前書十五章を命ぜられて私が讀んだ。夫人と私とが讃美歌『また逢ふ日まで』を歌ひ先生も時々聲を合せられた。歌ひつゝ私の聲は涙に曇つた。歌が終ると先生は夫人に、『もう是程苦しんだのだから最後は安らかに眠らせて呉れ』と言はれ、夫人が『どこに聖旨があるか判りませんから最後まで戰つて下さい』とお答へになると、『さうか、最後まで苦しまなくては卑怯か、それでは注射しやう、併しまあ助るまい、奇蹟などは期待出來るものでない』と仰せられ注射を受けられた。そして絶筆にとて、『主イエス・キリストを信ずること、是人の至上善。私の一生の經驗』とお書きになつた。未明に姉妹方が見えた。私には役所を休んではならぬと嚴しく命じて後、先生は疲れて眠に入られた。私は朝露を踏んで裏の山道に出で死者をも活かし得給ふ御方の聖名を呼んで祈つた。御近親の方が多勢見えてからは私は病室に入ることを成可く差控へ、時々御樣子を見に上つた。最早御苦しみは外に現れず、只次第に御呼吸の細く弱くなり行くのを感じた。先生は愈々召され給ふのかと眞劍に考へだして私は懊惱、煩悶、心も狂はしくなつた。又先生の御苦しみに對し本當にお察し仕方が足りなかつた事を心から悔いた。其夜天は近來稀な大雨を降し此善き人の死に涙した。私の顏にも涙は瀧津勢と流れた。

翌六日の晝頃私が病室に入つた時『先生は『愈々お別れの時が近づいた』と仰せられて、母君、夫人、姉妹方

三人と最後の訣別を爲された所であつた。私が枕頭に座ると先生は優しく、『こつちへお出で』と言つてお顏の見える所へ私を招じて下さつた。其平和な、親しみ深き御顏と、微笑を含んでじつと私を見つめて下さつた優しきまなざしとに、私は先生が私の過失、又私への御不滿を皆許して下さつた事を知つた。併し私は意氣地なくも先生の御顏を永く見つめる事が出來ず、此大切な場合に一言も云ひ得なかつた。先生は『確かりせよ』と私を勵まし三度、勉强して知識を得よ、と仰せられた。私が是程先生の憂であつた事を思ひ眞に悲しく思ふ。次で三人の御子樣を呼び、一人、一人の頭に手を置いて祝し、善き人になること、嘘を言つてはならぬことを訓された。病室に居る人が多勢になつたので先生は、全部の人の顏が見えるやうにベットの位置を變へて欲しい、と仰せられた。そして周圍の一人一人に手を伸べて握手を求められた。最後の機會である、私は滿身の力を込めて其手を握り、凡ての思ひを只一言に籠めて言ふた。『どうぞ天國で憶えて居て下さい』。先生は確かに默頭いて下さつた。是が先生との最後のお別れであつた。其後先生の御口近く酸素吸入器を持つて居る私を時々見られたが、その眼に最早力は無かつた。かくて翌七日午前一時半、安らかに、眞に安らかに天の休息に入られた。

私が御遺骸を守つてゐた時夫人が私に預金の證書を渡して行かれた。其は先に私が先生に捧げたものを先生は御永眠により受けた理由を失ふから私に返すと遺言されたとの事であつた。私は其證書を開いて見て泣いた。證書の宛名は私の代理なる先生である。又其日附により振替が着くや否や直ちに此手續を取られた事が判つた。私が愚にも只管自分の喜の爲になした事を、先生はこんなに重荷とせられたのである。而も私の心を傷けじとて之を受け、死に至るまで其重荷を負つて下さつた深き愛よ、誠實よ。私は先生の面覆を取り、すでに冷きその耳に口を當てゝ、過失と不明とを謝した。また先生の御遺言を守り、勉强して知識を得、眞面目に、正しく、善き生涯を送るべきを誓つた。そして鋏を取つて先生の御頭髮一房を頂き、『また逢ふ日まで』の形見として私の懷ろ深く納めた。（一九三三・九・一〇記）

書簡

七月二十七日　山谷省吾

最近東京三谷隆正君から、貴兄が御重態御臥床、面會謝絶安靜を絶對に要求されてならるゝことを聞きました。最近一年來の貴兄の御元氣は或はかゝる結果に至るのではないかと暗に氣遣つてをりましたが、全く同情に堪えません。貴兄としては或は御本懷であるかとも恐察しますが、御家族御近親の御方や友人達の御心痛察するに餘りあります。私自身は平素貴兄の信仰の勇氣に敎へられ勵まされ、又神に感謝してゐる者の一人でして、今御病狀を耳にして更に一層嚴肅の思に打たれて居る次第です。凡ては神の御手の中にあり、御旨の成るより外ありませんでせうが、願くは常に主の平安と平靜とが貴兄の上にあります樣に、病苦が輕減されます樣に、そして願くは主が何とかして癒し給ひ、君をして再び地上の活動を許し給ひます樣祈らざるを得ません。他に云ふべき語を知らず、この盡さゞる手紙を差上げます。

早々不一

八月六日　山谷省吾

病床に苦しめる江原兄、君が日本人に代つて苦しんでゐるのだと云ふ語は、少なくとも僕に關する限り眞實だ、君は僕の爲めに、即ち僕が本來苦しむべくして苦しんでゐないことについて、僕に代つて苦しんで呉れてゐるのだ。僕はこのことを思ふで堪え難い思にせめられる。そして君がこの苦惱を通じて記す語の何と云ふ眞實さだらう。恐らく内村先生と雖も、かゝる痛切な語は發せられなかつた。君の勸めに從つて僕も「現在の暗黑時に當つて、義務を果す」であらう。君の證明に依り僕も唯一の導者としてのイエス・キリストの十字架と復活とを信賴しやう。君の後に從つて僕も希望に生き平安の中に行かう。君の生活は眞の意味で大成功、万歳であつた。願くは神の御旨により回復が許される樣に、平和が君の番兵として君を護る樣に、祈つて止まない。

住谷天來

拜啓、時下孟夏酷熱の候遙に承及候處、御父君事豫て御病氣の處御藥石無効遂に永眠被遊候事誠に御愛惜の至に不堪御全家の御愁傷眞に御洞察申上候、實は八月號に載せられし死に直面してを拜讀して心私に深憂を抱き君の前途を氣遣ひ乍ら神かけて御快癒を祈り候甲斐もなく遂に不死の客として我らに先んじて御昇天被遊候事、眞に邦家の爲め將た我が精神界の爲め多大の損失として愛惜に不堪次第に御座候、老生は未だ一度も父君とは御目にかゝらず候へ共、既に雜誌に於て、御高著に於て、特に最近は鎌倉講演の記事により欽仰思慕措く不能、何れ幸機を見て相遇ふの時を樂しみしものに候處、今や一片の訃音に接しその望みを斷絶せし事、返す〳〵も千秋の恨事と存じ候。

（下略）

畔上賢造

（前略）平常御無音に打過ぎ、御訪れも致さず、又御手紙も差上げず、種々申上度きこともありましたのに、その意を果さず、今となつては甚だ申譯なく存じてゐます。然し御雜誌發行後御病苦の中より毎月健筆を揮はれ愛する日本と主との爲めに御働き下され殊にこの數ケ月に至つては、筆端頗るさえ渡りて前途の希望を思はせる狀態でありましたのも偖まるゝ心切なると共に又御健闘を祝する心つよくありますので、最後に至つて益々光を放つた御生涯は非常に貴いものと感ぜられ感謝の至であります。靈的新日本建設の一土臺石としてこの四十有餘年の御生涯は非常に貴く又我々共としても御禮する心をもたせられてゐます。（下略）

金澤久四郎

矢張り江原先生は此土を去るのがみ旨だつたのですか、御通知を得て悲みの帳にのみ打勝たれました。

不治の病者なる私も涙を流して平伏しました、「私共はすべて眞理の敵に向つて新に宣戰を布告します」と叫んだ藤井先生が召されて氣落ちした私は江原先生こそ今の日本で唯一人の眞に不治の病者の心境を慰めて呉れる御方であつたのです。然るに八月號の聖眞誌に「宇宙の完成以外に我に慰めなし」の言葉は私に對する遺言でありましたが、あゝ悲壯深刻なる先生の御心中を憶ふて涙なきを得ません。

先生は如何に生命に徹し至誠に徹し、基督に徹して居つたかいよ〳〵泌々と味はされます。

斯かる大なる戰士を先生に有ちし私の誇の大であると共に、之を喪ひし恨も大きくあります。

藤井先生を喪ひまた江原先生を喪ひて我等病者の淋しきを感じます。しかし、凡て神の御意であります。江原先生仆れても必ずや生きてある以上の力を我等不治の病者に遺つてくれることを信じます。

我等は江原先生の遺された劍を取上げ先生の屍を乘り超えて前進するこそ、先生の第一番に御悦びである事と信じ、涙の熱禱を捧げました。（下略）

内村祐之

拜啓江原さん遂に召されたよし承りまことに悲しみに堪へません、我々の想像も出來ないような永い病苦からのがれられて江原さんの魂がホット一息をつかれたことでありませう、然し江原さんを送られた御遺族のことを思ふて暗然と致します。何卒天よりの力强い慰めの皆樣の上に下らんことを祈ります。大變輕快されたと聞いては喜び今度惡くなつたと云つては深く心配して居た我々でした、今度の聖書の眞理を拜見して江原さんの魂の奥底からの叫びを聞いた樣に感じて深く感動されて居ました、實に立派な勇ましい生涯を送られたと感銘して居ますあの絶筆で逝かれた江原さんに普通の死者に見られない平安があつたし、又送る御遺族又我々に非常な心安さがあつたと信じ

ます。總てが無限大の企劃の中の一つの意味のある出來事であつて總てがよいことであるのを信じます、悲しみの中にも御平安のあらんことを祈ります。

草々

松本勇治

わざおはり靜かに沈む夕日こそ朝日となりて天昇るなり

荒川皎

肉の御苦しみが他愛的となり十字架の感謝となりませう。けれどもこの御苦しみは矢張り御苦しみであり耐え難き苦杯と存じ上げます。何うか神樣最善をもつて、先生を御護り下され、神樣の御聖旨の成就されん事を切に御祈り申上げます。何時も私共は先生の爲め御祈り申して居ります。何んか知らんが先生に大きい愛の負債を強く感じます。この負債は私には容易に御返し出來ませんがせめて如何なる場合に臨みましても十字架を仰いで主樣の御愛を確信し感謝して余の生涯を送りたきものと唯だそれのみならずこの喜びを一人へでも御分ち致したきものと希つて居ります。其處には御心情の發露が血をもてせられて居る事を感ぜしめられ、何時も深く感謝しつゝ先生を通して强く潔く先生の集團のものがあらしめらるゝ樣御祈り申して熄みません。（下略）

中川順助

江原先生御永眠の悲報に接し、哀悼に堪えません。御一家皆樣の御悲嘆如何ばかりかを御察して胸の痛むのを覺え謹みて御悔申上ます。

先生には直接御教へを受けたものは殆んどなく、紙上を通じてゞありますが、御病弱の御身を以て眞理の十字軍を起し、その先頭に立つて戰はれ、あの力强い聖靈に燃る御言葉と御日常とは如何に鈍い私等を勵まして載いたか計り知れないのであります。洵に感謝に堪えません。先生御大患の事は先月淺野先生より承り、只管御恢復を祈り續けてゐたので御座います。今この悲に遭ひ私共の力落しは非常なものであります。

昨夜は祈禱會を開き先生の殘されたる足跡を偲び、一同感激し地上にて再び先生の御言葉に接する事は出來ず淋しいのでありますが、御遺訓に從ひ、私共も一兵卒として續いて戰ひたいと祈り、御遺族の上に神樣の豐かなる御慰勵を禱つたのであります。（下略）

大澤弘香

謹みて啓上いたします、去る拾日に御殿場に於ける聖書研究會へ來りまして始めて先生の召され給ふたことを拜聽いたし驚きました。實は最近聖書の眞理誌上に御靈筆益々精彩に輝くのを拜見いたして御容態如何かと秘かに御案じ申上げ、御殿場の會もはてなば平素誌上を通じて御蔭を蒙つてゐる御禮を申上げ御見舞も致したいと考へて出發いたしましたのでした。然るに意外にも御長逝のことを承りまして誠に感慨無量で御座いました。常に心にありながら遂に御生前に親しく御拜眉の機を得ま

せんでした、今更ながら短き地上の幕屋に於ては明日ありと思ふ心の危險なるを痛感いたしました。（中略）

先生が爲されし如き血を以つてする眞理の證明こそ、誠の傳道であり且夫が又本當の人生の送り方であるとは申しながら近年のやうに引續き最も善き羊を切りて、呼び上げ給ふ神樣のなされ方を考へますときに、是はどうしても我國の現狀と我々の魂の狀態がかゝる尊き血潮を澤山に御要求なさるのだと拜察する外はありません。且つは殘された者の責任も重いと云はざるを得ません。（下略）

小西友作

先生御永眠の御知らせに接して痛歎に不堪候、永年病苦をも顧みず生命を賭して專心福音の爲に御奮闘を續けられ候御事故豫じめ今日の事皆々樣にも御覺悟の事と拜察奉上候、地上の袂別を再會の彼の日まで、又癒されがたき悲しみたるを思ひてはるかに御同情禁じ得ず候、何卒主の御慰御家族皆々樣の上に豐かに、聖旨の如く成らん事を祈上候。（下略）

照井眞臣乳

年老いし我はのこりて若き君
天つみ國に先立てるかも

釘宮德太郎

承り候處先生には遂に御永眠遊ばされ候由、現下の日本にとりては是非共在つて戴かればならぬ御方必ずや今一度起たせらるゝ御事と一心祈願罷在候處誠に國家の爲め殘念至極に奉存候、併し神樣としては此の上先生の御苦闘を見るに忍びずして御召し相成たる御事と存ぜられ候、されば何れ御國に於ては主の御前にて、内村、藤井兩先生を始め皆樣打揃つて喜び迎えられ居る事と存申候。

思へば私共この五月御伺ひ申上候時がお別れと相成申候、今やあの時の有樣が思ひ出されて何んだか夢のやうにも有之候、併しやがて近き内に私共も來る身亦あの時のやうに喜び御迎へ下さるのであらう事を信じて夫婦相慰め居る次第に候。

一粒の麥地に落ちて死なずは唯一つにて在らん、もし死なば多くの果を結ぶべしとある如く必ずや先生の死も多くの果を結ばんが爲めと存じ候。

江藤治吉

先生御養生叶はせられず、遂に御永眠遊ばされ候と承り洵に御名殘り惜しき極みに御座候。

皆樣の御悲傷の程拜察するだに涙無きを得ず候、思へば今日程痛切に先生御在世の必要を感ずる時は無之候へ共、聖旨洵に計り難く候、さり乍ら神樣は先生の短き地上の御生涯をもつて大なる御旨を顯はし給ひて多くの靈を生かし勵まし力附け給ひ且つその御遺業の永遠無窮にして殊に今春來最後の目覺ましき御奮闘の跡を思へば、先生の御生涯こそ全き善き戰闘を戰ひ走るべき道程を盡されしものに候、

先生の爲めに榮冠を備へ給ふ神樣は必ず御遺族の爲にも善き途を備へ給ふ事を信じ申候。（下略）

藤澤武義

前略、今日文字通り生命がけの眞劍を以つて日本國を思ひ、その救のために奮鬪なされし點に於て恐らく先生の右に出づる人は無からんと奉存候。

今日先生を失ふは日本に取り如何ばかりの損失に御座候はん併し凡ては天に在す至上者の御方寸の中に在る事、吾等は只々聖旨に絶對に服從する事のみが最大緊要事と奉存候。

そして吾等の最高最大の希望確信は先生最期の御誌上の御言葉の如く全宇宙の完成榮化是にて御座候。

只今は御一統樣大なる所の御悲嘆に御遭ひ相成候はんも來る時には故先生と救主の靈前に御再會相成事に御座候、その時には、今日昭和最大の殉教者たる我が江原先生は卓越絶大の御祝福御榮光の御座に在る事を御一統樣始め萬人が知りて仰ぐ事ならんと奉存候。願はくは故御尊父樣の御高志を嗣がせられ天を仰ぎて、この滅びんとする日本國の救の爲め御奮起あらん事を御祈申上候。（下略）

田宮仲子

（前略）今日もつくづく思ひました、今後はもう戰ひの無い悲しみ苦しみのないイエス樣の御許にありし日の涙を熱い御親心の愛の御手に拭つて頂いて數多い先に召された方々と共に此處では思ふ事すら出來ません樣な御慰めを頂いて御出遊ばす事と存じまして限りない御哀惜の心を私共と共に慰めて頂いて居ります。そうで御座いませんでしたら、ほんとうにつきませんほど惜しい〳〵御名殘で御座います。先生の此世からお去り遊ばした事は大きな一つの光りが消えてしまつた樣にがつかり致しましたが不思議に私には以前にまして力强い光りが輝き出して參りました。先生は生きてゐらつしやいます。たしかに活きてゐらつしやいます。血をもつて戰はれた御生涯を通じて確に私の前に又多くの方々の前に生きてゐらつしやいます。生命がけで戰はれた眞理の戰を私共も又生命がけで證しせずにすませぬと存じます。（後略）

佐藤勳

謹啓御尊父樣御永眠の報に接し誠に哀悼にたへません、かねて御病崩の御體をもて祖國の爲目ざましい聖戰をつゞけて居られましたのに、日本が益々先生の如きを必要といたします際に先生の御逝去は惜しみても餘りあります、大きい倉より古き蓄へある葡萄酒を出して惜しみなく振舞はるゝ樣な先生の該博なる聖書知識と徹底した信仰より流れ出づる御研究によつて長い間御指導いたゞきました小生にとつては本當にさびしくなりました。今より後先生は重い大きい親石になられて祖國のため、福音の爲め人類のため救極を完成されることでありませう、遺された御子樣方並に奥樣の上に天よりの御恩寵と御加護晨に夕に裕ならんことを。

成澤秀太郎

御叔父上様御永眠の御報に接し誠に驚愕と哀惜の感に打たれ既往を偲び未來を考へて思止まる處を知らぬ次第であります。

病を得て職を退かれてからは、全く十年一日の如く、信念の闘士として御活躍なされ、その雄々しい御姿は幾多の當世懦夫たして起たしむるに充分のものと思ひます。武人の戰場に死する覺悟をもつて、御臨終まで筆を捨てられなかつた御意氣吾々の深く感嘆して措く能はざる處でありました。無常は人世の常とは云ひ古された事ながら、今更に人の世の無常を恨みと悲しみの眼をもつて凝視させられます。

御叔母上様、限りある此の世の事に餘り御心を傷めさせられずに、天地自然の大きな波に漂ふのが人世なのですから直ちに御叔父様を御送りした後の生活に力强く第一歩を踏み出しなさいませ。運命に抗爭して力强く三人の若い方々の爲に御奮闘下さい。斷つて行へば鬼神も之を避けると申します。御落膽御失望は第一の敵、戰へば朗かな運命の大道は開ける事必定であります。（下略）

和氣とらゑ

江原先生が遂に御昇天なさいましたとの事を八月九日上京いたして夕方承りました。そして御殿場にて黒崎先生に御目にかゝりまして御臨終にも先生が御出になりました由承りまして召されました江原先生もどんなにか御安心遊ばして逝かれた事でございませうと御察しいたして居ます、一度御生前の御厚恩に對し御禮を申上げたいと存じながらも御遺族様の御名さへ存じませぬ私、今日まで思ひつゝも筆をとらずに過しました私の義弟に當りますものが今年一月永眠致しましたが今年の一月號まで聖書の眞理を讀ませていたゞいて居ました、近頃書籍など整理いたして見ますと江原先生の思想と生活や聖書の眞理を大切に製本いたしてございます。そして先生からいただいたおはがき二枚大切に保存してございました、短い御言葉の中にも魂をさゝれるやうな御體驗を通されし御言葉に今更ながら私も心うたれて居ます、御目もじ申上げた事もない私でさへ惜しくて〳〵たまりません、美しい聖徒の御足跡を御筆蹟によりまして之から偲ばせていたゞきます。御誌八月號も涙ながらに拜見致しましたので御重態でゐらせ給ふ事は存じ上て居ましたがかやうに早くお旅を急がせたまふとはまことに夢心地が致します。思想と生活時代から拜借して讀せて頂て居ました、かつて大學をお辭職になります時のお覺悟こそは私にとりて終生忘れ得ぬ教でございました、あの時以來私は信仰なかりし故に夫をむざ〳〵と殺したとさへ思ふ樣になり居ます、それは病弱な夫が私と多くの子供の生活の爲めにどたん場まで勤務してゐた事がもうたまらなくたまらない思ひがこみ上て參りました事を今なほはつきり致して居ます、そして夫れは愚かな妻故に不信の妻故にと文字どほり悔ひの八千度、せんもなく、せめては殘る生涯をと思つたのでございます。（下略）

終刊號編輯の後に

もつと早く皆樣の許に終刊號を御送りする積りでございましたが、南洋群島御視察中の矢内原忠雄氏の御寄稿を仰ぎ度く同氏の御歸省を御待ち致しこんなにおそくなつて仕舞ました。けれどもこんなに眞情溢れる御寄稿を頂いて御待ちした甲斐は十二分に償はれました。又簡單に簡單にといふ御注意を受け乍ら遂こんなに大きなものにして仕舞ました。皆樣からの御厚意の御寄稿を全部掲載さして頂きました爲めで御座います。編輯の下手なことは幾重にも御許しを願ひます。

第十七頁まで掲載した故人の物は或は机の引出しに奥深く藏してあつたもの、或は未だ草稿のみで出來上つてゐないものなどを集めたので御座います。

イエス。キリストのみは九月號に載せるために用意してあつたもので御座います。從つて他の部分は八月號に掲載したものよりは以前に執筆したものばかりであります。「そんなものを載せるんぢやない」といふ聲が時々聞えます。

高木八尺氏はこの夏太平洋平和會議に於て、世界平和のため御活躍遊ばされましたが、その御出發前の御繁務の中から八月號のために御寄稿下された玉稿で御座います。三度目の校正を終えた今日パンフで江原の死を知られて悲しみ深いお手紙をニューヨークより頂き感慨無量で御座います。

其の他はすべて、友人、先輩諸氏が故人の靈前に捧げて下すつたものばかりで御座います。

河合榮治郎氏は現在東京帝大經濟學部の重要な教職にあらせられ、故人の最も誇とする友人の一人で御座います。輕井澤御避暑中殊に御不快の中をおして告別式に弔辭を御述べ下すつたことは一同の無上の喜びで御座いました。

又南原繁氏の御感想は故人が最も力說した所を實質以上に價値づけて下さいました。故人の喜や大で御座いませう。

今泉源吉氏は神學校、自由學園、女子大學に教鞭をとつて居られる旁ら單獨で傳道に專念遊ばして居られます、又日本歴史の御研究深く故人の尊敬もこゝに少なからざるものが御座いました。又帝大共助會の御仕事その他の御多忙の中からの得難い御寄稿で御座います。

讀者の皆樣から澤山の御悔狀を頂き、全部記念に掲載さして頂き度く存じますが紙面の都合上止むなく一部分だけ御許を得て拜借致しました。

秋晴の心地よい此の頃となつて、とりわけ激しかつた今年の酷暑を一層うらめしく思はれてなりません。鎌倉の岩間岩間は處せまきまでに、まんじゆしやげの花が一ぱい咲いて居ります。

思想と生活創刊以來六年、幾度か廢刊しやうかと云ひつゝ今日迄不思議に繼續し、最後の病床まで筆を持ち得たことは何といふ仕合せで御座いませう。今ひとり最後の號を編輯し終えて感謝と寂寥の感に打たれます。

永い間祈を以て、又いろ〳〵と雜誌刊行に御援助下さいました皆樣に厚く御禮を申上ます。

全集は出ないかといふお問ひ合せを頂きますが出さない積りで御座います。但し最近三年間に書いたものゝ中、殘して置き度いものだけと、それに未發表のものと日記とを（エレミヤを除く）一書にまとめてこのクリスマス頃までに出版致し度い心積りで御座います。

終りに皆樣の御健康をはるかに御祈り申上ます。

社告

本誌はこの號を以て廢刊致します。本號は平常の約三倍になりましたから、定價を五十錢と致しました。御諒承願ひます。

『聖書の眞理』前金の殘額は順次に計算して御返金致します。

鎌倉講話會は解散致します。併せて御通知申上ます。

聖書の眞理社

アルベルトシヴイツエル著　野村實譯

水と原生林とのはざまにて

向山堂發行
代價一圓三拾錢

是はシヴイツエル博士の赤道アフリカ傳道手記である。象と豹との出沒する原生林のほとり、河馬の群れ住むオゴエ河畔に、現代文化の最高水準に立つ教養人シ博士が、暗黑大陸の土着民を相手にして、基督の福音を傳へ且醫療を施しつゝ、何を見、何を感じつゝあるか、おほよそ同胞人類の休戚に對し何らかの關心をもつ限りの人は、深き感銘なしに博士の此手記を讀むことはできないであらう。譯者野村君は眞摯なる基督者にして醫者、譯文暢達にして熱情を籠む。本譯書の賣上純益は全てシ博士を通してアフリカに往きつゝある。

（三谷隆正）

江原萬里著

宗教と國家　定價一圓八十錢　送料十四錢

——エレミヤ記の研究——

聖書的現代經濟觀　定價一圓二十錢　送料八錢

思想と生活合本　送料不要

二、三年度　第一卷　二〇〇
四年度　第二卷　一、八〇
五年度　第三卷　二、三〇

聖書の眞理合本　送料不要

六年度　二、五〇
七年度　二、五〇
八年度　二、三〇

聖書の眞理定價（送料共）

一部　二十錢
半年（六部）　一圓十錢
一年（十二部）　二圓十錢
海外一年　二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし。

昭和八年九月廿八日納本
昭和八年十月一日發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三
編輯印刷兼發行人　江原祝

東京市澁谷區向山町九七
發行所　聖書の眞理社

東京市神田區三河町三ノ四
印刷所　今井印刷所

東京市淀橋區百人町二丁目二五四
發賣所　獨立堂書房
振替東京一九六八番

【本誌定價五十錢】

（昭和三年二月十六日　郵便物認可）　聖書之眞理　第七十號